長崎県文化財調査報告書　第186集

一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅰ

小野F遺跡

2005

長崎県教育委員会

はじめに

私たちは，地下に埋もれた過去の人々の生活の様子が分かるものを，埋蔵文化財と呼び，埋蔵文化財の発掘調査により当時の人々の暮らしが私たちの前に姿を見せ，先人の苦労や工夫を身近に見ることができます。この埋蔵文化財を損なうことなく保存・活用し，そのままの姿で後世に伝えていくことが，私たちに課せられた課題であります。

県教育委員会は，これまでも各種開発事業について，協議・調整を重ね文化財保護に努めてまいりました。

西九州自動車道路建設事業につきましても，道路建設計画当初から可能な限り保存に努めていただくよう，県教育委員会は国土交通省および関係機関と協議を重ね，その結果７箇所の遺跡につきましては，記録保存をすることになりました。

発掘調査は，長崎県教育委員会が国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所の依頼を受け，平成13年度から平成19年度までの計画で実施しております。

この報告書は，通巻第Ｉ分冊として佐世保市に所在する小野Ｆ遺跡を収録したものです。残りの６遺跡につきましても，年次計画に基づきまして逐次刊行の予定であります。

本書を，文化財保護や地域の歴史を知る資料として活用いただければ幸いです。

平成17年３月

長崎県教育委員会教育長
立石　　暁

例　　言

Ⅰ　本書は，一般国道497号佐々佐世保道路（西九州自動車道）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第Ⅰ分冊である。

調査は長崎県教育委員会が国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所の依頼を受け，平成13年度から平成19年度までの計画で実施している。

Ⅱ　当該遺跡に係る遺跡は，小野Ｆ遺跡，門前遺跡，竹辺Ｃ遺跡，竹辺Ｄ遺跡，武辺城跡，九州文化学園構内遺跡，末永遺跡の７箇所数え，発掘調査が終了した小野Ｆ遺跡について本書に収録するものである。

Ⅲ　今回報告する遺跡の内容は下記のとおりである。

1　小野Ｆ遺跡の範囲確認調査は，県教育庁学芸文化課が実施した。

本調査は，県教育庁佐世保教育事務所が担当し，発掘調査業務を㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託して実施した。

2　小野Ｆ遺跡　：長崎県佐世保市小野町に所在

範囲確認調査：平成13年11月20日～平成13年11月30日まで実施

調査担当者：福田一志　県学芸文化課主任文化財保護主事（現原の辻遺跡調査事務所主任文化財保護主事）

東　貴之　県学芸文化課文化財調査員（現㈱埋蔵文化財サポートシステム）

本多和典　県学芸文化課文化財調査員（現深江町教育委員会）

本　調　査：平成15年５月12日～８月12日まで実施

調査担当者：副島和明　県佐世保教育事務所専門幹(現県佐世保教育事務所文化財調査課長)

川畑敏則　県佐世保教育事務所文化財保護主事（現県佐世保教育事務所文化財調査課文化財保護主事）

織田健吾　県佐世保教育事務所文化財調査員（現県佐世保教育事務所文化財調査課文化財調査員）

3　発掘調査業務の中で，遺跡の空中写真撮影及び遺構の実測等で，松崎卓郎氏，渡邉康行氏，㈱埋蔵文化財サポートシステムの協力や出土遺物についてのご教示を得た。

4　本書の執筆は，副島，川畑，織田が分担して行い，執筆者は各項文末に記した。

5　Ⅱ－１－(1)は，下山正一氏（九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門助手）に玉稿をいただいた。

6　自然化学分析は，㈱古環境研究所に依頼した。

7　実測図の標記は以下のとおりである。

・陶磁器の中心線を一点鎖線で記したものは，回転を行い図上で復元を行った。実線で記したものは，回転をせずそのまま図化したものである。

・染付等文様については，最大残存部が正面になるように配置した。

8　本書の編集は，川畑が担当した。

9　本書関係の出土遺物と図面及び写真類は，現在，長崎県佐世保教育事務所に保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査の端緒と経過……1
Ⅱ　小野Ｆ遺跡
1　遺跡の立地と環境
(1)　地理的環境……17
(2)　歴史的環境……19
2　調査の概要
(1)　範囲確認調査……32
(2)　本　調　査……35
3　遺　　構
(1)　縄文時代……39
(2)　近　　世……39
4　出土遺物
(1)　縄文時代
①遺物の遺存状況……46
②土器……51
③石器……53
(2)　近　　世
①陶磁器……59
②石・金属製品……66
5　ま　と　め……68
図　　版……77
Ⅲ　附　　編……139

挿　図　目　次

第１図　西九州自動車道佐々佐世保道路計画図……4
第２図　長崎県内西九州自動車道の計画状況……5
第３図　小野Ｆ遺跡周辺の地形及び地質の分布……17
第４図　相浦川流域の発掘調査が行われた遺跡……20
第５図　小野Ｆ遺跡周辺の遺跡……24
第６図　試掘坑配置図……32
第７図　土層柱状図……33
第８図　T.P.12東壁土層図および平面図……34
第９図　小野Ｆ遺跡周辺地形図および調査区……36
第10図　土層図……37

第11図　遺構配置図……38
第12図　C－5・6区ベルト内土坑……39
第13図　C－3区Ⅳa層中検出炉跡……40
第14図　C－2区検出近世遺構……41
第15図　C－5区検出近世遺構……41
第16図　C－3・4区検出近世遺構……42
第17図　C－4区検出近世土坑……43
第18図　C－6区検出近世遺構……44
第19図　D－5区検出近世遺構……45
第20図　小野F遺跡出土石器平面分布図……47～48
第21図　小野F遺跡出土石器垂直分布図……47～48
第22図　小野F遺跡出土土器平面分布図……49～50
第23図　小野F遺跡出土土器垂直分布図……49～50
第24図　出土土器……52
第25図　出土石器①……55
第26図　出土石器②……56
第27図　出土石器③……57
第28図　出土石器④……58
第29図　出土陶磁器①……63
第30図　出土陶磁器②……64
第31図　出土陶磁器③……65
第32図　出土陶磁器④……66
第33図　石・金属製品……67
第34図　長崎県内局部磨製石鏃出土遺跡分布図……69～70
第35図　融着・変形・降灰が見られる磁器……73
第36図　融着・変形・降灰が見られる磁器（参考資料）……74
第37図　長崎県．小野F遺跡B－3区における植物珪酸体分析結果……146
第38図　長崎県．小野F遺跡B－2区における植物珪酸体分析結果……146

写　真　目　次

写真1　小野F遺跡の地質……18
写真2　岩下洞穴……21
写真3　泉福寺洞窟……21
写真4　大智庵城跡……22
写真5　大門洞穴遺跡……22
写真6　菰田洞穴……23

写真７　下本山岩陰遺跡……23
写真８　四反田遺跡……25
写真９　門前遺跡……26
写真10　竹辺Ｃ遺跡……26
写真11　竹辺Ｄ遺跡……27
写真12　武辺城跡……27
写真13　小野Ｅ遺跡……28
写真14　殿原遺跡……28
写真15　小野Ｄ遺跡……29
写真16　小野Ｃ遺跡……29
写真17　小野Ａ遺跡……30
写真18　新田遺跡……30
写真19　新田中世墓址群……31
写真20　阿弥陀堂の石塔群……31
写真21　植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真 ……147

図　版　目　次

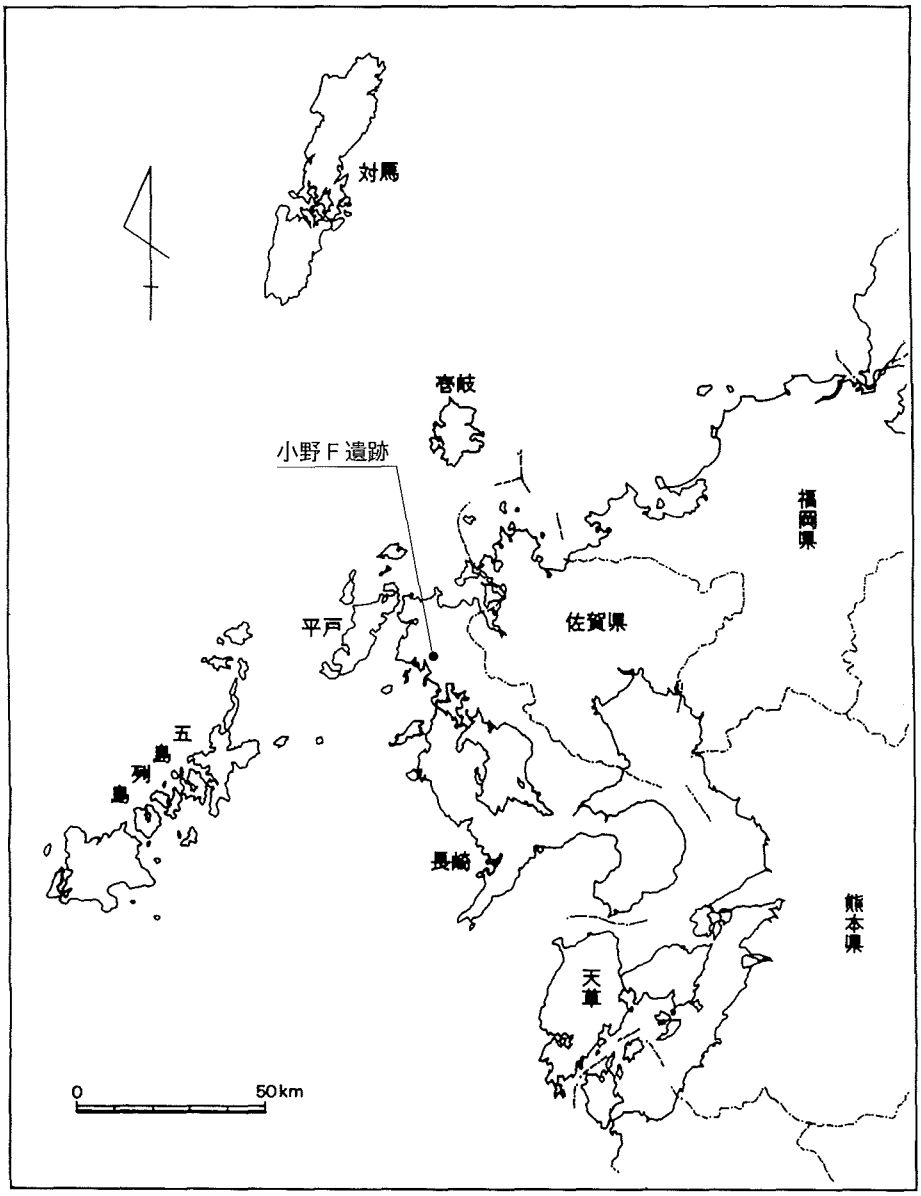
図版１　遺跡遠景・近景……77
図版２　範囲確認調査①……78
図版３　範囲確認調査②……79
図版４　土層の状況①……80
図版５　土層の状況②……81
図版６　土層の状況③……82
図版７　土層の状況④……83
図版８　土層の状況⑤……84
図版９　検出遺構①……85
図版10　検出遺構②……86
図版11　検出遺構③……87
図版12　検出遺構④……88
図版13　検出遺構⑤．遺物出土状況①……89
図版14　遺物出土状況②……90
図版15　遺物出土状況③．調査風景①……91
図版16　調査風景②……92
図版17　調査風景③．周りの状況……93
図版18　試掘時出土土器……94
図版19　出土土器……95

図版20　出土石器①（表）……96
図版21　出土石器①（裏）……97
図版22　出土石器②（表）……98
図版23　出土石器②（裏）……99
図版24　出土石器③（表）……100
図版25　出土石器③（裏）……101
図版26　出土石器④……102
図版27　局部磨製石鏃……103
図版28　出土した陶磁器……104
図版29　出土陶磁器①……105
図版30　出土陶磁器②……106
図版31　出土陶磁器③……107
図版32　出土陶磁器④……108
図版33　出土陶磁器⑤……109
図版34　出土陶磁器⑥……110
図版35　出土陶磁器⑦……111
図版36　出土陶磁器⑧……112
図版37　出土陶磁器⑨……113
図版38　出土陶磁器⑩……114
図版39　出土陶磁器⑪……115
図版40　出土陶磁器⑫……116
図版41　出土陶磁器⑬……117
図版42　出土陶磁器⑭……118
図版43　出土陶磁器⑮……119
図版44　出土陶磁器⑯……120
図版45　出土陶磁器⑰……121
図版46　出土陶磁器⑱……122
図版47　出土陶磁器⑲……123
図版48　出土陶磁器⑳……124
図版49　出土陶磁器㉑……125
図版50　出土陶磁器㉒……126
図版51　出土陶磁器㉓……127
図版52　出土陶磁器㉔……128
図版53　出土陶磁器㉕……129
図版54　出土陶磁器㉖……130
図版55　出土陶磁器㉗……131
図版56　出土石・金属製品①……132

図版57　出土石・金属製品② ……133
図版58　出土石・金属製品③ ……134
図版59　融着・変形等が見られる近世の磁器① ……135
図版60　融着・変形等が見られる近世の磁器② ……136
図版61　融着・変形等が見られる近世の磁器③ ……137
図版62　炉跡と調査が終わった遺跡 ……138

表　目　次

表１　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表……6
表２　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査一覧表……7
表３　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査計画一覧表……8
表４　縄文時代の土器観察表……51
表５　縄文時代の石器計測表……54
表６　長崎県，小野Ｆ遺跡における植物珪酸体分析結果 ……145
表７　小野Ｆ遺跡における花粉分析結果 ……150


対馬
壱岐
小野Ｆ遺跡
福岡県
佐賀県
平戸
五島列島
長崎
熊本県
天草
0
50km

Ⅰ　発掘調査の端緒と経過

Ⅰ　発掘調査の端緒と経過

(1)　建設省は，昭和62年６月30日に道路審議会答申に基づき，14,000kmの高規格幹線道路網計画を決定した。西九州自動車道は，高規格幹線道路網の一環として計画された道路で，福岡市を起点として，唐津市，伊万里市，佐世保市を経由して武雄市に至る延長約150km一般国道の自動車専用道路であり，九州西北部の地域経済の活性化，高速定時性の確保に大きく寄与することで計画された。

(2)　長崎県では，高規格幹線道路をはじめとする幹線道路網の整備については，県民の暮らしの豊かさを支える重要な課題として取り上げ，県内主要都市を２時間程度で結ぶ道路ネットワーク構想を策定し，景観や自然環境との調和を図りながら整備を推進している。

西九州自動車道の長崎県内での計画路線は，下記のとおりである。

「佐世保道路」　佐世保みなとＩＣから佐世保市矢岳町間（区間距離約2.9km）

「佐々佐世保道路」　北松浦郡佐々町沖田免から佐世保市矢岳町間（区間距離約９km）

「伊万里松浦道路」　松浦市志佐町から今福町間（～佐賀県伊万里市までの間）（長崎県内区間距離約９km）

(3)　長崎県教育委員会は，平成９年に建設省九州地方整備局長崎工事事務所（現国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所）と「佐世保道路」と「佐々佐世保道路」に関する埋蔵文化財の取扱いについての協議を行った。その後，現地踏査の依頼を受け，平成９年11月に分布調査及び平成12年12月に分布調査の補足調査を実施した結果，発掘調査が必要な面積は92,100㎡となった。

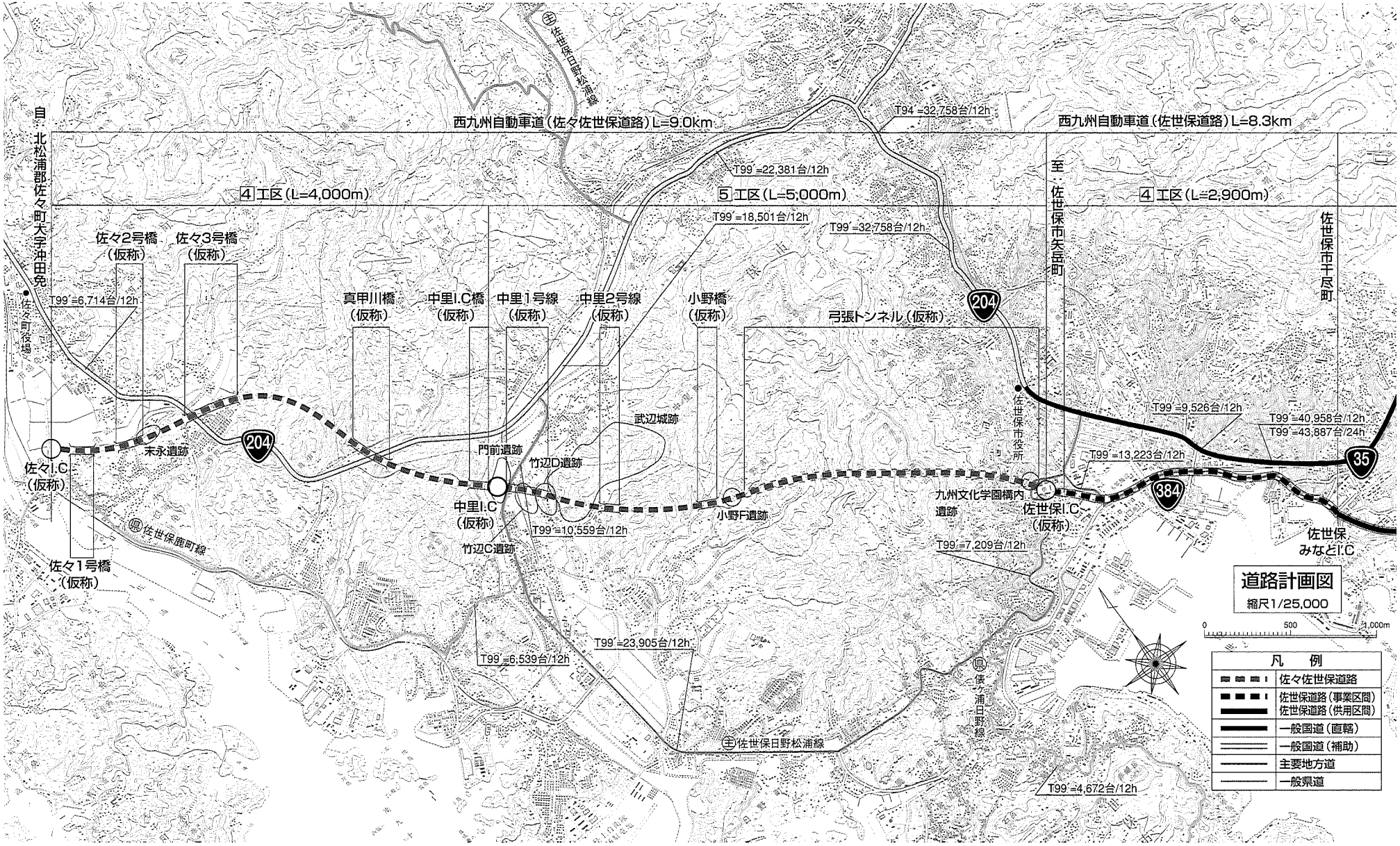
(4)　長崎県教育委員会は，平成13年度から当該路線内の埋蔵文化財に関する範囲確認調査及び発掘調査を実施することになった。調査遺跡は下記のとおりである。

平成13年度　範囲確認調査遺跡：門前遺跡，小野Ｆ遺跡，川久保遺跡
　　緊急発掘調査遺跡：門前遺跡

平成14年度　範囲確認調査遺跡：門前遺跡
　　緊急発掘調査遺跡：門前遺跡

平成15年度　範囲確認調査遺跡：門前遺跡，竹辺Ｃ遺跡，竹辺Ｄ遺跡，九州文化学園構内遺跡
　　緊急発掘調査遺跡：門前遺跡，小野Ｆ遺跡

平成16年度　範囲確認調査遺跡：武辺城跡
　　緊急発掘調査遺跡：門前遺跡，竹辺Ｃ遺跡，竹辺Ｄ遺跡



第１図　西九州自動車道佐々佐世保道路計画図

(5) この間に，範囲確認調査及び現地踏査を実施し，遺跡の範囲が縮小した遺跡（川久保遺跡，小野F遺跡，九州文化学園構内遺跡）と拡大した遺跡（門前遺跡，武辺城跡）が確認された。

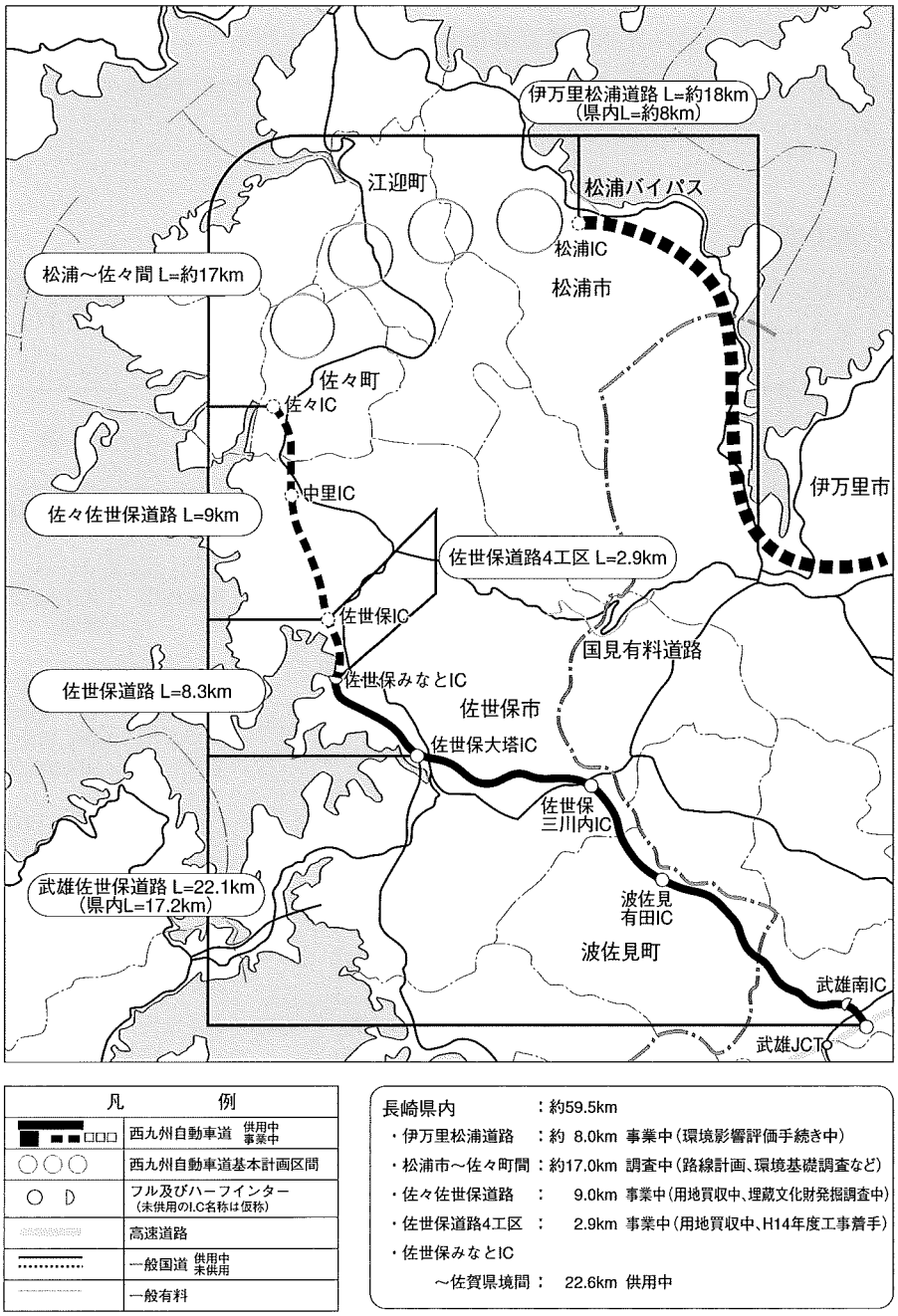
調査の結果，当該事業の「佐世保道路」と「佐々佐世保道路」で発掘調査が必要な遺跡・面積は下記の通りである。

遺跡数：７箇所

要調査面積：約89,116㎡

調査済面積：約29,120㎡

今後発掘調査が必要な面積：約49,996㎡



第２図　長崎県内西九州自動車道の計画状況

（国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所発行のパンフレットより）

(6) 平成17年度以降については，範囲確認調査遺跡が末永遺跡と緊急発掘調査遺跡が門前遺跡，竹辺Ｃ遺跡，竹辺Ｄ遺跡，武辺城跡，九州文化学園構内遺跡，末永遺跡の発掘調査を計画している。

(7) 発掘調査の調査体制について

西九州自動車道関係の埋蔵文化財発掘調査は，平成13年度は県教育庁学芸文化課で実施した。

平成14年度以降について，県教育委員会は国土交通省と協議を行い，供用開始時期及び工事工程，路線内の土地取得の進展に伴い，短期間に大規模な発掘調査を実施することになった。

年次的には，平成14年度から平成18年度まで発掘調査を行い，平成19年度に最終的に報告書の刊行を行うことになった。

平成14年度から新たに長崎県佐世保教育事務所で発掘調査を担当することになり，総務課に発掘調査担当者を配置し，平成16年度は文化財調査課を新設して調査体制の整備を図り本格的に発掘調査を実施している。

(8) 発掘調査の調査形態について

県教育委員会は，平成14年度から大規模な発掘調査を実施するに当り，民間発掘調査機関に発掘調査を委託することになった。

番号	遺跡名称	所在地	当初 変更後	分布面積（㎡）	要発掘調査予定面積（㎡）	範囲確認調査面積（㎡）	時代	概要
1	川久保遺跡	佐々町川久保	当初	8,800			中世	中世の遺物散布地
			変更後	48	0	48		
2	小野Ｆ遺跡	佐世保市小野町	当初	4,000			縄文時代	縄文時代早期～前期の包蔵地
			変更後	768	700	68		
3	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	当初	39,700			縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代～中世	縄文時代～古代，中世に至る複合遺跡 特に縄文早期～前期及び弥生時代後期の集落跡 古代～中世の遺構等検出
				48,900	48,900	(204)		
4	九州文化学園構内遺跡	佐世保市矢岳町	当初	11,500			縄文時代	縄文時代後期～晩期の包蔵地
			変更後	6,000	6,000	(266)		
5	竹辺Ｃ遺跡	佐世保市竹辺町	当初	5,250	5,250	(12)	弥生時代 古代～中世	弥生時代，古代～中世の包蔵地
6	竹辺Ｄ遺跡	佐世保市竹辺町	当初	4,250	4,250	(73)	弥生時代 古代～中世	旧石器時代，弥生時代，古代～中世の包蔵地
7	武辺城跡	佐世保市竹辺町	当初	6,500		実施中	中世～	中世（15世紀後半頃）の山城跡 松浦氏の居城
			変更後	21,000	21,000			
8	末永遺跡	佐々町末永	当初	2,900	2,900	実施予定	旧石器時代 縄文時代	旧石器時代～縄文時代の包蔵地
合計			当初	82,900	89,000	116 (671)		
			変更後	89,116	89,116			

表１　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

調査年度	調査形態	遺跡名	調査面積(㎡)	調査期間	調査担当	調査員(民間)
平成９年度	現地踏査	西九州自動車計画路線内		H９.11.20～21	藤田･東	
平成12年度	現地踏査	追加踏査		H12.11. 7	副島･竹中	
平成13年度	範囲確認調査	川久保遺跡	48	H13.12.10～12.19	本田･東･本多	
		小野Ｆ遺跡	68	H13.11.20～11.30	福田･東･本多	
		門前遺跡	108	H14. 1.24～ 2.15	村川･内藤･上原･本多	
	緊急発掘調査	門前遺跡	600	H14. 2.12～ 3.00	村川･井立･上原･本多	
平成14年度	範囲確認調査	門前遺跡	96	H15. 3.10～ 3.26	副島･寺田･石橋･栗山･平岡･北原	
	緊急発掘調査	門前遺跡	6,200	H14. 7. 1～H15. 3.31	副島･寺田･石橋･栗山･平岡･北原	(小石)
平成15年度	範囲確認調査	九州文化学園構内遺跡	266	H15. 9.29～10.29	副島･川畑･織田	
		竹辺Ｃ遺跡	12	H16. 1.13～ 2.16	副島･川畑･織田	
		竹辺Ｄ遺跡	73	H16. 1.13～ 2.16	副島･川畑･織田	
	緊急発掘調査	門前遺跡	11,300	H15. 5.12～H16. 3.31	副島･寺田･石橋･栗山･平岡･北原	小石･東･大坪
		小野Ｆ遺跡	700	H15. 5.12～ 8.12	副島･川畑･織田	松崎
平成16年度	範囲確認調査	武辺城跡	100	H17. 1.11～ 2.15	寺田･川畑･栗山･織田	
		竹辺Ｃ遺跡				
	緊急発掘調査	門前遺跡	15,750	H16. 6. 1～H17. 3.31	副島･町田･川畑･杉原･川口･寺田 栗山･織田･石橋･松尾･深澤･松原 江上	(星野･飯田)･安村･石松･江藤･西田･関根･首藤
		竹辺Ｃ遺跡	1,030	H16.11.15～H17. 3.31	町田･木村･大山･冨永	(柳)･池内･川鍋
		竹辺Ｄ遺跡	3,220	H16. 6. 7～11.15		
	報告書作成	小野Ｆ遺跡		H16. 4. 1～H17. 3.31	副島･川畑･織田･深澤	
	整理作業	門前遺跡		H16. 4. 1～H17. 3.31	寺田･深澤･栗山･石橋･松尾	

※調査員（民間）の（　）は，監理技師

調査形態	面積	備考
分布面積	89,116㎡	西九州自動車道計画路線内８遺跡の分布面積
発掘調査済面積	19,120㎡	平成13年度～平成15年度の発掘調査面積
	20,000㎡	平成16年度の発掘調査面積（平成16年６月～平成17年３月31日まで発掘調査実施中
発掘調査予定面積	49,996㎡	平成17年度以降の発掘調査予定面積

表２　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査一覧表

委託業務内容

発掘調査業務，遺構実測業務，空中写真撮影業務，掘削および排土運搬業務，ベルトコンベアー・水中ポンプ・ローリングタワー等配置業務を委託した。

受託調査員については，平成15年度から受託調査員の配置も併せて委託している。

①平成14年度

・業務名称：一般国道497号佐々佐世保道路埋蔵文化財発掘調査委託業務

・調査遺跡：門前遺跡

・調査面積：6,200㎡

・計画変更：6,700㎡・調査面積の変更

・委託業者：株式会社　埋蔵文化財サポートシステム

調査年度	調査形態	遺 跡 名	発掘調査予定面積(㎡)	調 査 期 間
平成17年度	範囲確認調査	末永遺跡	(48)	年度内調査予定
	緊急発掘調査	門前遺跡	30,000	H17.4.1～H18.3.31
		竹辺C遺跡		
		竹辺D遺跡		
		武辺城跡		
		九州文化学園構内遺跡		
	報告書作成	門前遺跡		H17.4.1～H18.3.31
平成18年度	緊急発掘調査	門前遺跡	19,996	H18.4.1～H19.3.31
		竹辺C遺跡		
		竹辺D遺跡		
		武辺城跡		
		九州文化学園構内遺跡		
		末永遺跡		
平成19年度	報告書作成	門前遺跡	0	H19.4.1～H20.3.31
		竹辺C遺跡		
		竹辺D遺跡		
		武辺城跡		
		九州文化学園構内遺跡		
		末永遺跡		
合		計	49,996	

表3　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査計画一覧表

②平成15年度

・業務名称：一般国道497号佐々佐世保道路埋蔵文化財発掘調査委託業務

・調査遺跡：門前遺跡・小野F遺跡

・調査面積：12,000㎡

・計画変更：3,700㎡・掘削，排土処理等の変更

・受託調査員：４名を含む

・委託業者：株式会社　埋蔵文化財サポートシステム

③平成16年度

・業務名称：一般国道497号佐々佐世保道路埋蔵文化財発掘調査委託業務

・調査遺跡：門前遺跡・竹辺C遺跡・竹辺D遺跡

・調査面積：20,000㎡

・受託調査員：６名を含む

・委託業者：国際航業株式会社

(8) 発掘調査関係者

平成13年度　長崎県教育庁学芸文化課長　小桐間　徳
文化財調査監　田川　肇
総括課長補佐　川久保芳洋
埋蔵文化財班係長（副参事）副島　和明
宮崎　貴夫
主任文化財保護主事　村川　逸朗
福田　一志
文化財保護主事　本田　秀樹

平成14年度　県教育庁佐世保教育事務所長　荒木　輝彦
総務課長　本村　保彦
係長　宮本　博
専門幹　副島　和明
文化財保護主事　寺田　正剛
文化財調査員　栗山　安彦・織田　健吾・平岡　恵・北原理英子

平成15年度　県教育庁佐世保教育事務所長　荒木　輝彦
総務課長　本村　保彦
係長　宮本　博
専門幹　副島　和明
文化財保護主事　川畑　敏則・寺田　正剛
文化財調査員　石橋　忠治・栗山　安彦・織田　健吾・平岡　恵
北原理英子・北川　亜紀・石井　鈴香(学芸文化課)

平成16年度　県教育庁佐世保教育事務所長　荒木　輝彦
総務課長　本村　保彦
係長　藤本　賢二
文化財調査課長　副島　和明
係長　町田　利幸
文化財保護主事　川畑　敏則・杉原　敦史・川口　勝久
寺田　正剛・木村美貴子
文化財調査員　石橋　忠治・栗山　安彦・織田　健吾・冨永百合子
松尾　秀昭・深澤　幸江・松原　智子・江上　正高
大山　祐喜・北川　亜紀・富永　優美・石井　鈴香
(学芸文化課)

(9) 調査協力者

西谷　　正　九州大学大学院名誉教授

辻　誠一郎　国立歴史民俗博物館教授（現東京大学教授）

春成　秀爾　国立歴史民俗博物館教授

甲元　眞之　熊本大学文学部教授

立平　　進　国際大学教授

本田　光子　別府大学教授（現国立九州博物館）

肥塚　隆保　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長

福永　伸哉　大阪大学大学院文学研究科助教授

笠原　　潔　放送大学助教授

長嶋　正春　国立歴史民俗博物館助教授

山田　昌久　東京都立大学人文学部助教授

工楽　善通　大阪府立狭山池博物館長

下山　正一　九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門助手

(10) 整理協力者

石橋　民江・尾崎　　愛・松村理恵子・正木真祐美・辻　さゆり・中里由佳絵・山川さおり

辻　奈緒美・秋月　陽子・宇都宮静子・郡　由美子・高山奈保美・吉野　貴子・畑原佐智子

（副島　和明）

Ⅱ　小野Ｆ遺跡

遺跡遠景(東から)。遠くに平戸島が見える

遺跡遠景(西から)。奥は始まったトンネル工事

1　遺跡の立地と環境

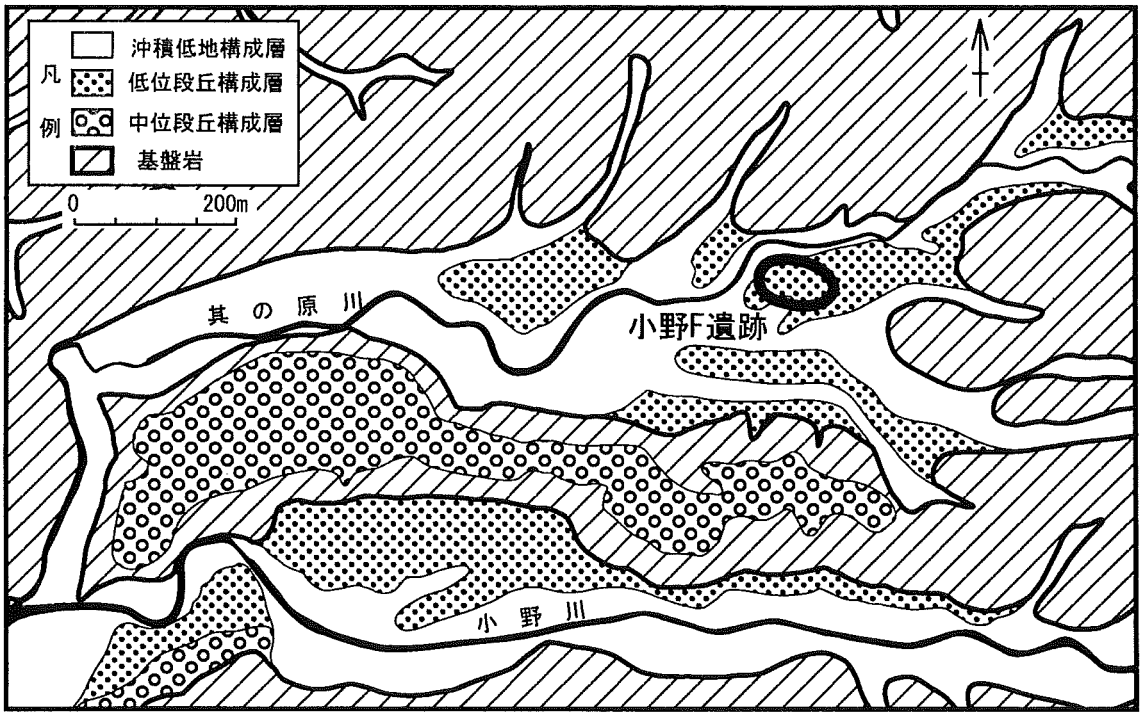
(1)　地理的環境

小野Ｆ遺跡周辺の地形（第３図．写真１）

小野Ｆ遺跡は其の原川左岸の低位段丘上に立地している。地形の特徴として，北及び東を古第三系佐世保層群の堆積岩類がつくる丘陵性の山地と，南側を中位段丘に周囲を囲まれた谷底平野である（第３図）。低位段丘は現在の其の原川の氾濫原である沖積低地からの比高が３～５ｍである。中位段丘は沖積低地からの比高が10～15ｍの平坦面（段丘面）で，低い南側の尾根（分水界）を形成している。

小野Ｆ遺跡の地質は，下位から，褐色巨礫湿土層（Ｄ層：厚さ不明），淡褐色礫混じり砂質土層（Ｃ層：厚さ60cm），淡黄色礫混じり砂質土層（Ｂ層：厚さ50cm），黄褐色細粒土層（Ａ層：厚さ40cm）の順に重なっている（写真１）。最下部の褐色巨礫質土層は山地の出口に発達する扇状地を構成するもので，土石流堆積物である。淡褐色礫混じり砂質土層と淡黄色礫混じり砂質土層は洪水時の氾濫堆積物で，旧其の原川が形成した堆積物である。これらの堆積物は上位に向かって細粒になっているので，約９万年前から２万年前の海面低下期に，当時の河川が谷を埋積してできた平坦面＝低位段丘の構成層である。最上部の黄褐色細粒土層は水田床土の直下にあり，縄文時代以降の遺物包含層である。この層には風によって運ばれて堆積した，黄砂（レス）堆積物や少量の火山灰が混じっているので，その当時，この場所が川の氾濫がほとんど届かないほど離水・台地化し，風積物を安定保存できる状況にあったことを物語っている。

遺跡立地条件としてまとめると，小野Ｆ遺跡は，緩やかな山地に囲まれて相浦川本流筋から孤立し



第３図　小野Ｆ遺跡周辺の地形及び地質の分布

た小規模な谷底平野奥部にある。立地場所は山地の複数谷口の分岐点付近にあり，洪水から免れやすい微高地で，河谷低地を西に望む視界の開けた土地なので，狩猟や防御など生活拠点としての条件をよく備えている。

（九州大学　下山　正一）

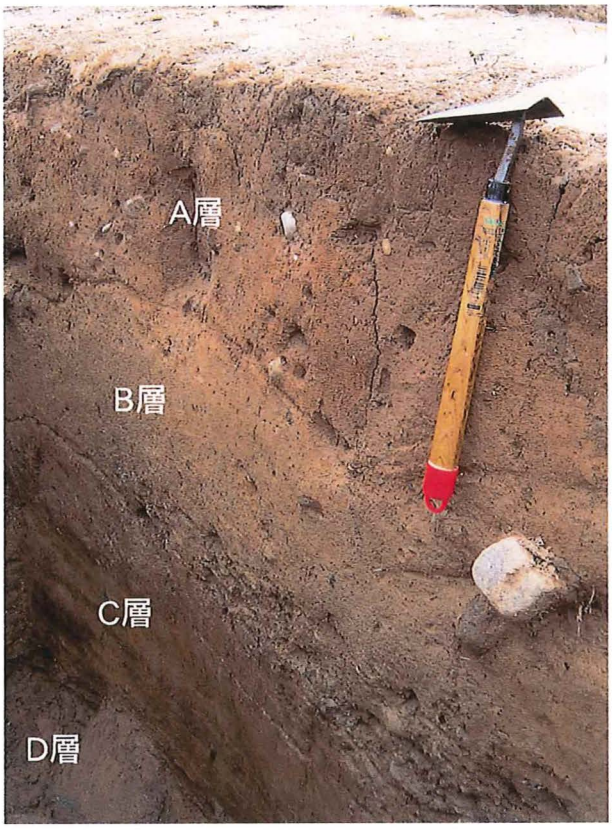


写真１　小野Ｆ遺跡の地質

(2) 歴史的環境

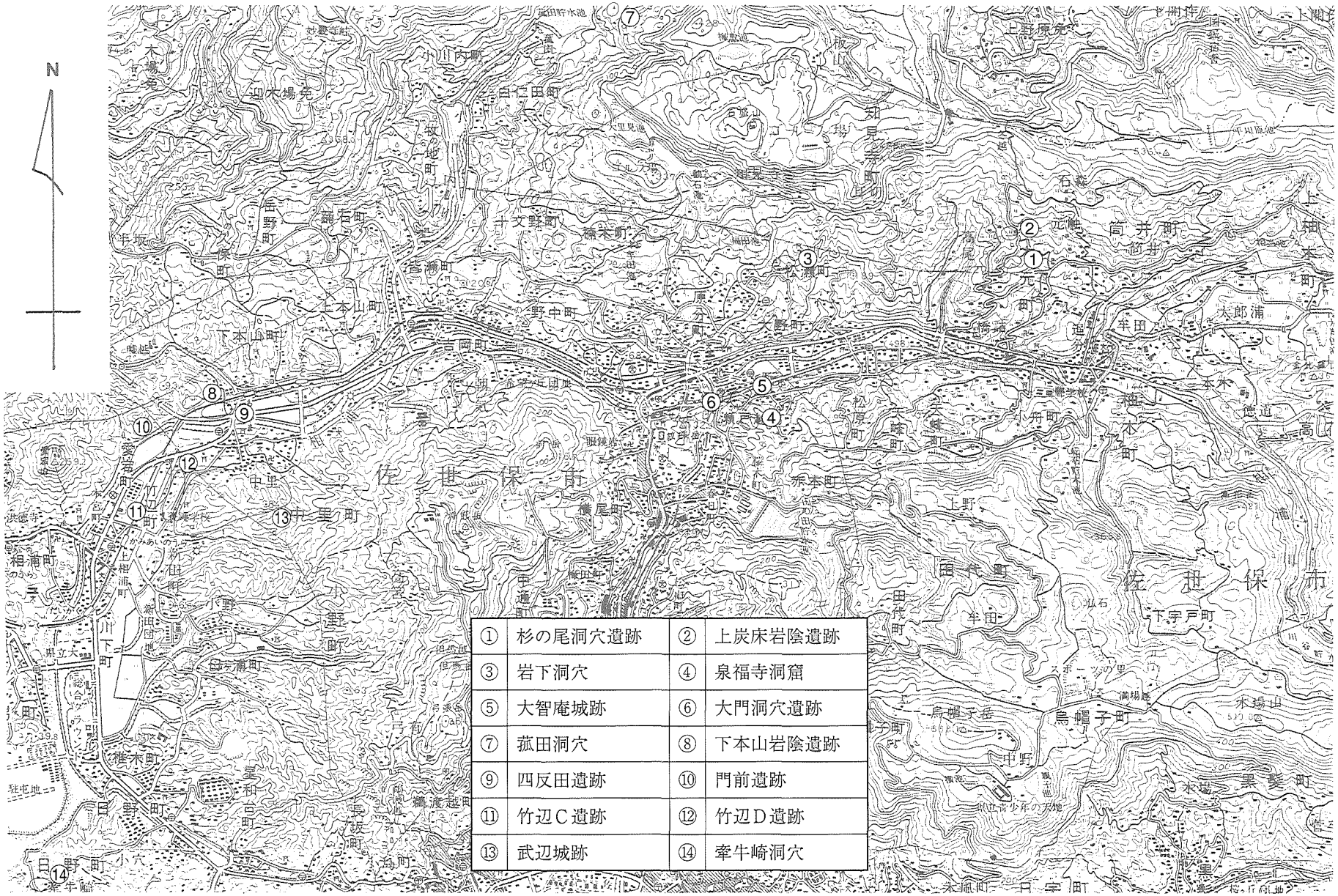
相浦川流域の遺跡（第４図．写真２～12）

流路延長20.04㎞で，県内第３位の長流である相浦川流域には，旧石器時代から近代に至る遺跡が数多く集中しており，これまでに発掘調査が行われた遺跡や，現在行われている遺跡だけを見ても14遺跡にのぼる。川上から順に見ていくと，柚木元町の標高230mの地点に所在する縄文早期の遺跡である杉の尾洞穴遺跡（①)。同じく柚木元町の標高230mの地点に所在する縄文前期～晩期の遺跡である上炭床岩陰遺跡（②)。縄文時代早期の豊富な資料を提供し，その後の市内における洞穴遺跡調査の端緒となった松瀬町の標高200メートルの地点に所在する岩下洞穴（③．写真２)。瀬戸越町の標高89mの丘陵先端に位置し，縄文時代草創期の解明に大きく寄与した泉福寺洞窟（④．写真３)。そのすぐそばの標高105mの丘陵上に位置する，15世紀末落城したと伝えられる大智庵城跡（⑤．写真４)。同じ瀬戸越町の標高70mに位置する縄文時代前期～晩期の遺物が出土した大門洞穴遺跡(⑥．写真５)。菰田町の標高180mに位置する菰田洞穴（⑦．写真６)。菰田洞穴では旧石器時代の包含層が確認された。標高16mの丘陵先端部に位置し，眼前に沖積地が広がる下本山岩陰遺跡（⑧．写真７）からは，縄文時代前期～晩期の包含層と弥生時代後期の石棺墓が検出された。下本山岩陰遺跡から東へ200mの標高15mの河岸段丘上には，四反田遺跡（⑨．写真８）がある。四反田遺跡からは縄文時代晩期～弥生時代中期にかけての住居跡群．墓地．屋外炉等が検出されている。相浦川をさらに南へ800mほど下った標高８mの相浦川左岸の段丘上に現在調査中の門前遺跡（⑩．写真９）がある。門前遺跡は，これまでに弥生時代の墓域（石棺墓群や木棺墓群）が検出されている縄文時代～中世までの複合遺跡である。門前遺跡に隣接する竹辺Ｃ遺跡（⑪．写真10）や，門前遺跡から南東に500mの標高16mに位置する竹辺Ｄ遺跡（⑫．写真11）も現在調査中で，中世の包含層を確認している。その東にある丘陵上標高77mに位置する武辺城跡（⑬．写真12）の調査では，14世紀～15世紀にかけての遺物が出土し，７棟分の建物があったと考えられる本丸を中心に，東西双方に派生する標高50～60mの尾根上に，４箇所の出曲輪を配置した中世末の山城の全体像が明らかになった。相浦川をさらに下ると江戸時代の新田開発によって作られた広々とした平野に至る。河口も間近である。その河口に延びた丘陵先端部標高３mに平安～鎌倉時代の洞穴遺跡である牽牛崎洞穴（⑭）が存在する。

以上相浦川流域の遺跡を上流から順に追ってきたが，14遺跡中洞穴遺跡が８と三分の二を越えている。その理由として，これまで多くの方が述べているように①佐世保市が位置する県北部は，古第三期層の砂岩から成っており，そのために，河川．風．波等による浸食作用を受け洞穴を形成しやすかったこと。②福井洞穴の発掘調査を契機に，長崎県北部の洞穴遺跡が注目され，泉福寺洞窟の調査に代表されるように，佐世保の洞穴遺跡が意識的にかつ継続的に調査されたこと。③大規模な開発が少なく，開地遺跡の調査が少なかったことなどが挙げられよう。

小野Ｆ遺跡周辺の遺跡（第５図．写真13～20）

次に，小野Ｆ遺跡周辺で確認されている遺跡について目を向けてみよう。小野Ｆ遺跡の周囲500m以内には，小野Ｅ遺跡（２．写真13)．殿原遺跡（３．写真14)．小野Ｄ遺跡（４．写真15)．小野Ｃ遺跡（５．写真16)．小野Ａ遺跡（６．写真17）の合計５箇所の遺跡が確認されている。いずれも，相浦川に流れ込む小河川によって形成された谷奥の丘陵または台地上に位置し[註①]，縄文時代の遺物



①	杉の尾洞穴遺跡	②	上炭床岩陰遺跡
③	岩下洞穴	④	泉福寺洞窟
⑤	大智庵城跡	⑥	大門洞穴遺跡
⑦	菰田洞穴	⑧	下本山岩陰遺跡
⑨	四反田遺跡	⑩	門前遺跡
⑪	竹辺Ｃ遺跡	⑫	竹辺Ｄ遺跡
⑬	武辺城跡	⑭	牽牛崎洞穴

第４図　相浦川流域の発掘調査が行われた遺跡（Ｓ＝１/50,000）

写真 2　岩下洞穴

写真 3　泉福寺洞窟

写真 4　大智庵城跡

写真 5　大門洞穴遺跡

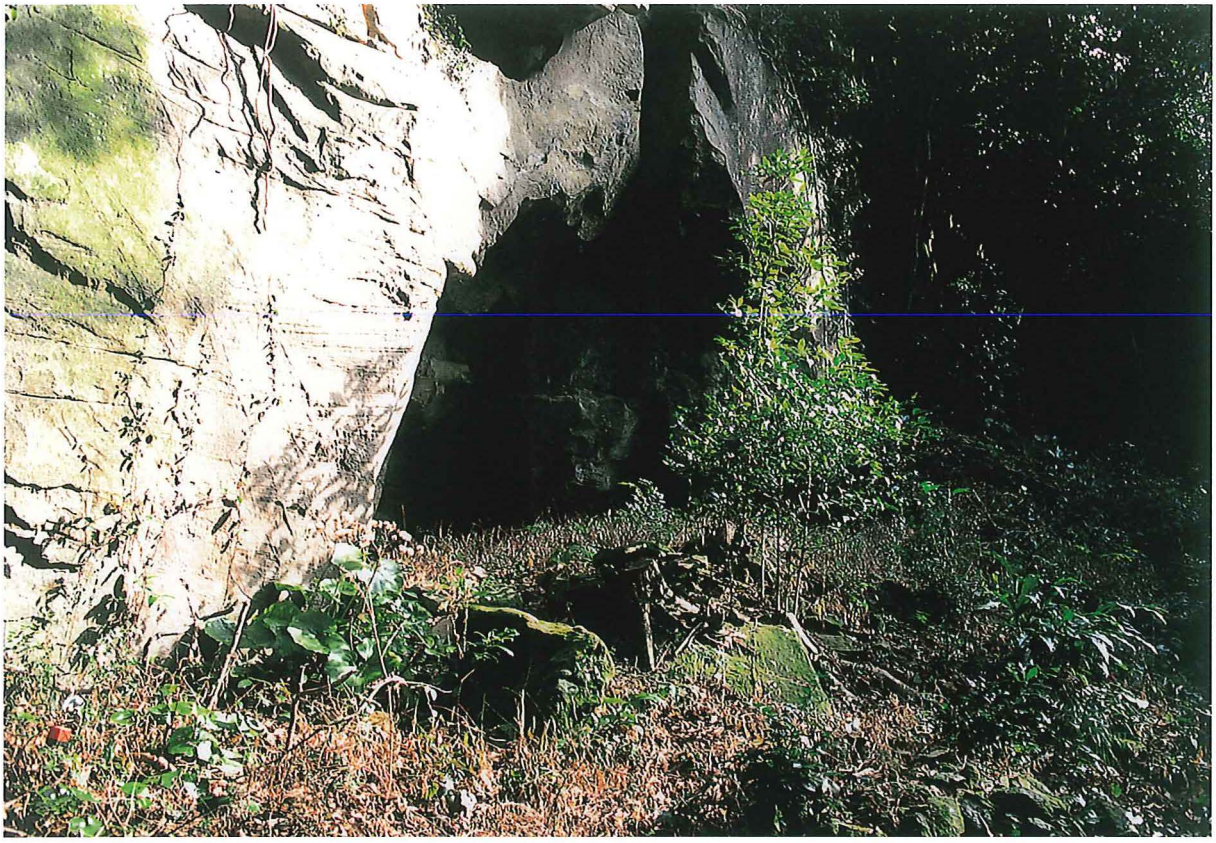
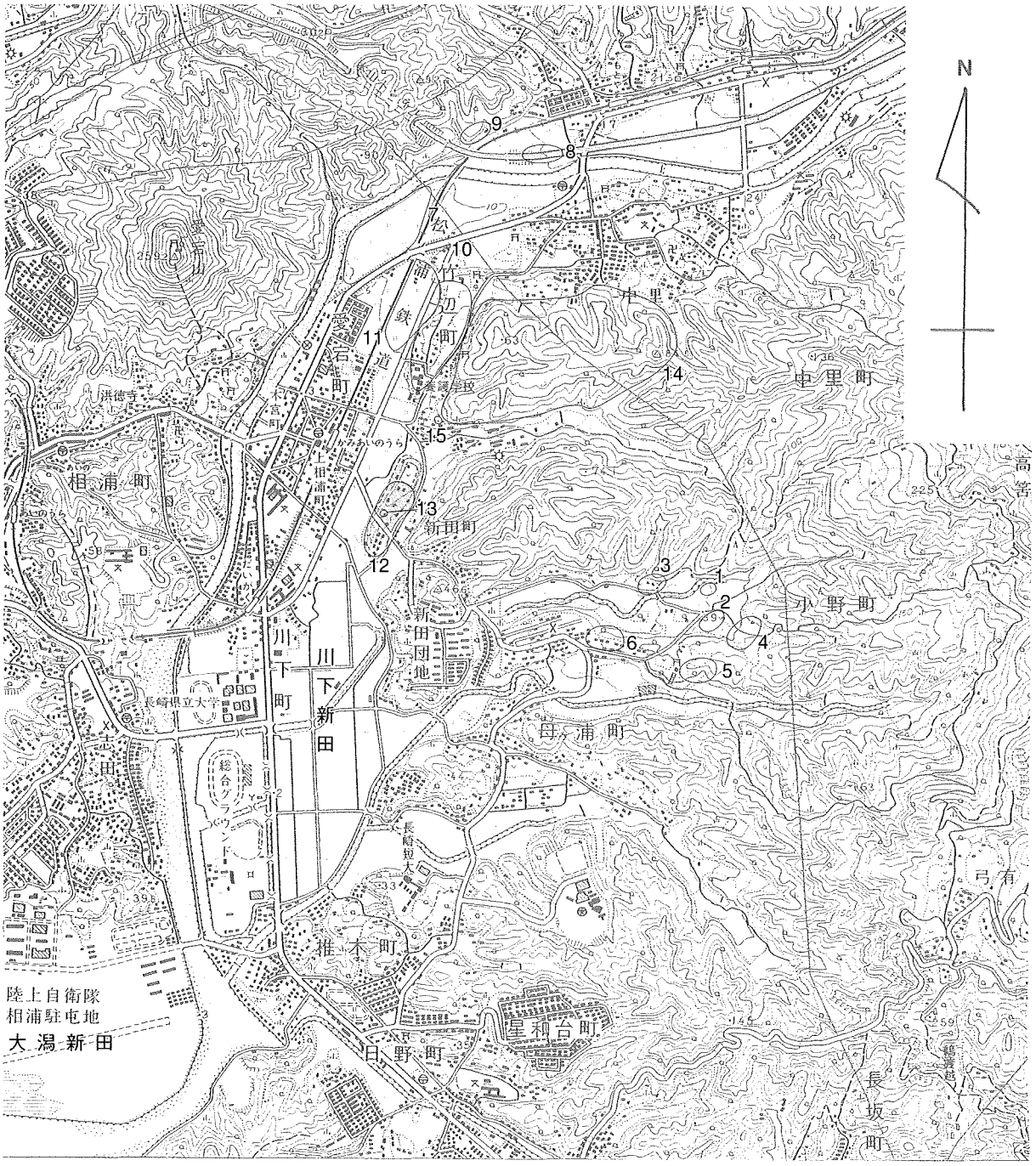


写真 6　菰田洞穴

写真 7　下本山岩陰遺跡



1	小野Ｆ遺跡	2	小野Ｅ遺跡	3	殿原遺跡	4	小野Ｄ遺跡
5	小野Ｃ遺跡	6	小野Ａ遺跡	7	門前遺跡	8	四反田遺跡
9	下本山岩陰遺跡	10	竹辺Ｄ遺跡	11	竹辺Ｃ遺跡	12	新田遺跡
13	新田中世墓址群	14	武辺城跡	15	阿弥陀堂の石塔群		

第５図　小野Ｆ遺跡周辺の遺跡（Ｓ＝１/25,000）

が採集されている[註②]。これらの遺跡は，遺跡を乗せている平坦面の規模も決して大きいとはいえず，恒常的な生活の場としてではなく，狩猟や採集活動をするための移動に伴う生活の場としての利用が考えられる。小野Ｆ遺跡から直線で1.5km西へ向かうと，相浦川によって形成された沖積平野に出る。この地域には，前述した門前遺跡（７．写真９）．四反田遺跡（８．写真８）．下本山岩陰遺跡（９．写真７）等，弥生時代の遺跡をはじめ，門前遺跡（７．写真９）．竹辺Ｄ遺跡（10．写真11）．竹辺Ｃ遺跡（11．写真10）．新田遺跡（12．写真18）．新田中世墓址群（13．写真19）．武辺城跡（14．写真12）．阿弥陀堂の石塔群（15．写真20）等，中世の遺跡が集中する。相浦川左岸の現在総合グランド一帯に広がる平地は，1660（明暦６）年に完工した川下新田で，右岸の現在陸上自衛隊相浦駐屯地一帯に広がる平地は，1865（慶応元）年に完工した大潟新田である。　　（川畑　敏則）

註１…No２小野Ｅ遺跡の立地について，遺跡地図では沖積地と記してあるが，現地の状況を観察した結果，現地形は平坦面を形成しているが，これは水田を作り出すための後世の削平によるもので，旧地形は丘陵先端部であると考えられる。

註２…No３殿原遺跡は遺跡地図で，縄文時代と中世の複合遺跡と記してあり，遺跡カードにも採集した遺物として白磁が挙げられているが，現地を踏査した結果，陶磁器の散布は見られるものの，いずれも時期は近世のものであり，中世の遺物は誤認の可能性が高い。

【引用・参考文献】

・久村貞男編　1981　『中世山城分布調査報告書』　佐世保市教育委員会
・久村貞男　1997　『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ　長崎県教育委員会
・久村貞男　2002　「洞穴と人」『佐世保市史』通史編上巻　佐世保市
・長崎県教育委員会編　1995　『長崎県遺跡地図－佐世保市・平戸市・松浦市・北松浦郡・東彼杵郡地区』長崎県文化財調査報告書119集　長崎県教育委員会

写真８　四反田遺跡

写真９　門前遺跡

写真10　竹辺Ｃ遺跡

写真11　竹辺Ｄ遺跡

写真12　武辺城跡

写真13　小野Ｅ遺跡

写真14　殿原遺跡

写真15　小野Ｄ遺跡

写真16　小野Ｃ遺跡

写真17　小野Ａ遺跡

写真18　新田遺跡

写真19　新田中世墓址群

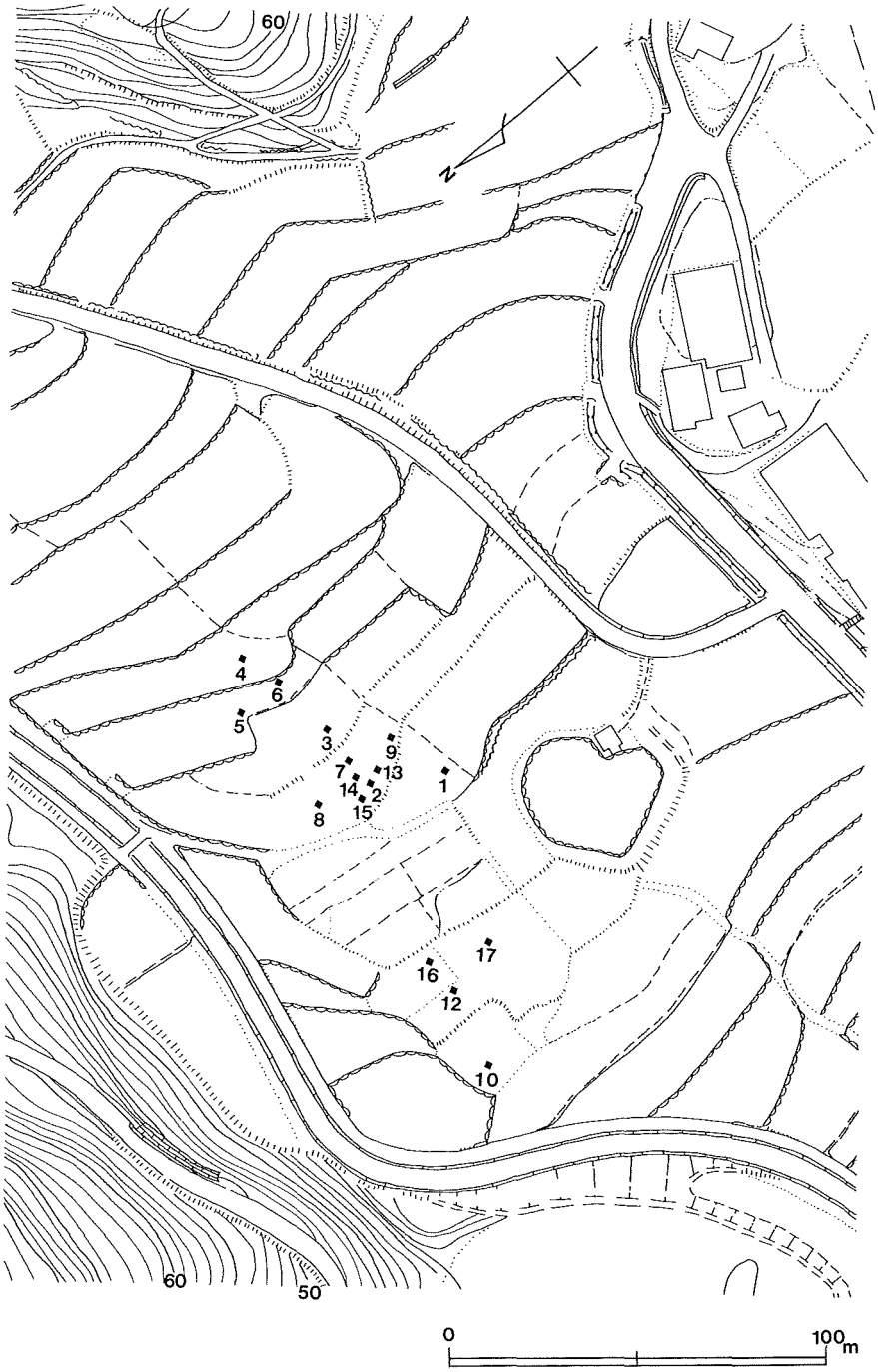
写真20　阿弥陀堂の石塔群

2　調査の概要

(1)　範囲確認調査

経　　過（第６図）

国土交通省長崎工事事務所は，一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴って，県学芸文化課に予定路線上にある遺跡の照会と協議を依頼した。路線が通る予定の佐世保市小野地区は，小丘陵上に縄文

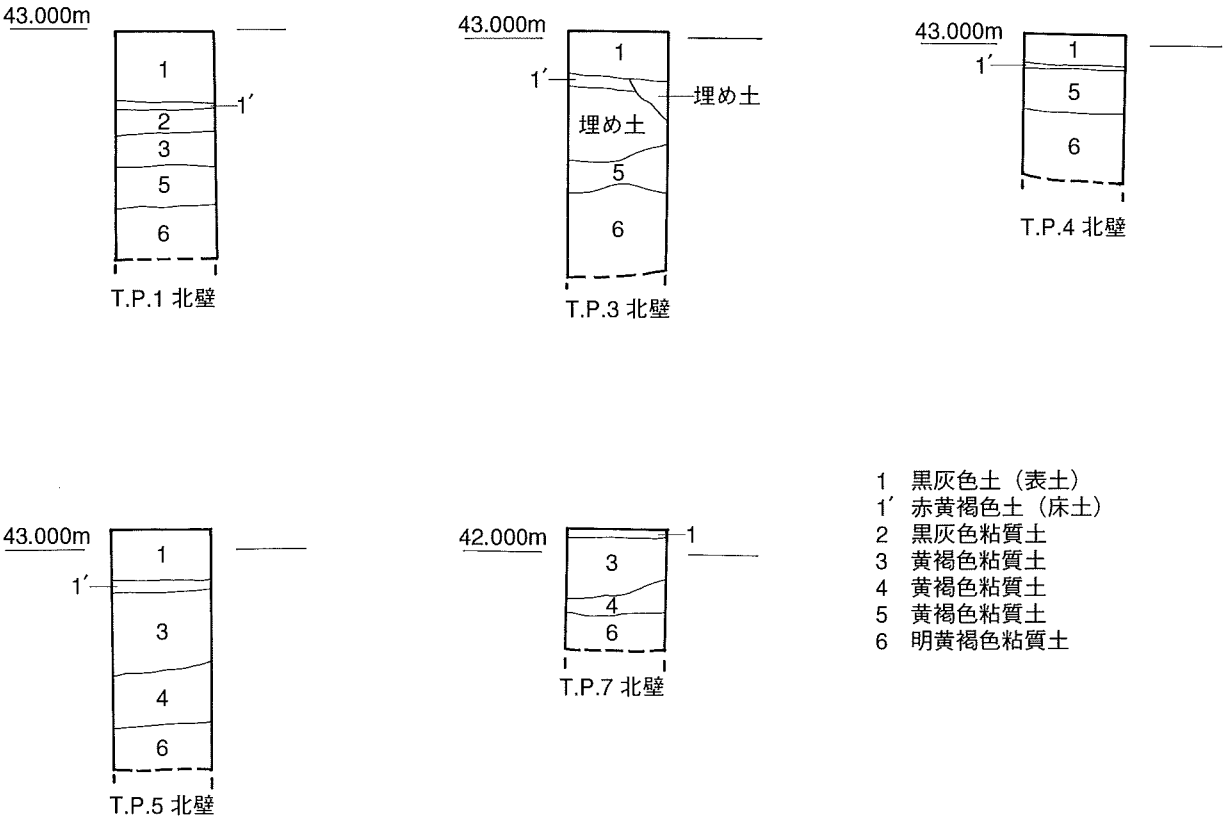


第６図　試掘坑配置図

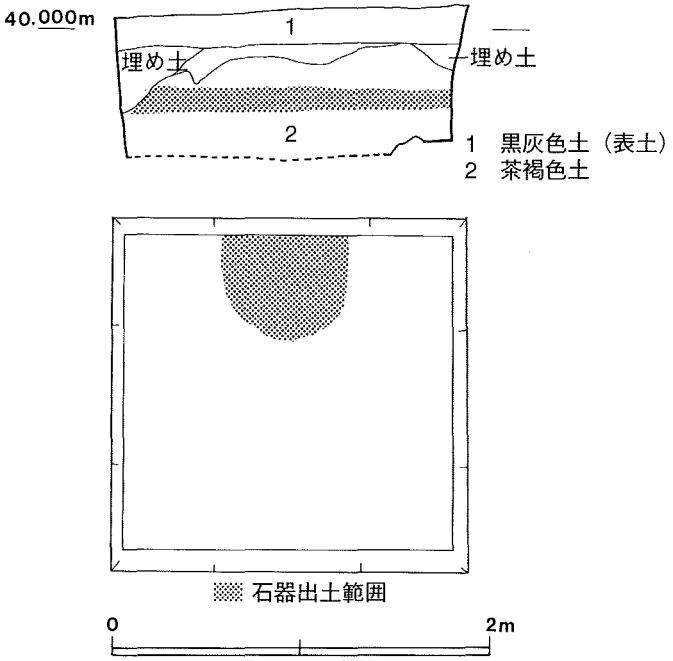
時代の遺跡が点在しており，路線予定地内にも縄文時代の遺物散布地があることが確認されたため，県学芸文化課では，遺跡の範囲を早急に特定する必要があると判断し，範囲確認調査を実施することとした。そこで，国土交通省長崎工事事務所と協議を行い，範囲確認調査を実施することとその結果によって再度協議を行う旨の確認を行った。調査は，買収済みの用地について２ｍ×２ｍの試掘坑を17ヶ所設定して行ったが，全体的に後世の水田開墾に伴うと考えられる攪乱が激しく，縄文時代の明確な遺構を確認するには至らなかった。しかしながら，T.P.12においては，埋め土の下の層である暗茶褐色粘質土層中より，集中して石器が出土することを確認した。このことから，T.P.12で検出した暗茶褐色粘質土層は縄文時代の遺物包含層である可能性が高く，この場所は石器製作に伴う遺物散布範囲の一部である可能性も考えられた。そこで，T.P.12の耕作面及び未買収のため確認できなかった一段上の耕作面をさらに詳細に調査する必要があると判断し，国土交通省長崎工事事務所と再度の協議を行い，本調査の必要があること。その面積は，700㎡であることを確認した。

層　　位（第７図．第８図）

縄文時代の遺物包含層と判断したT.P.12に見られる茶褐色土層は，同じ耕作面であるT.P.17やT.P.16でも確認をすることができたが，それ以外の試掘坑においては，土器や石器の出土は見るものの確認をすることができなかった。



第７図　土層柱状図（１/30）



第８図　T. P. 12東壁土層図および平面図

出土遺物

表採分を含めて，縄文時代の土器片．石器．黒曜石片．近世陶磁器片が60数点出土した。そのうち縄文時代の土器片４点と縄文時代の石器３点を図示した（縄文時代の土器片…第24図１～４。縄文時代の石器…第26図16．第27図32．第28図38）。

(2) 本　調　査

概　　要（第９図．第10図）

範囲確認調査で縄文時代の遺物包含層と思われる土層を検出したT.P.12がある耕作面を中心に，重機で表土を掘削した後，座標系に合わせて南北を主軸とする８ｍ四方のグリッドを設定し，北から南へＡ．Ｂ．Ｃ．Ｄ，西から東へ１．２．３．４…と番号を付して，平成15年５月12日から３ヶ月間の日程で対象区700㎡の調査を行った。縄文時代の包含層は，範囲確認調査で確認していたように，後世の開発に伴う攪乱のために調査区北側で薄く，T.P.12を設定した耕作面に良好な状態で残っていた。遺跡の層序については以下の通りである（第10図）。

Ⅰ層は表土で耕作土である。黒曜石片や近世陶磁器片が含まれる。

Ⅱ層は黄褐色土層である。しまり大．粘性大で炭化物．焼土粒をまばらに含む近世の遺物包含層で，場所により赤褐色を呈する。

Ⅲ層は黒褐色土層である。しまり大．粘性弱で炭化物．焼土粒を全体に含む近世の遺物包含層である。陶磁器片が多く出土した。

Ⅳａ層は赤褐色土層である。しまり大．粘性大で炭化物．焼土粒・焼石粒をまばらに含む縄文時代の遺物包含層である。色調は異なるが，範囲確認調査の際にT.P.12で検出した遺物包含層と考えられた暗茶褐色粘質土層と同一の土層である。

Ⅳｂ層は黄褐色土層である。しまり大．粘性弱で炭化物をわずかに含む。角の取れた２～５㎝大の風化玄武岩礫をまばらに含む。縄文時代の遺物包含層。

Ⅳｃ層は黄褐色土層である。しまり大．粘性大で黒いしみが全体に入る。縄文時代の遺物包含層。

Ⅴ層は黄褐色砂質土層である。粘性がほとんど無い砂質土で，部分的に黒いしみが入る。

Ⅵａ層は黄褐色粘質土層である。粘性はあるが，ブロック状の砂を全体に含む。黒いしみが全体に入る。

Ⅵｂ層は黄褐色粘質土層である。粘性あり。砂よりも粘土の割合が多い。黒いしみは入らない。

Ⅵｂ′層は黄褐色礫層である。５㎝大までの角が取れた砂岩片．風化玄武岩礫がびっしりとつまる。

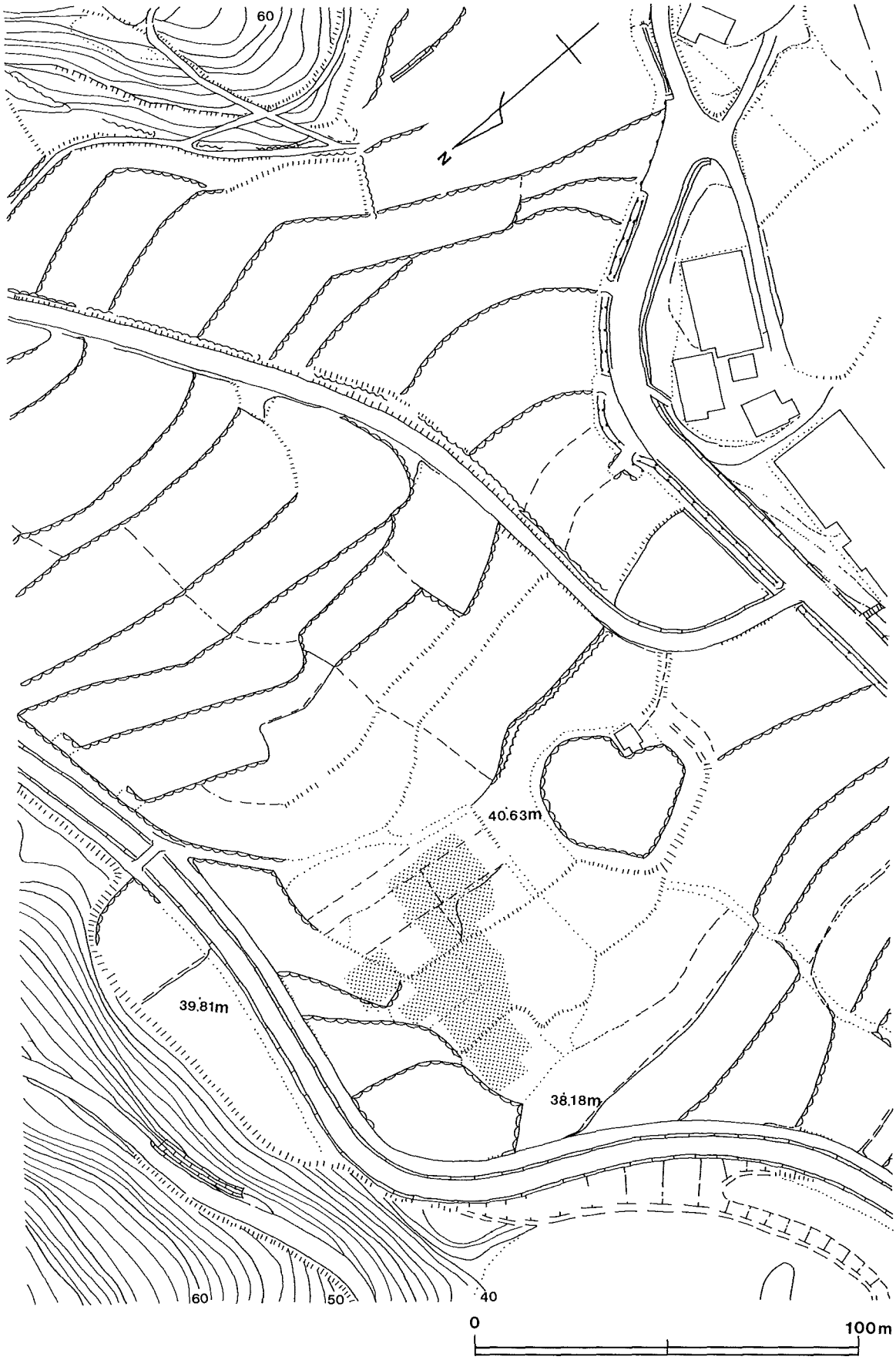
Ⅵｃ層は黄褐色土層である。粘性のある土と砂がほぼ均一に混ざっている。

Ⅵｄ層は黄褐色砂質土層である。砂質で風化礫を含まない層。調査区東側に部分的に見られた。

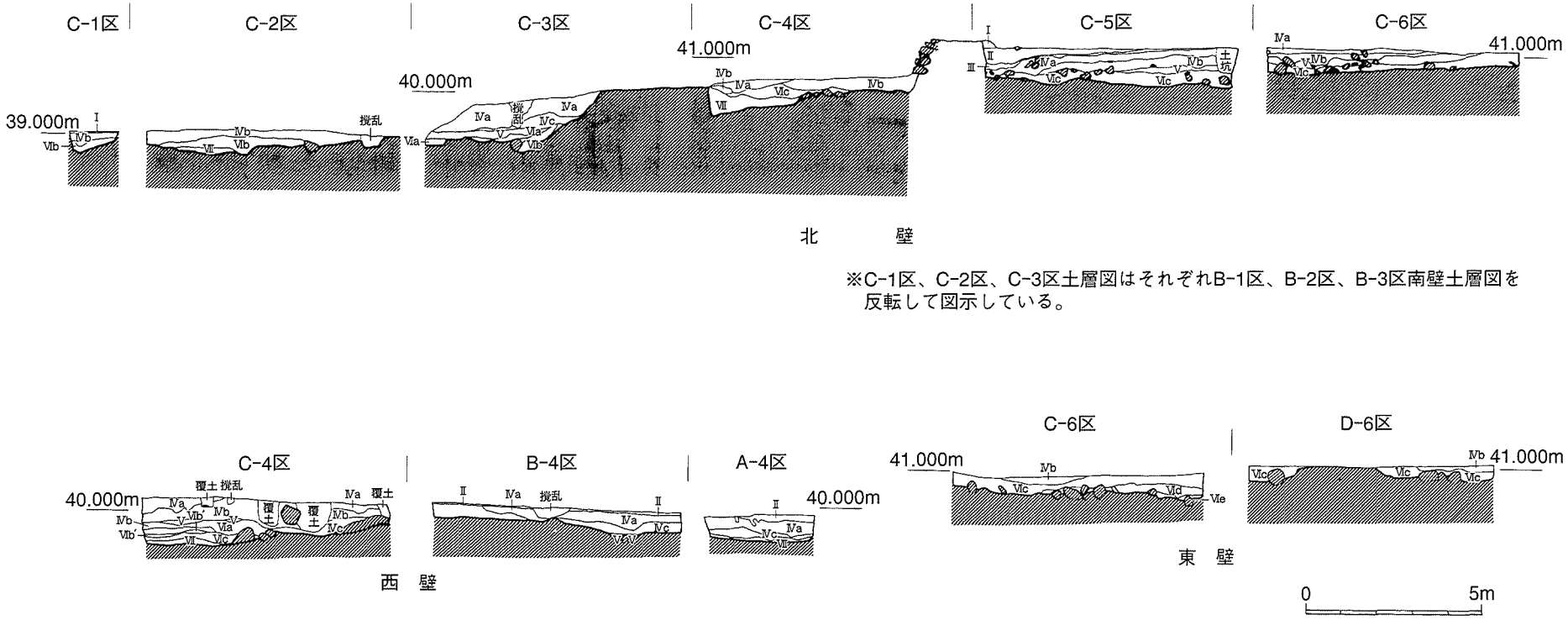
Ⅵｅ層は黄褐色粘質土層である。砂粒を含むが粘性が強い土である。Ⅵｄ層と同じく調査区東側に部分的に見られた。

Ⅶ層および斜線は地山である。60㎝大までの風化玄武岩がびっしりと詰まった層で，土石流による扇状地堆積物である。

（川畑　敏則）



第９図　小野Ｆ遺跡周辺地形図および調査区

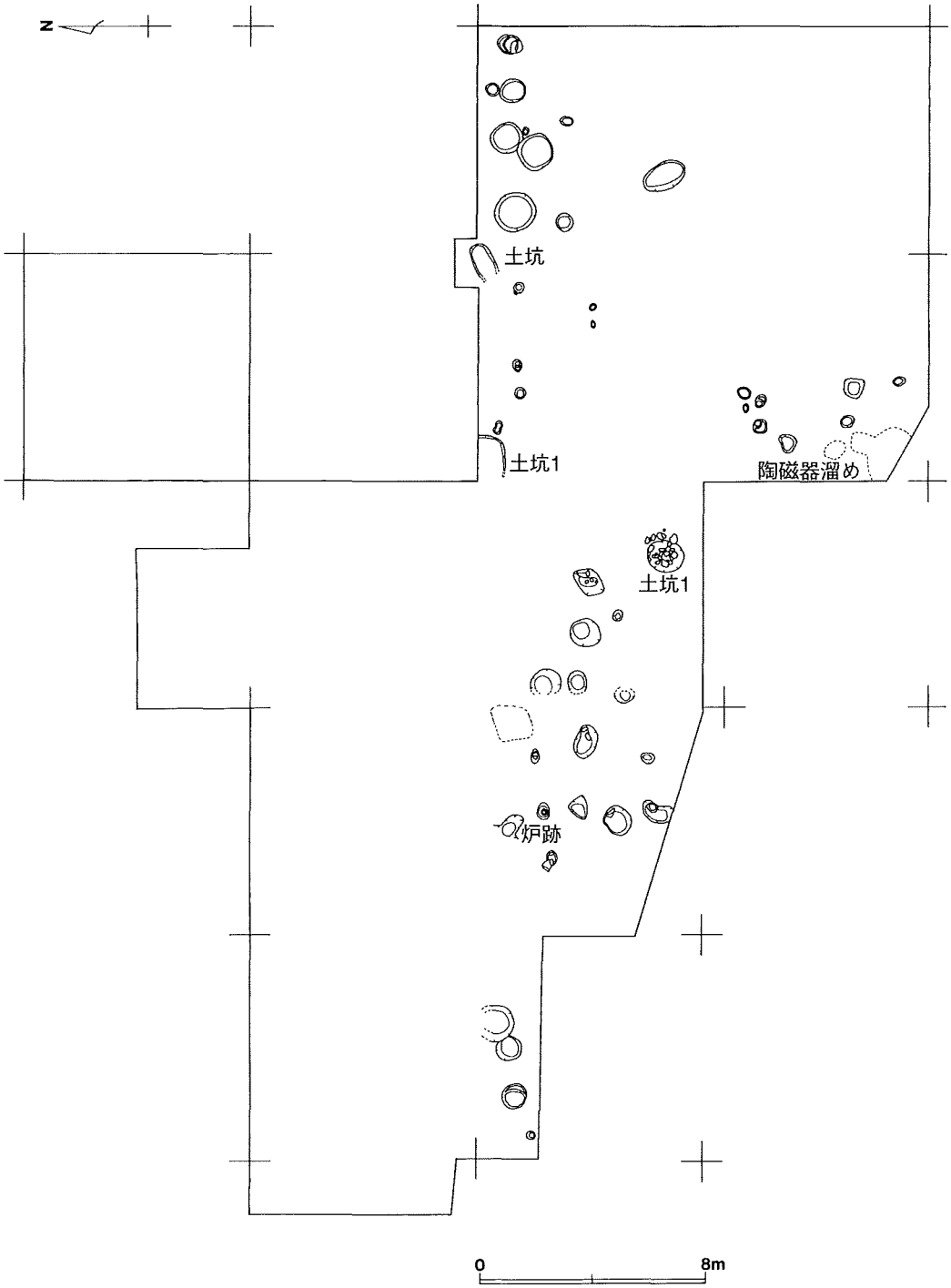


Ⅰ層　表土
Ⅱ層　黄褐色土層（場所により赤褐色を呈する。近世の遺物包含層）
Ⅲ層　黒褐色土層（炭化物，焼土粒を全体に含む。近世の遺物包含層）
Ⅳa層　赤褐色土層（炭化物，焼土粒をまばらに含む。縄文時代の遺物包含層）
Ⅳb層　黄褐色土層（炭化物をわずかに含み，小礫をまばらに含む。縄文時代の遺物包含層）
Ⅳc層　黄褐色土層（黒いしみが全体に入る。縄文時代の遺物包含層）
Ⅴ層　黄褐色砂質土層（粘性が弱く部分的に黒いしみが入る）
Ⅵa層　黄褐色粘質土層（粘性はあるが砂をブロック状に含む。黒いしみ有り）
Ⅵb層　黄褐色粘質土層（砂より粘土の割合が多い。黒いしみは入らない）
Ⅵb'層　黄褐色礫層（5cm大までの礫がびっしりとつまる）
Ⅵc層　黄褐色土層（粘性のある土と砂がほぼ均一に混ざっている）
Ⅵd層　黄褐色砂質土層（風化礫を含まない）
Ⅵe層　黄褐色粘質土層（砂粒を含むが粘性が強い）
Ⅶ層および斜線　地山（風化玄武岩礫から成る層）

第10図　土層図

3　遺　　構（第11図）

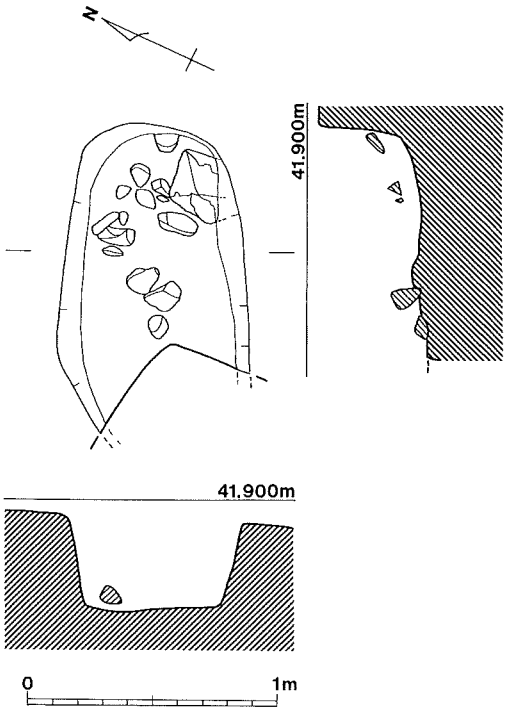
縄文時代の炉跡１基と土坑１基．近世の土坑２基．ピット45基．陶磁器溜め１箇所．石溜め３箇所を検出した。



第11図　遺構配置図

(1) 縄文時代

C－5．6区ベルト内土坑（第12図，図版9）



第12図　C－5・6区ベルト内土坑

土層観察用の壁に落ち込みがあるのを見つけ確認をした。平面では，Ⅳb層でプランを確認することができた。土層観察のためのトレンチによって西端を切ってしまったが，東西に長軸を持つ楕円形の土坑である。残存長は長軸120cm．短軸80cm．深さ35cmを測る。覆土は，しまりと粘性のある赤褐色土で，炭化物．焼土粒．焼石粒をまばらに含み，Ⅳa層と変化はなかった。底近くに拳大の礫がまばらに入るが，遺物の出土も無く遺構の性格については不明である。

C－3区　Ⅳa層中検出炉跡（第13図，図版10）

C－3区でⅣa層を掘削中に焼土の広がりを確認したことにより，検出することができた。東西に長軸を持つ楕円形の掘り込みを持ち，長軸100cm．短軸50cm．深さ20cmを測る。底は，若干のくぼみが生じている。遺構の全体を拳大の礫が覆い，その多くは熱を受け表面が赤化している。その礫の間に，炭化物を全体に含んだ焼土が混入している。遺構からは，遺物は出土しなかった。

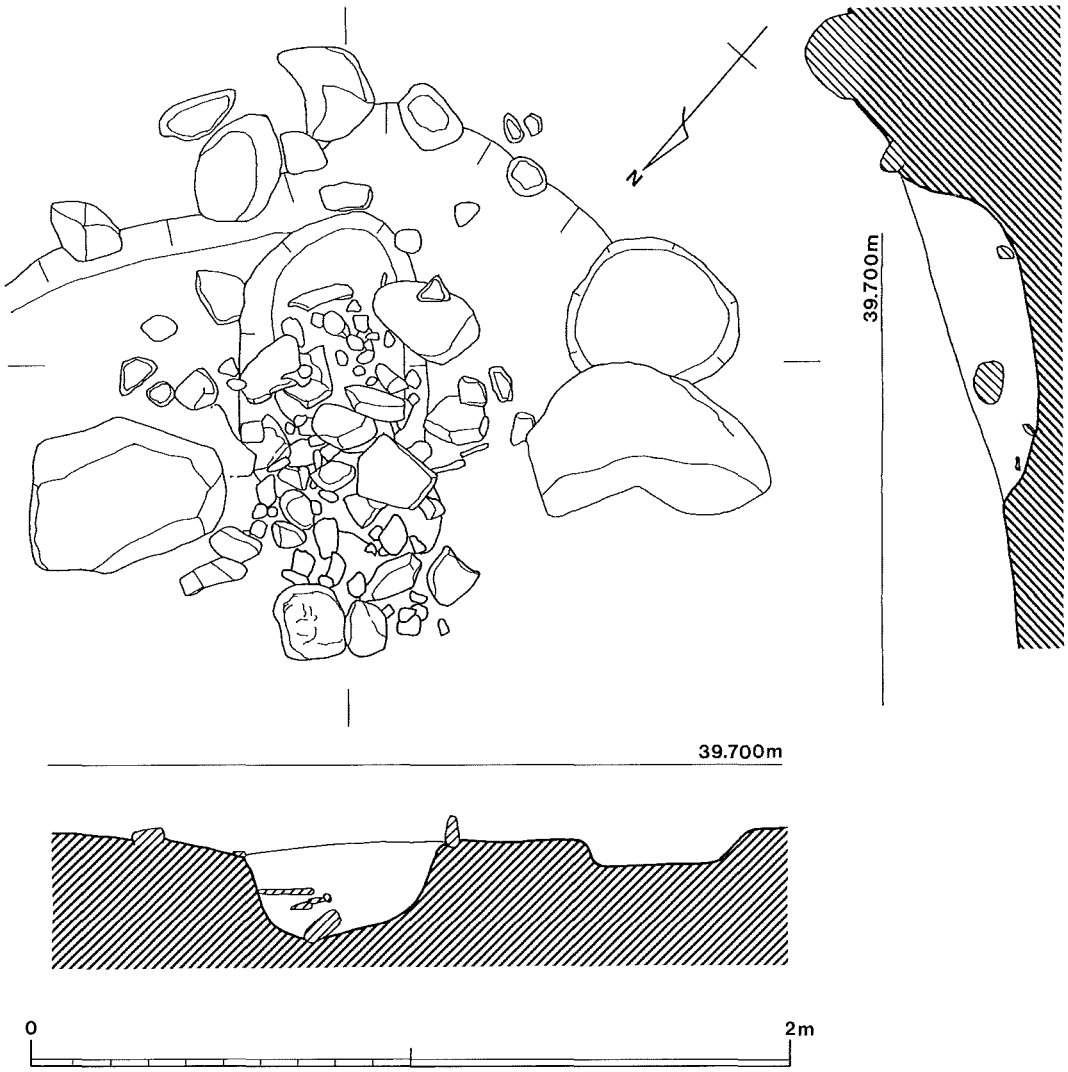
(2) 近　　世

C－2区検出遺構（第14図，図版10）

Ⅳa層上面の精査後，4基のピットを検出した。覆土は，いずれも弱粘性の黒褐色土で，微細な炭化物や焼土粒を全体に含み，基本土層のⅢ層と同じ土である。ピット1は，径120cm．深さ40cmで，覆土から見込蛇ノ目釉剥ぎの染付皿底部（第29図1）が出土した。ピット2は，径80cm．深さ40cmで，覆土から陶器鉢口縁部片（第29図2）と染付碗口縁部片（第29図3）が出土した。ピット4は，他のピットよりも小規模で径30cm．深さ35cmを測り，覆土より陶胎染付碗（第29図4）が出土した。

C－3区検出遺構（第16図，図版11）

Ⅳa層上面の精査後，9基のピットと2箇所の石溜めを検出した。ピット2は，長径120cm．短径80cm．深さ80cmを測る。覆土から擂鉢口縁部片（第29図5）が出土した。ピット3は，長径80cm．短径60cm．深さ60cmを測り，覆土から染付碗口縁部片（第29図6）と染付碗（第29図7）が出土した。ピット7は，長径100cm．短径80cm．深さ45cmを測る。覆土から見込蛇ノ目釉剥ぎの染付皿底部（第29図8）が出土した。石溜めは，グリッドの北東隅と南西隅で検出した。北西隅の石溜めは径150cmを測り，南西隅の石溜めは径240cmを測る。いずれも，人頭大から一抱えある角の取れた玄武岩が，無造作に投げ入れられた状態であった。



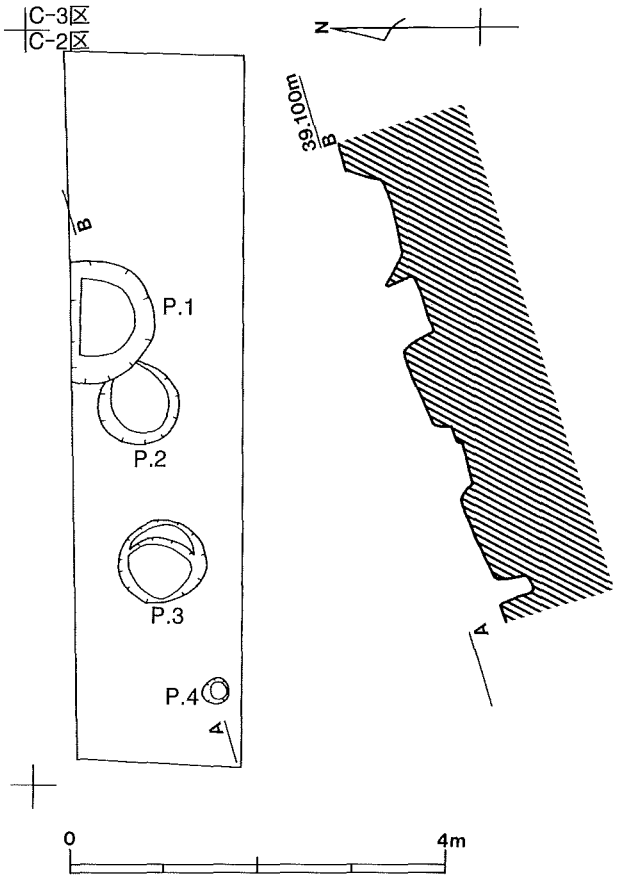
第13図　C－3区Ⅳa層中検出炉跡

C－4区検出遺構（第16図．17図，図版13）

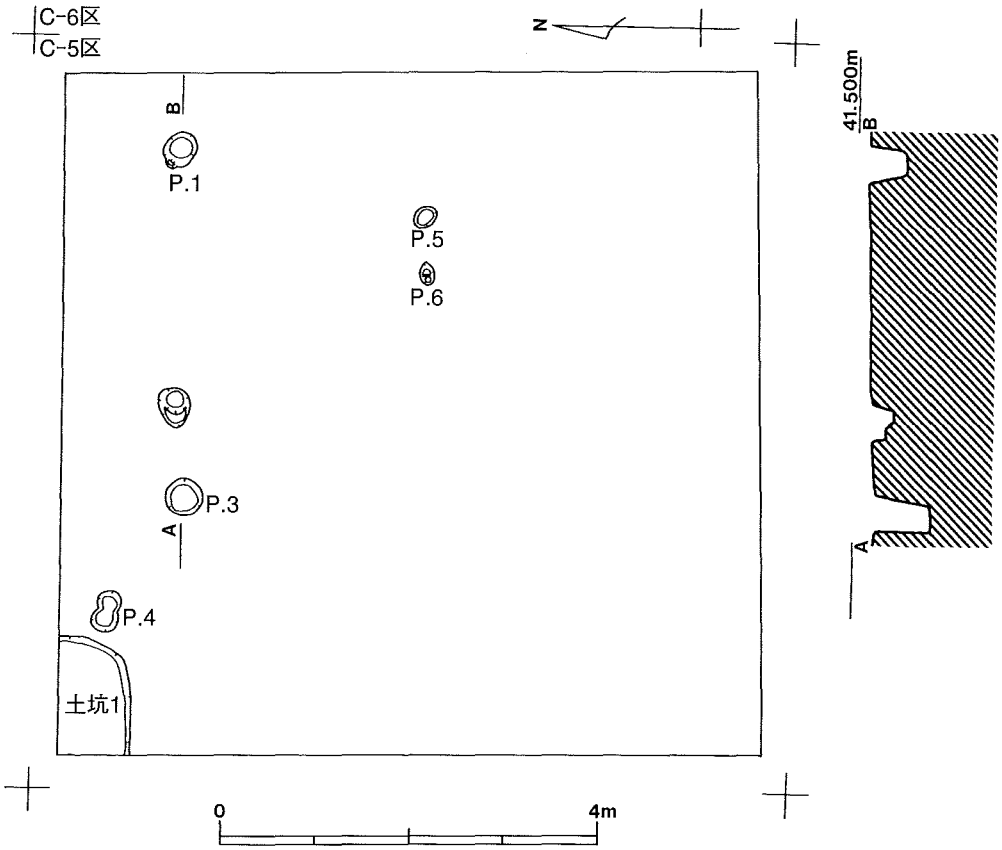
近世の包含層であるⅢ層下のⅤ層上面を精査中に，1基の土坑と6基のピットを検出した。土坑1は，長径120cm．短径110cm．深さ50cmを測り，平面形は円形を呈する。拳大の石が底に張り付いた状態で検出され，その間に陶磁器片が混入していた。陶磁器は，10点取り上げたが，小片が多く，陶器鉢底部（第29図9）と二重網目染付碗口縁部片（第29図10）の2点を図示した。18世紀前半の年代があてられるが，性格は不明である。

C－5区検出遺構（第15図）

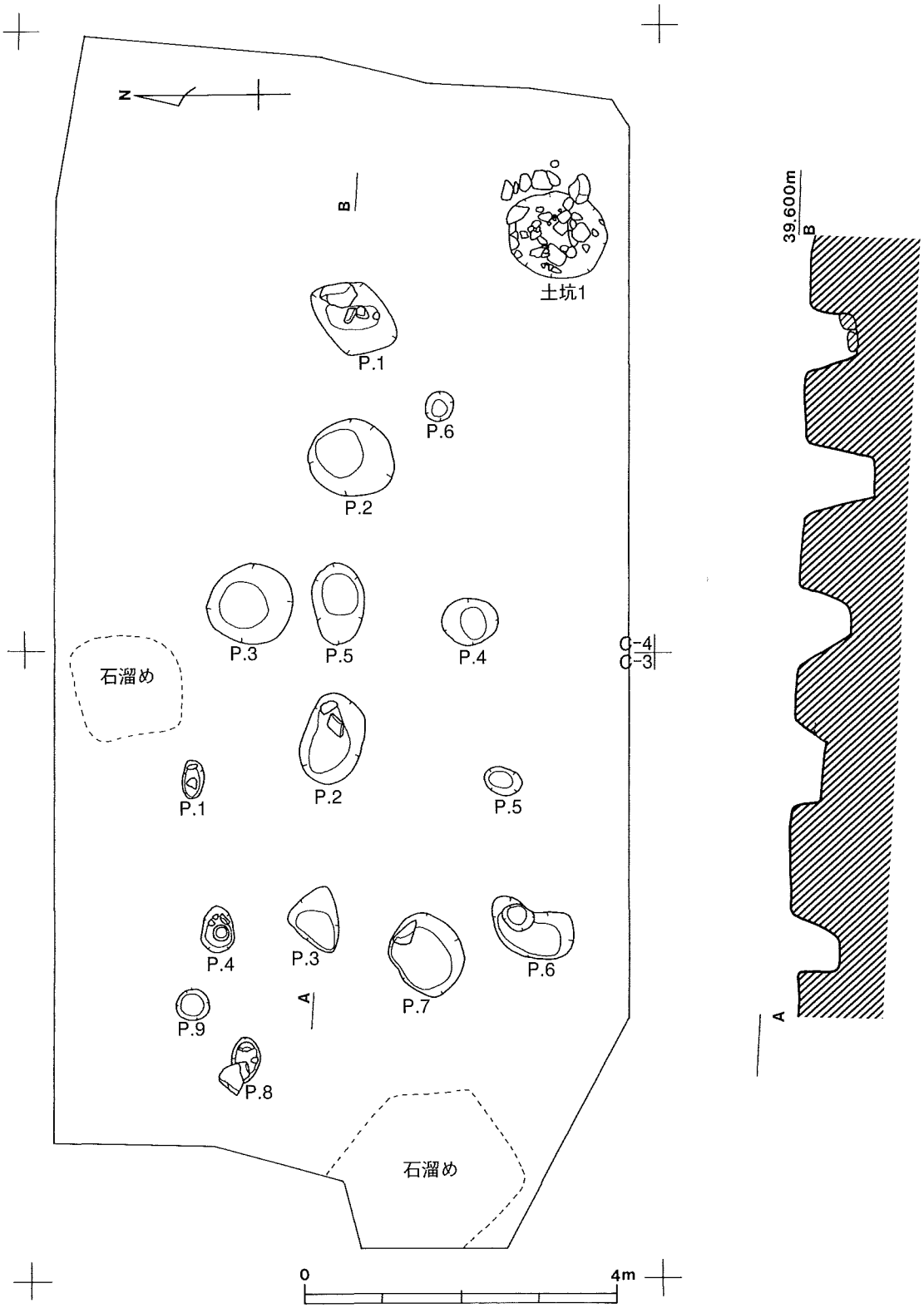
近世の包含層であるⅢ層下のⅣa層上面を精査中に，1基の土坑と6基のピットを検出した。土坑1は，グリッドの北西コーナーで検出したが，電柱の支えが傍にあったため，全体のプランを出すことが出来なかった。確認長径120cm．確認短径80cm．深さ40cmを測り，平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。覆土は，弱粘性の黒褐色土で微細な炭化物や焼土粒を全体に含み，基本土層のⅢ層と同じ土である。覆土より，染付碗口縁部片（第29図11）が出土した。



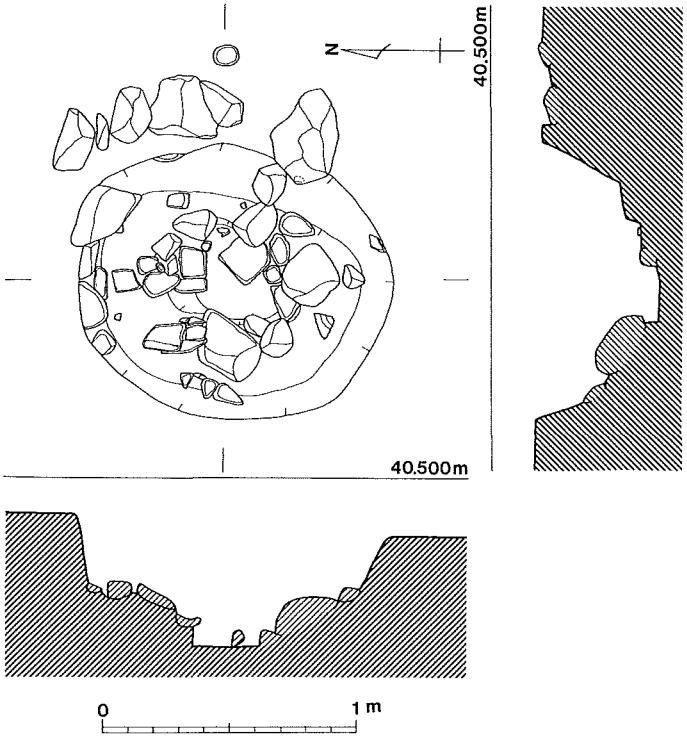
第14図　C－2区検出近世遺構



第15図　C－5区検出近世遺構



第16図　C－3・4区検出近世遺構



第17図　C－4区検出近世土坑

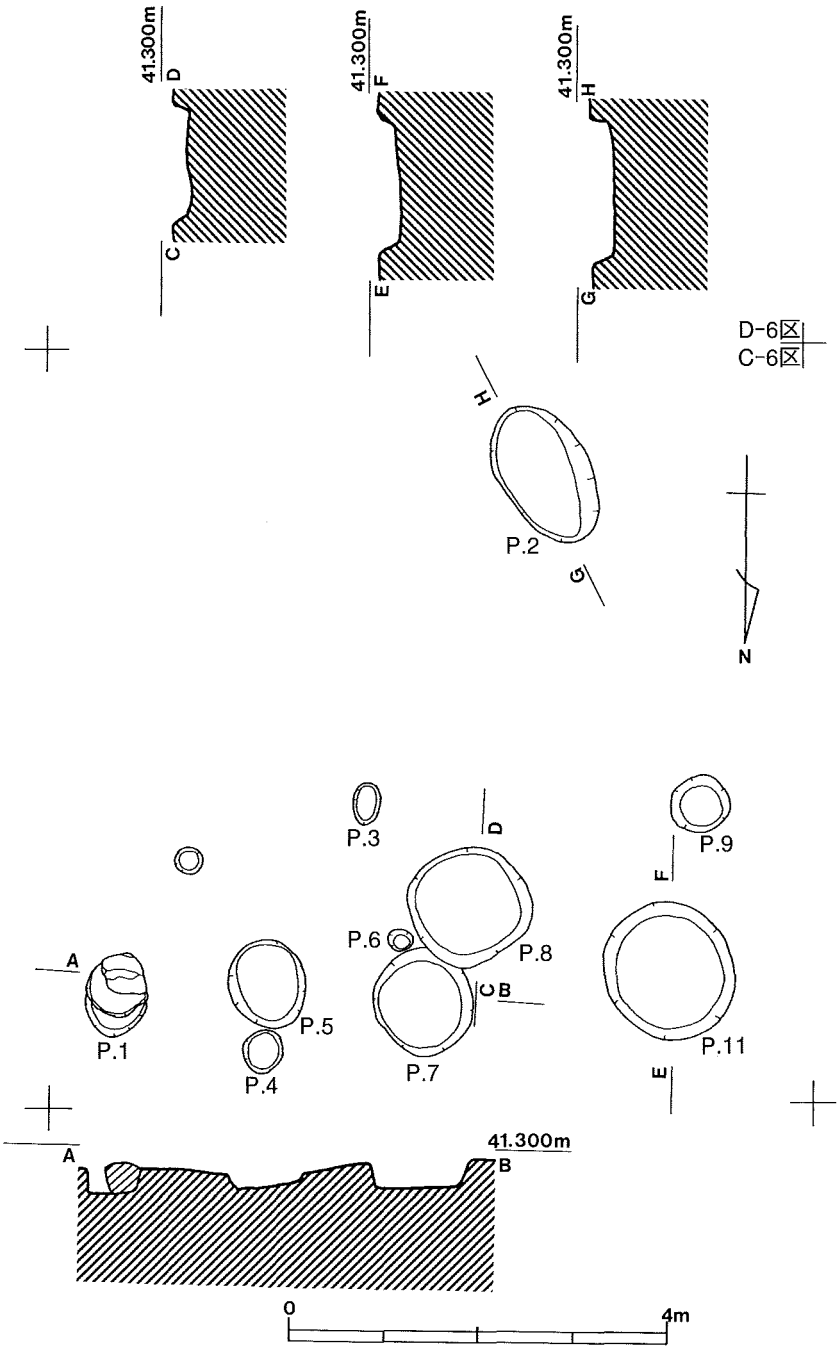
C－6区検出遺構（第18図）

表土下のⅣa層上面から11基のピットを検出した。ピット7は，径100cmの円形で深さ20cmを測る。覆土から染付皿（第29図12）と見込蛇ノ目釉剥ぎの陶器皿底部（第30図13）が出土した。ピット8は，径120cmの円形で深さ20cmを測る。覆土から，磁器小杯（第30図14）．陶胎染付火入底部片（第30図15）．刷毛目碗底部片（第30図16）が出土した。この地区は，調査区の中でも一番高い位置にあり，その分過去の造成の際には，削平の度合いも大きかったものと思われる。他グリッドのピットと比べ，このことが伺える。

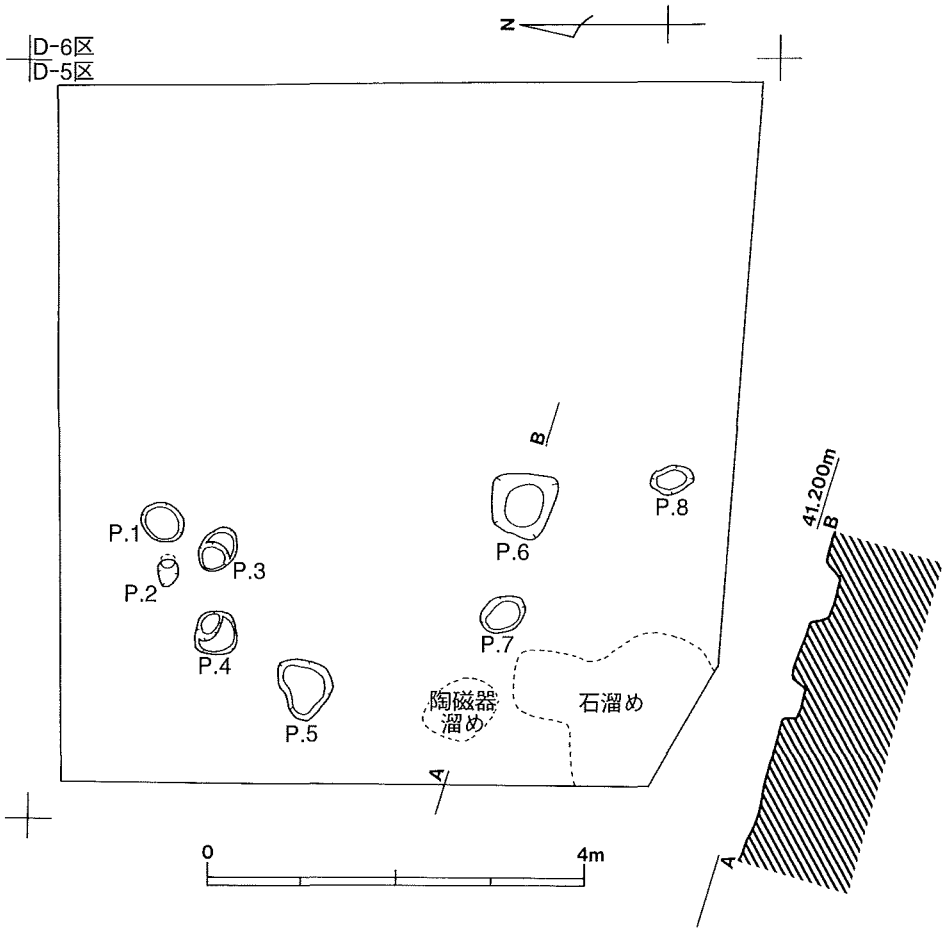
D－5区検出遺構（第19図，図版12）

表土下のⅣa層上面から8基のピットを検出した。1箇所の石溜め．1箇所の陶磁器溜めを検出した。石溜めは，調査区南側に広がり，確認できただけで径200cmを測る。中は，人頭大から一抱えある角の取れた玄武岩が，無造作に投げ入れられた状態であった。そのすぐ北からは，陶磁器溜りを検出した。陶磁器溜りは，長径80cm．短径60cm，窪みはほとんど確認できない範囲の中に20点の陶磁器片が集中していたが，遺物はいずれも小片で接合できるものも少なく，陶器製蓋（第30図17）と染付碗（第30図18）の2点を図示した。

（川畑　敏則）



第18図　C－6区検出近世遺構



第19図　D－5区検出近世遺構

4　出土遺物

(1)　縄文時代

①遺物の遺存状況（第20図～第23図）

調査では出土した土器や石器の形式から縄文時代早期の包含層と思われるⅣａ層～Ⅳｃ層(年代測定でも9000年前という結果がでた)で出土した遺物(土器＋石器)を原位置で記録した上で採取した。第20図～第23図はⅣａ層～Ⅳｃ層における遺物(土器＋石器)の平面分布と垂直分布を示したものである。

以下，層位別の概要を記す。

Ⅳｃ層は弱粘性の土で全体に黒いシミがはいる。遺物は検出されたが，量的には少ない。石器は少量，土器は一点である。

Ⅳｂ層は調査区西側で部分的に見られる。土質はⅣｃ層と同じである。遺物は石器が少量検出されたが，土器はこの層からは検出されていない。

Ⅳａ層は縄文時代早期の遺物包含層。後世の削平により，調査区東側ではわずかに残っている部分もあるがほとんどなくなっている。図で表されている遺物の大部分はこのⅣａ層からの出土である。土器は出土数も少なく状態も非常に悪い。かろうじて条痕文とわかるものが数点ある。石器も製品は少なくほとんどが剥片，砕片である。

平面分布を見ると石器はＡ－４，Ｂ－３区に特に集中が見られる。次いでＢ－４，Ｂ－２，Ｄ－５区も比較的出土数が多い。土器はＤ－５区からの出土がほとんどで他にＢ－３，Ｃ－３，Ｃ－５区に１～３点の出土が見られる。

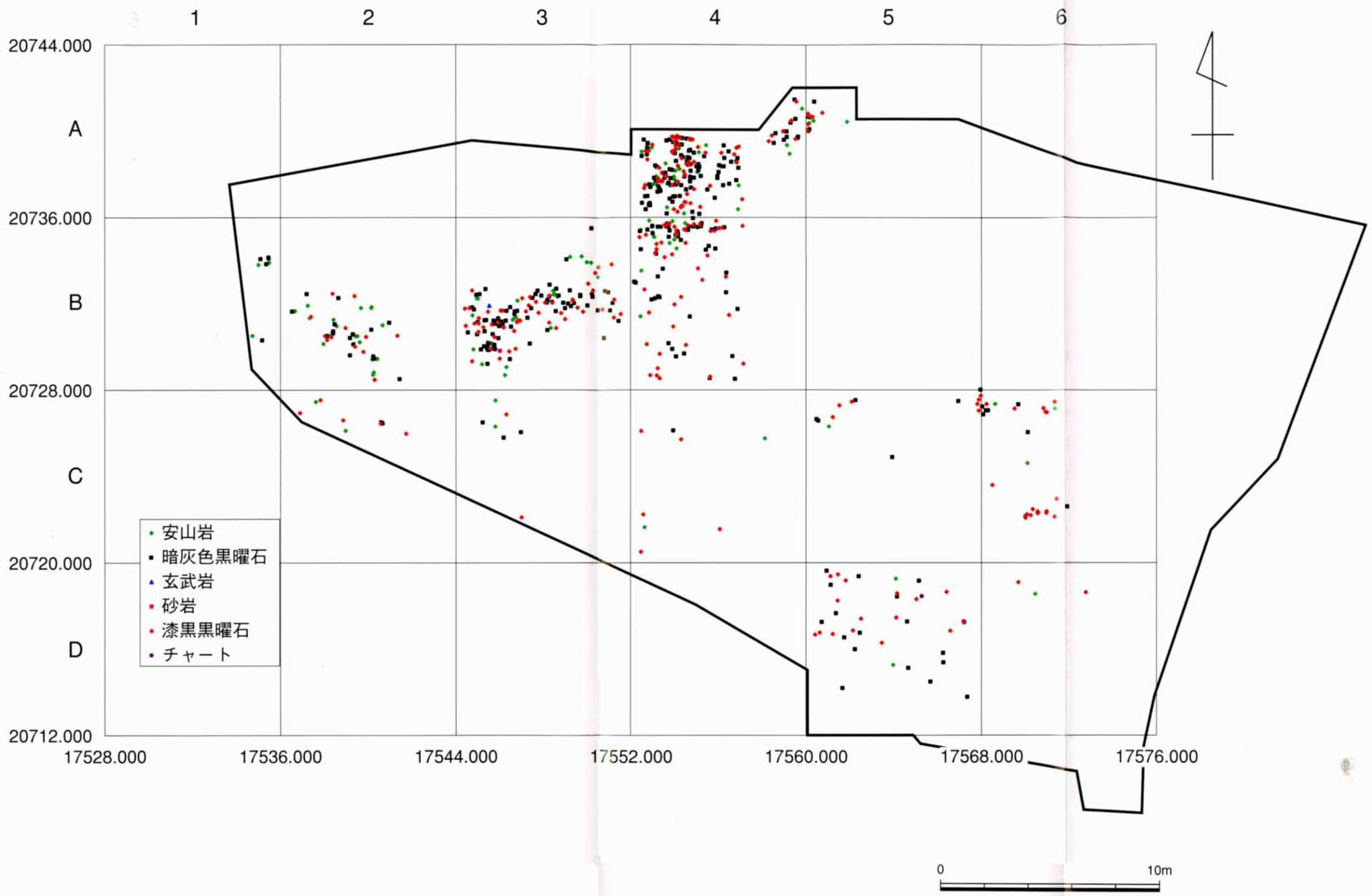
石器が出土していない区からは土器は出土しておらず，石器が出土しているレベルと土器が出土しているレベルはほぼ同じレベルであり，石器と土器の時期は同じと考えてよいと思われる。

石器の総数は643点で土器の総数は20点である。石器643点のうち製品，未製品，使用痕剥片をあわせた点数はわずか29点である。製品はＡ－４区に３点，Ｂ－３区に４点，Ｂ－４区に３点，Ｃ－５区に１点，Ｄ－５区に２点出土している。製品として出土しているものは打製石族５点，局部磨製石族４点，ドリル１点，スクレイパー２点，磨石１点である。石核はＢ－３区から１点出土していて剥片や砕片もＢ－３区は149点と多く出土している。

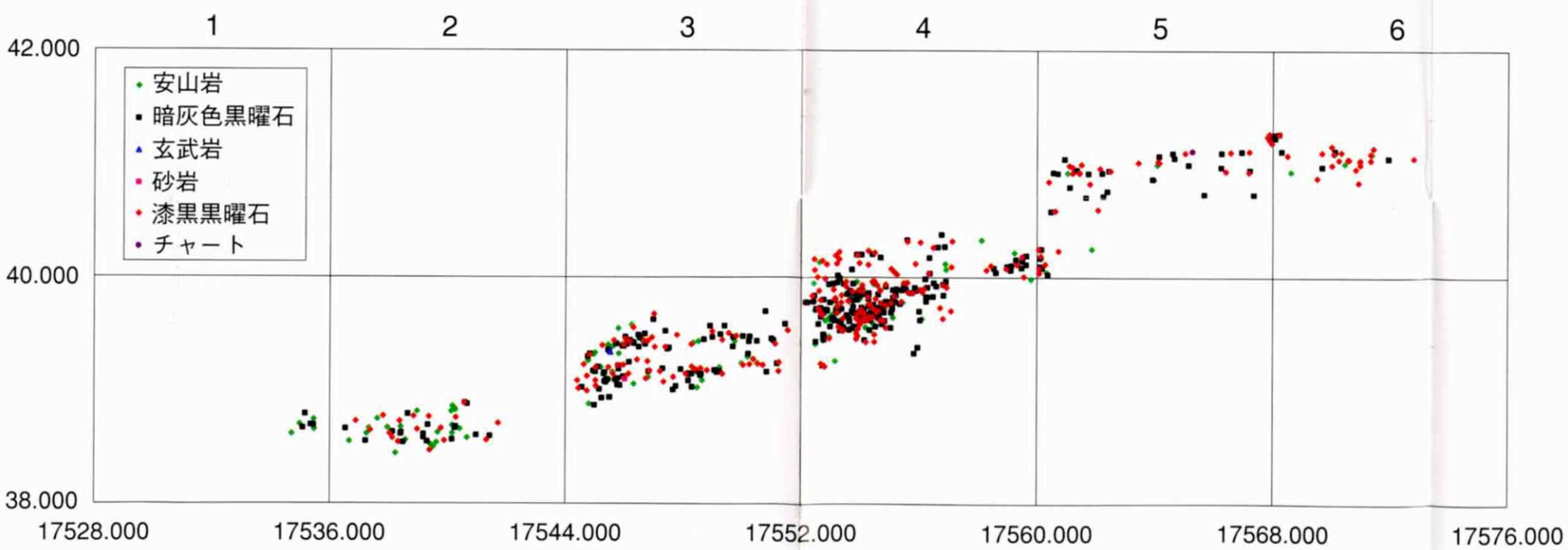
石材で見ると安山岩が107点，暗灰色黒曜石が294点，漆黒黒曜石が239点，玄武岩１点，砂岩１点，チャート１点で暗灰色黒曜石の割合がもっとも多い。

後世の削平によって包含層があまりのこっていなかったこともあるが，遺物（土器＋石器）の出土数は少なく遺構もＣ－４区の炉跡とＣ－５区の土壙しかでておらず，今回の調査の結果から考えると，この場所に長い間とどまったとは考えにくく，縄文人たちによって営まれた一時的（キャンプサイト的）な遺跡と想定される。

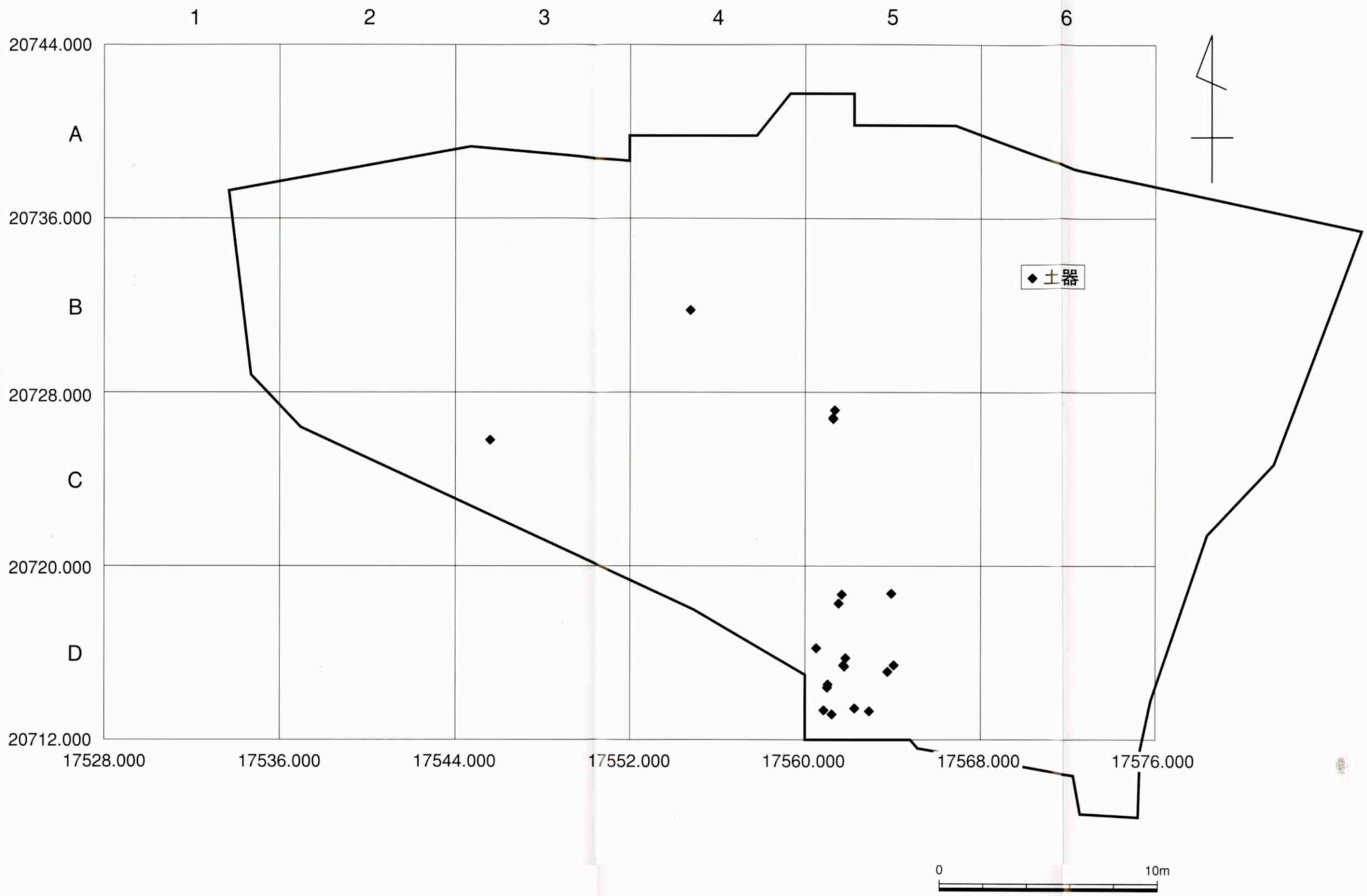
【引用・参考文献】
・古門雅高編　1996『頭ヶ島白浜遺跡』有川町文化財調査報告書第１集　有川町教育委員会
・辻田直人・竹中哲朗編　2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第３集　国見町教育委員会
・諫見富士郎編　2001『大野原遺跡』有明町文化財調査報告書第12集　有明町教育委員会



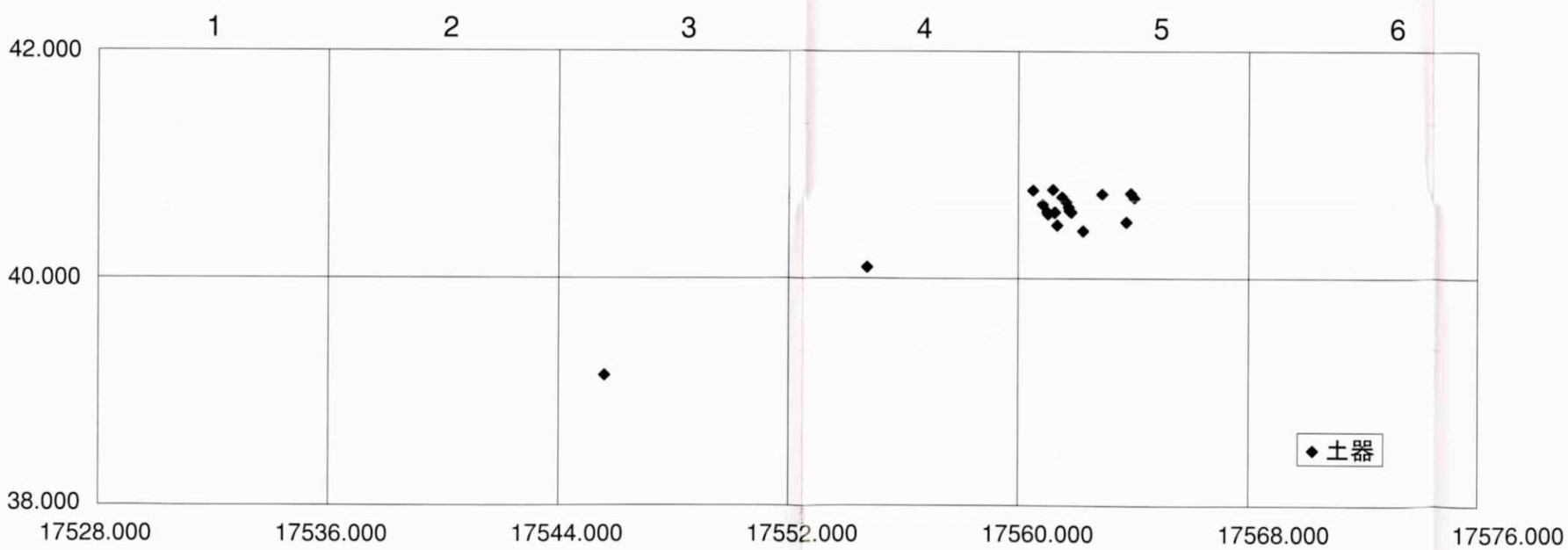
第20図　小野Ｆ遺跡出土石器平面分布図



第21図　小野Ｆ遺跡出土石器垂直分布図



第22図　小野Ｆ遺跡出土土器平面分布図



第23図　小野Ｆ遺跡出土土器垂直分布図

②土　　器（第24図，図版18～19）

【範囲確認調査での出土遺物】

1～4いずれも曽畑式土器である。1．3．4が口縁部片，2が胴部片で胎土中に滑石の破片や粉末を多く含む。いずれも磨耗がひどく4は胴部片の可能性もある。

1には横位の沈線文，2～4には横位と，斜位の沈線文が描かれている。

【本調査での出土遺物】

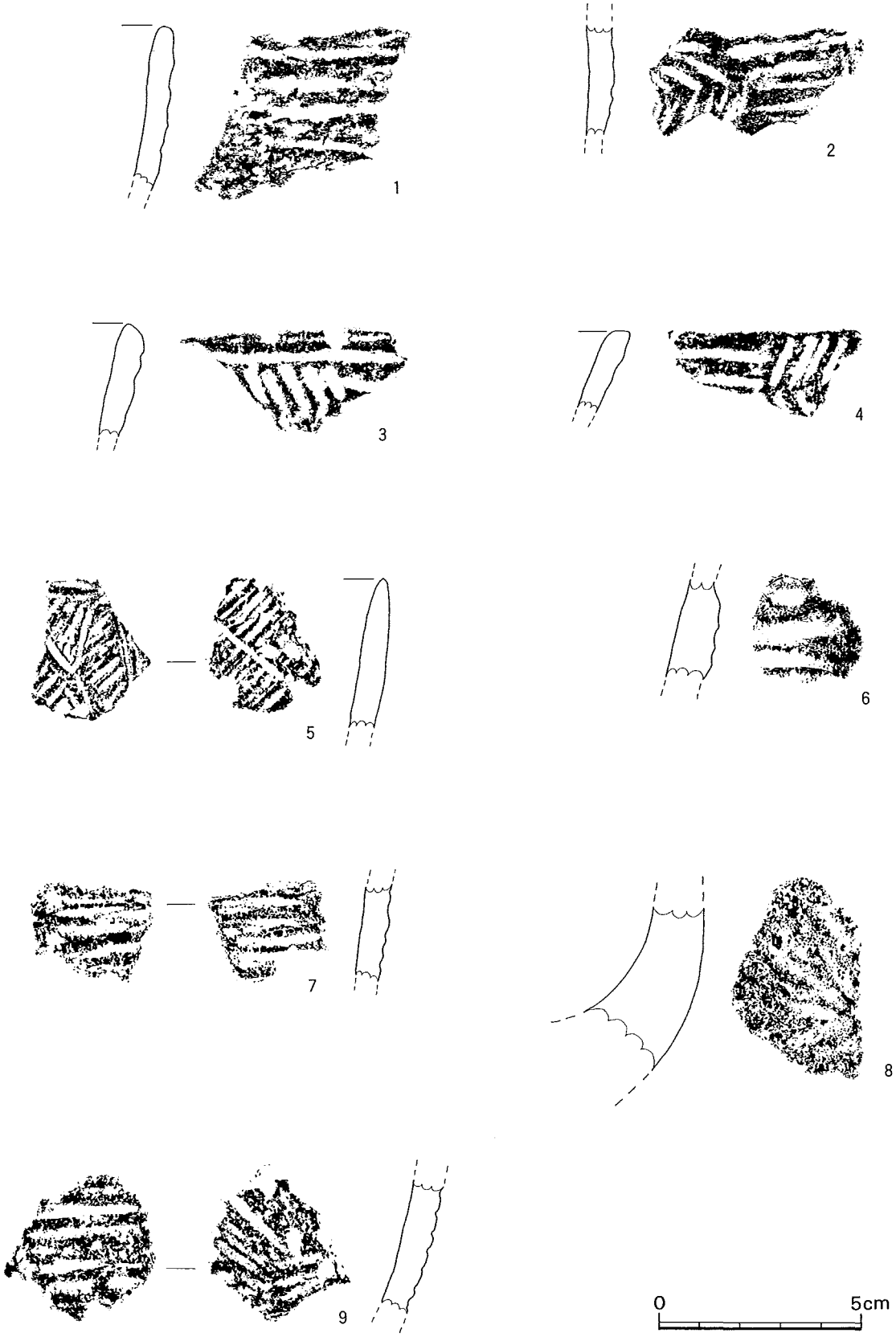
5は内面，外面に貝殻条痕が施された口縁部片で，胎土中には石英．長石．カクセン石を含む。6は外面に凹線が施された胴部片。胎土中には黒雲母．長石．石英．カクセン石を含む。磨耗が著しく器面が荒れてざらついている。7は内面，外面に横位の貝殻条痕が施された胴部片。胎土中には石英．長石．黒雲母を含む。8は器面が荒れているため拓影が不鮮明だが外面に条痕が施された底部片である。9は内面，外面に貝殻条痕が施された胴部片で，胎土中には石英．長石．黒雲母を含む。磨耗が著しく器面が荒れてざらついている。

番号	調査区	層位	器種・部位	厚さ(㎜)	焼成	色調(外)	色調(内)	胎土	文様・調整(外)	文様・調整(内)
1	TP2	5	口縁部	5	良	淡赤褐色	暗褐色	滑石，石英	沈線	
2	TP2	5	胴部	5	良	淡赤褐色	暗褐色	滑石，石英，金雲母	沈線	
3	TP2	5	口縁部	6	良	淡赤褐色	暗褐色	滑石，石英，金雲母	沈線	
4	TP2	5	口縁部	6	良	淡赤褐色	暗褐色	滑石，石英，金雲母	沈線	摩滅がひどく胴部の可能性もある。
5	表採		口縁部	7	良	黄褐色	黄褐色	石英，長石，カクセン石	条痕	条痕
6	B－4	Ⅳc	胴部	10	不	赤褐色	暗灰色	黒雲母，長石，石英，カクセン石	凹線	
7	D－5	Ⅳa	胴部	8	不	黄褐色	黄褐色	石英，長石，黒雲母	条痕	条痕
8	C－3	Ⅲ	底部	22	不	赤褐色	黒色	石英，長石，黒雲母	条痕	
9	D－5	Ⅳa	胴部	8	不	赤褐色	黄褐色	石英，長石，黒雲母	条痕	条痕

表4　縄文時代の土器観察表

【引用・参考文献】

・諫見富士郎編　2001『大野原遺跡』有明町文化財調査報告書第12集　有明町教育委員会
・村川逸朗・井立尚編　2003『供養川遺跡』長崎県文化財調査報告書第174集　長崎県教育委員会
・川口洋平編　2002『玖島城跡』長崎県文化財調査報告書167集　長崎県教育委員会
・荒木伸也編　2000『雪浦清水遺跡』大瀬戸町文化財調査報告書第2集　大瀬戸町教育委員会
・安楽勉・中田敦之編　1985『楼楷田遺跡』長崎県文化財調査報告書第76集　長崎県教育委員会
・同志社大学考古学研究室編　1990『伊木力遺跡－長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査－』多良見町文化財調査報告書第7集　多良見町教育委員会



第24図　出土土器

③石　　器（第25図～第28図，図版20～27）

【石鏃】

１～４は局部磨製石鏃。１～４どれも両面に研磨が施してある。石材は１．３．４が漆黒黒曜石，２が灰白色黒曜石。５．６．９は基部を抉り込んだ凹基鏃。いずれも漆黒黒曜石である。７は平基鏃である。石材は漆黒黒曜石。８はかなり安山岩に近い暗灰色黒曜石製の石鏃。

【石鏃未製品】

10は図正面の頭部．基部．左側縁部に部分的な細部加工を施し，裏面は基部に加工を施して概形を作り上げたものである。11は図正面の頭部．基部に部分的な細部加工を施し，裏面は基部．左側縁部に加工を施して概形を作り上げたものである。10．11ともに暗灰色黒曜石製。12は暗灰色黒曜石製。図正面の頭部．基部．左側縁部に加工が施してある。右側縁部はわずかに加工がみられるがほぼ剥片の素刃からなる。裏面は頭部．基部．右側縁部に加工が施してある。

【スクレイパー】

13は図正面の右側縁部に両面から粗い調整剥離が施されている。石材は暗灰色黒曜石。15は図正面の下辺に調整剥離を施して刃部を作り出している。裏面は調整が施されておらず自然面を残す。石材は暗灰色黒曜石。

【ドリル】

14は図正面左側縁部．右側上縁部に細部調整を施して整形したドリル。裏面に調整は見られない。石材は暗灰色黒曜石。スクレイパーとして使用された可能性もある。

【使用痕剥片】

16は図正面の右側縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕がある暗灰色黒曜石の剥片。中央から左側は自然面である。試掘時に出土した遺物である。17は図正面の左側縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕がある縦長剥片で，石材は暗灰色黒曜石である。18は図正面の右側縁に細部調整が施されている。石材は暗灰色黒曜石。19は図正面の下縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕がある縦長剥片で，石材は暗灰色黒曜石。20は図正面側に縦走する稜線をひとつもつ縦長剥片。両側縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕がある。石材は漆黒黒曜石。21は図正面左下側縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕があり，右側縁の一部に細部調整が施されている。石材は漆黒黒曜石。22は図正面の上縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕がある暗灰色黒曜石の縦長剥片。23は図正面側に縦走する稜線をひとつもつ漆黒黒曜石の縦長剥片。左側縁と右下縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕がある。24は右側縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕がある暗灰色黒曜石の剥片。25は右側縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕がある漆黒黒曜石の縦長剥片。26は図正面右側縁と裏面右下縁に細部調整が施された安山岩の剥片。27は図正面の左下縁と裏面左側縁に剥離痕がある安山岩の剥片。28は図正面の左側縁と裏面右下縁に剥離痕がある暗灰色黒曜石の剥片。29はほぼ全体縁に剥離痕がある暗灰色黒曜石の剥片。

30は左側縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕がある安山岩の剥片。31は末端部両面にかけ，急斜度調整した安山岩の剥片。この調整により末端部に尖頭部をつくりだしている。32は図裏面の左側縁に剥離痕がある暗灰色黒曜石の剥片。33は左側縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕がある漆黒黒曜石の縦長剥片。34は図正面側に縦走する稜線をひとつもつ漆黒黒曜石の縦長剥片。左側縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕がある。

【石核】

35は剥片剥離が完全に終了した石核。サイコロ状を呈している。剥離作業面は全面にわたっていて層状を呈した自然面を一部残す。石材は暗灰色黒曜石。36は剥片剥離が完全に終了した石核。いわゆるサイコロ状を呈している。正面側に2枚．左側に3枚．右側に2枚．上に2枚の剥離面を持つ。石材は漆黒黒曜石。自然面は層状を呈している。

【磨石】

37は上面一面を磨面として利用。砂岩の円礫を利用してある。半欠している。

【磨製石斧】

38はデイ岩質で刃部が破損し，基部は少しすぼまっている。全体的に研磨してあり，比較的厚めである。

（織田　健吾）

NO	層位	器種	石種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重さ(g)	備考
1	表採	石鏃	漆黒色黒曜石	12	8	2	0.2	局部磨製石鏃，両脚欠損
2	Ⅳa	石鏃	灰白色黒曜石	13	9	3	0.1	局部磨製石鏃，片脚欠損
3	Ⅳa	石鏃	漆黒色黒曜石	12	13	3	0.4	局部磨製石鏃，先端欠損
4	Ⅳa	石鏃	漆黒色黒曜石	20	10	3	0.4	局部磨製石鏃，片脚欠損
5	Ⅳ	石鏃	漆黒色黒曜石	23	17	4	0.8	片脚欠損
6	Ⅳa	石鏃	漆黒色黒曜石	24	16	4	0.8	先端と片脚欠損
7	Ⅳa	石鏃	漆黒色黒曜石	18	13	3	0.5	両脚欠損
8	Ⅳa	石鏃	暗灰色黒曜石	12	14	4	0.4	胴下半部欠損
9	Ⅳa	石鏃	漆黒色黒曜石	21	12	4	0.9	先端と片脚欠損
10	表採	石鏃未製品	灰色黒曜石	16	12	5	0.8	
11	表採	石鏃未製品	暗灰色黒曜石	26	24	6	3.3	
12	Ⅳa	石鏃未製品	暗灰色黒曜石	35	14	6	2.6	
13	Ⅳa	スクレイパー	暗灰色黒曜石	58	39	16	27.2	
14	Ⅳc	ドリル	暗灰色黒曜石	60	25	10	11.5	先端部欠損，裏面に明瞭な調整痕は見られない
15	Ⅳa	スクレイパー	暗灰色黒曜石	22	43	8	7.7	
16	表採	使用痕剥片	暗灰色黒曜石	32	19	9	4.3	試掘時に出土
17	Ⅳa	使用痕剥片	暗灰色黒曜石	40	20	5	4	左側辺に使用痕有り
18	表採	使用痕剥片	暗灰色黒曜石	33	25	7	6.8	
19	Ⅳa	使用痕剥片	暗灰色黒曜石	29	24	9	5.3	
20	Ⅳa	使用痕剥片	漆黒色黒曜石	37	14	4	1.9	両辺に使用痕有り
21	Ⅳa	使用痕剥片	漆黒色黒曜石	38	27	5	3.2	
22	Ⅳa	使用痕剥片	暗灰色黒曜石	37	28	9	9.4	
23	Ⅳa	使用痕剥片	漆黒色黒曜石	29	13	5	1.2	
24	Ⅳa	使用痕剥片	暗灰色黒曜石	37	26	10	6.3	
25	Ⅳa	使用痕剥片	漆黒色黒曜石	40	28	9	8.4	左下端に使用痕有り
26	Ⅳa	使用痕剥片	安山岩	39	48	9	11.7	
27	Ⅳa	使用痕剥片	安山岩	52	62	12	37.6	
28	Ⅳa	使用痕剥片	暗灰色黒曜石	22	23	8	4	
29	表採	使用痕剥片	暗灰色黒曜石	34	32	5	4.8	
30	Ⅳa	使用痕剥片	安山岩	55	29	11	9.5	
31	Ⅳa	使用痕剥片	安山岩	45	32	17	17	
32	Ⅲ(試掘)	使用痕剥片	暗灰色黒曜石	35	32	16	14.9	試掘時に出土
33	Ⅳa	使用痕剥片	漆黒色黒曜石	23	10	3	1	右側面に使用痕有り
34	Ⅳa	使用痕剥片	漆黒色黒曜石	17	10	2	0.6	片側縁に微細な調整痕有り
35	表採	石核	暗灰色黒曜石	26	33	35	31.6	
36	Ⅳa	石核	漆黒色黒曜石	21	26	21	7.4	
37	Ⅳa	磨石	砂岩	83	59	34	235	円礫を使用。上面一面を磨面として利用，半欠
38	表採	磨製石斧	デイ岩	92	52	32	191.1	試掘時に出土，刃部破損

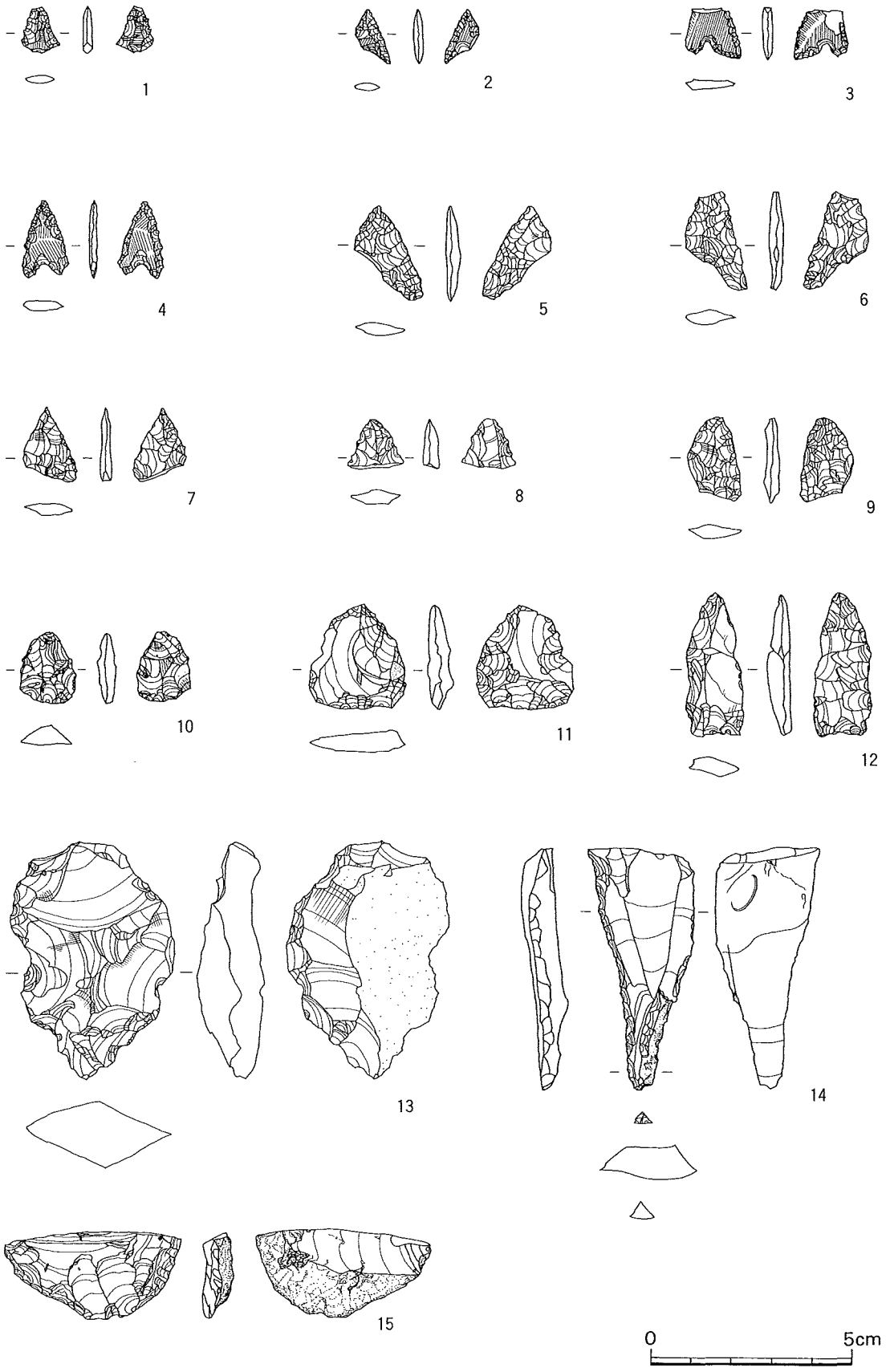
表5　縄文時代の石器計測表

【引用・参考文献】

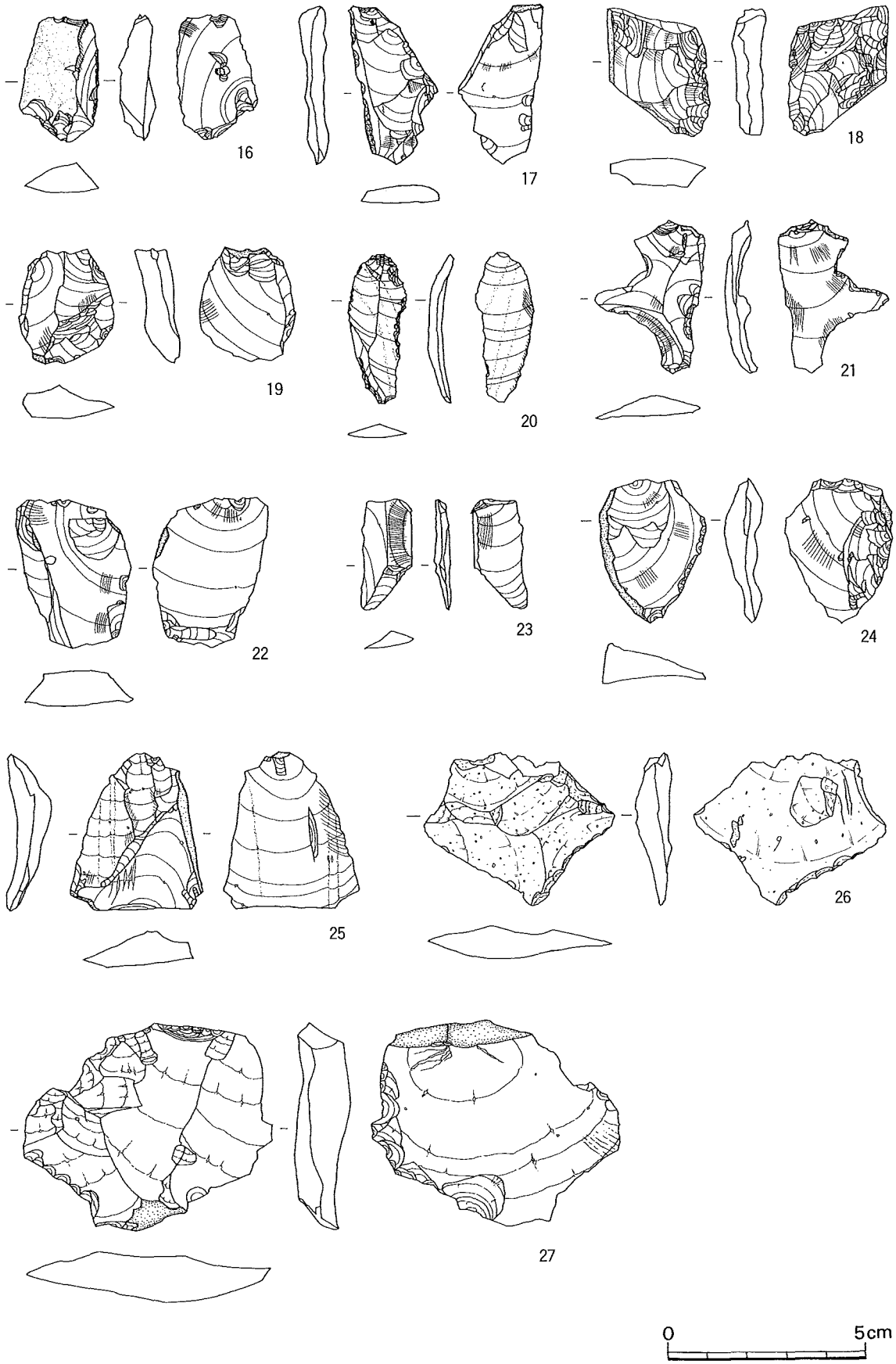
・荒木伸也編　2000『雪浦清水遺跡』大瀬戸町文化財調査報告書第2集　大瀬戸町教育委員会

・諫見富士郎編　2001『大野原遺跡』有明町文化財調査報告書第12集　有明町教育委員会

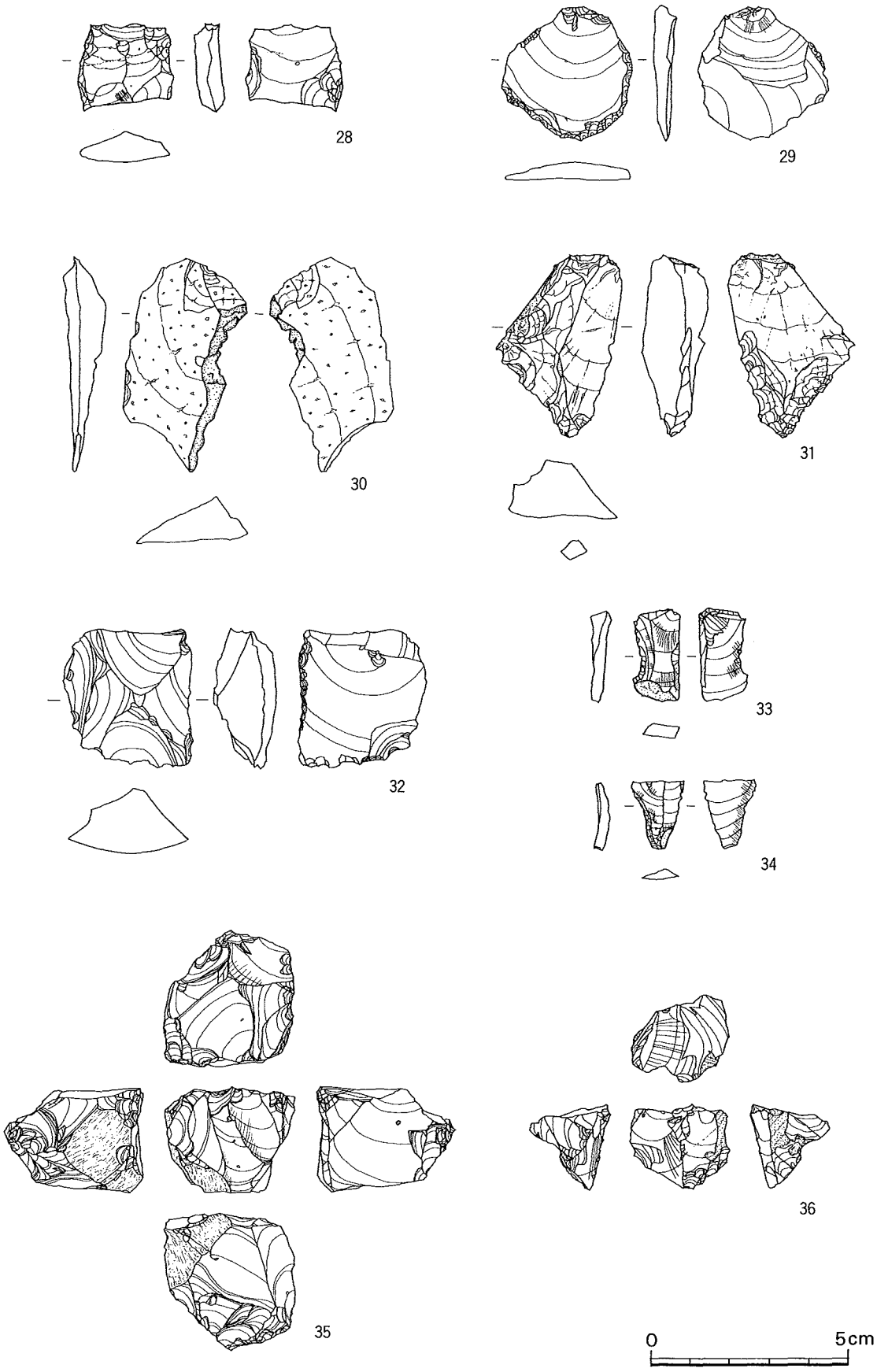
・同志社大学考古学研究室編　1990『伊木力遺跡－長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査－』多良見町文化財調査報告書第7集　多良見町教育委員会



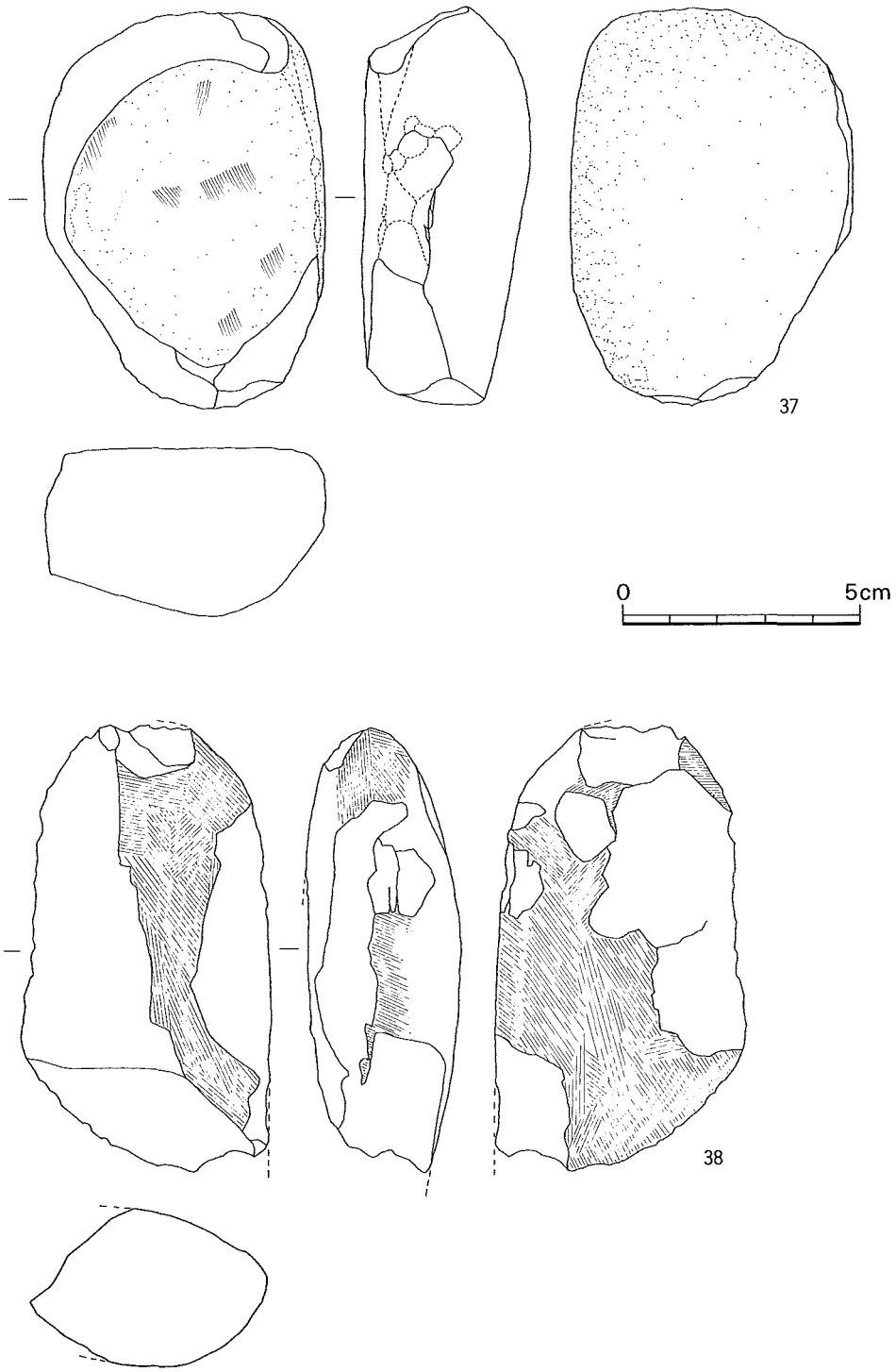
第25図　出土石器①



第26図　出土石器②



第27図　出土石器③



第28図　出土石器④

(2) 近　　世

①陶　磁　器（第29図～第32図，図版28～55）

陶磁器の編年については，『九州陶磁の編年』を参考とした。

１～18は遺構内出土の遺物である。**1**は，Ｃ－２区ピット１より出土した見込蛇ノ目釉剥ぎの染付皿底部である。底径4.3cmを測る。高台際から高台にかけては露胎である。胎土は若干灰色がかった白色で，焼成も良好であるため緻密な感じを受ける。見込に文様が見られるが，一部分であるために全体については不明である。体部下半が無釉であることからⅣ期の所産と考えられる。**2**は，Ｃ－２区ピット２から出土した陶器製火入と思われる口縁部片である。折り返しにより作り出された玉縁口縁を持ち，直立した頸部から段を持ち胴部に至る。赤褐色胎土で，外面には刷毛目が施され口縁部には鉄釉が掛かる。内面は露胎である。**3**は，Ｃ－２区ピット２から出土した染付碗の口縁部である。外面に文様が描かれる。**4**は，Ｄ－２区ピット４から出土した見込蛇ノ目釉剥ぎの染付碗である。復元口径10.6cm．底径4.5cm．器高5.8cmを測る。腰部には１条の圏線が巡り，その上に連続唐草文が描かれる。高台には２条，高台内に１条の圏線が巡る。胎土は，灰白色で緻密である。白濁した釉が掛けられ，見込部分が蛇ノ目釉剥ぎされている。畳付にも釉は掛からない。Ⅳ期の所産と考えられる。**5**は，Ｃ－３区ピット２から出土した擂鉢の口縁部である。口縁内面が肥厚し体部との境に段を作る。胎土は灰褐色で硬く焼き締まっている。鉄釉が掛けられるが口縁部より下は露胎である。Ⅲ期の所産と考えられる。類例に長崎市築町遺跡出土品がある。**6**は，Ｃ－３区ピット３から出土した染付碗である。体部外面に草花文が描かれる。胎土は白色で呉須の発色も良好である。口縁部は二次的な被熱によるものかわずかに黒変している。**7**は，Ｃ－３区ピット３から出土した染付碗である。復元口径10.3cm．底径4.0cm．器高5.7cmを測る。外面に草花文を描く。胎土は白色で，微細な黒色粒子を全体に含む。全面施釉後畳付の部分の釉を剥ぎ取っている。Ⅳ期の所産と考えられる。**8**は，Ｃ－３区ピット７より出土した見込蛇ノ目釉剥ぎの染付皿底部である。底径4.2cmを測る。見込には２条の圏線が見られる。胎土は若干灰色がかった白色で，微細な黒色粒子を全体に含む。畳付の釉も掻き取られている。Ⅴ期の所産と考えられる。**9**は，Ｃ－４区土壙１から出土した陶器製鉢の底部片である。復元底径14.4cmを測る。高台の外側を斜めに削り落としている点が特徴的である。胎土は，赤褐色で２㎜大までの砂粒をまばらに含む。内面は，白化粧土で刷毛目が施されその上から黒褐色の釉が流し掛けされる。外面は，白化粧土は見られず黒褐色の釉だけが施される。高台および体部下半に回転ヘラ削り痕が残る。回転ヘラ削りの際の轆轤の回転は反時計回りである。**10**は，Ｃ－４区土壙１から出土した染付碗の口縁部片である。外面に二重網目文を描き，灰白色の胎土である。**11**は，Ｃ－５区土壙１から出土した染付碗の口縁部である。外面に文様が描かれる。胎土は，微細な黒色粒子を全体に含み締まっておらずざっくりとした感じである。内面は，釉が煮えざらついている。**12**は，Ｃ－６区ピット７より出土した見込蛇ノ目釉剥ぎの染付皿である。口径12.2cm．底径4.3cm．器高3.8cmを測る。見込に１条の圏線が巡り，その上に二重斜格子文が描かれる。裏文様はない。畳付も露胎である。見込と畳付の露胎部分には砂が付着する。Ⅳ期の所産と考えられる。**13**は，Ｃ－６区ピット７から出土した陶器皿である。内野山窯系といわれる皿で，内面は全面施釉後蛇ノ目釉剥ぎされ，鶯色で光沢のある緑釉には全体に細かな貫入が入る。外面は，体部上半に透明釉が掛かる。胎土は，黄白色で砂粒を

含まず精選されている。底径3.8cmを測る。Ⅳ期の所産と考えられる。**14**は，Ｃ－６区ピット８から出土した磁器小杯である。復元口径7.8cm．底径2.9cm．器高3.7cmを測る。腰部から内弯しながら膨らみを持って立ち上がり，口縁部が外反する。胎土は灰色で微細な黒色粒子をまばらに含み，白濁した釉が畳付けを除き全体に掛かる。**15**は，Ｃ－６区ピット８から出土した陶胎染付の筒型火入底部片である。復元底径5.2cmを測る。高台畳付は幅1.0cmと幅広で，腰から体部へ向けてほぼ垂直に立ち上がる。腰部には１条の圏線が巡る。胎土は，灰白色で軟質である。外面には白色の化粧土が薄く掛けられ，全面施釉後畳付の釉が掻き取られる。内外面とも貫入が著しい。Ⅳ期の所産と考えられる。**16**は，Ｃ－６区ピット８から出土した陶器製の刷毛目碗底部片である。胎土は，薄い灰褐色で内外面に白土による刷毛目が施される。畳付のみ露胎であるが，砂が僅かに付着する。**17**は，Ｄ－５区陶磁器溜めから出土した陶器蓋である。復元外径9.2cm．復元内径7.0cmを測る。上面中央には，つまみが付いていた痕跡が残る。胎土は茶褐色で白色の粒子を含み，よく焼き締まっている。上面のみ白化粧土が施され青灰色の釉が掛かる。**18**は，Ｄ－５区陶磁器溜めから出土した染付碗である。口径9.8cm．底径3.8cm．器高5.6cmを測る。外面腰部に１条の圏線が巡り，その上に草花文を描く。高台には２条の圏線が巡り，高台内には崩れた銘款を記す。胎土は若干灰色を帯びた白色で，微細な黒色粒子を全体に含む。全面施釉後畳付の部分の釉を剥ぎ取っているが，高台に砂の付着が見られる。この碗の最大の特徴は，大きなゆがみと焼成時における他製品との融着痕，そして見込に見られる降灰痕があることである。これらの点に関しては，後述する。Ⅳ期の所産と考えられる。

19～23は，包含層より出土した遺物である。小片が多く，図化できるものを選んだ。**19**は，Ｂ－３区Ⅱ層から出土した陶器皿である。内野山窯系といわれる皿で，内面は，青緑色で光沢のない緑釉が全面施釉後蛇ノ目釉剥ぎされている。外面は，体部上半に透明釉が掛かる。胎土は，黄白色で砂粒を含まず精選されている。復元口径13.4cm．復元底径4.2cm．器高3.5cmを測る。Ⅳ期の所産と考えられる。**20**は，Ｂ－３区Ⅱ層から出土した染付皿である。復元口径14.1cm．復元底径8.1cm．器高4.0cmを測る。外面腰部に１条の圏線が巡り，その上に唐草文を描く。高台には２条の，高台内には１条の圏線が巡る。内面は，見込に２条の圏線が巡り，体部には花文が描かれる。胎土は灰白色で，畳付を除き釉が掛かる。焼成の際の融着痕が口縁部に残り，形も歪んでいる。Ⅳ期の所産と考えられる。**21**は，Ｂ－３区Ⅱ層から出土した磁器製仏飯器である。底径4.2cmを測る。脚部と杯部を別々に作り接合させて成形している。腰部に１条の圏線が巡る。脚部にも２条の圏線が巡るが，轆轤の回転を利用せずに描いているため，水平に描かれていない。胎土は，不純物が無く精選されている。脚部より上位に，ガラス質にならずガサついた白濁の釉が秩序なく掛かる。呉須の発色も悪く黒色を呈する。圏線の描き方や釉の掛けかたから丁寧に作っていない感じを受ける。Ⅳ期の所産と考えられる。**22**は，Ｂ－３区Ⅱ層から出土した擂鉢である。口径35.0cm．底径13.8cm．器高12.1cmを測る。僅かに肥厚した口縁は外反し，口縁下には断面三角形の凸帯が巡る。また，口縁部には形骸化した片口が付く。内面は，最大23条の櫛目で擂目が付けられ後，口縁部内外面に横ナデが施される。胎土は赤褐色で５㎜大の白色礫を僅かに含む。鉄釉であろう黒茶色の釉が畳付を除き全面に施されている。焼成は良好で，高台内面に広く砂が付着する。内底部にも底径と同じ大きさで砂が付着することから重ね焼きを行った痕跡であろうことが伺える。底部中央には径６cm程の穴が穿ってある。擂鉢の利用後植木鉢として再利用したものと考えられる。**23**は，Ｃ－３区Ⅱ層から出土した染付皿である。外面に唐草文を，内面に

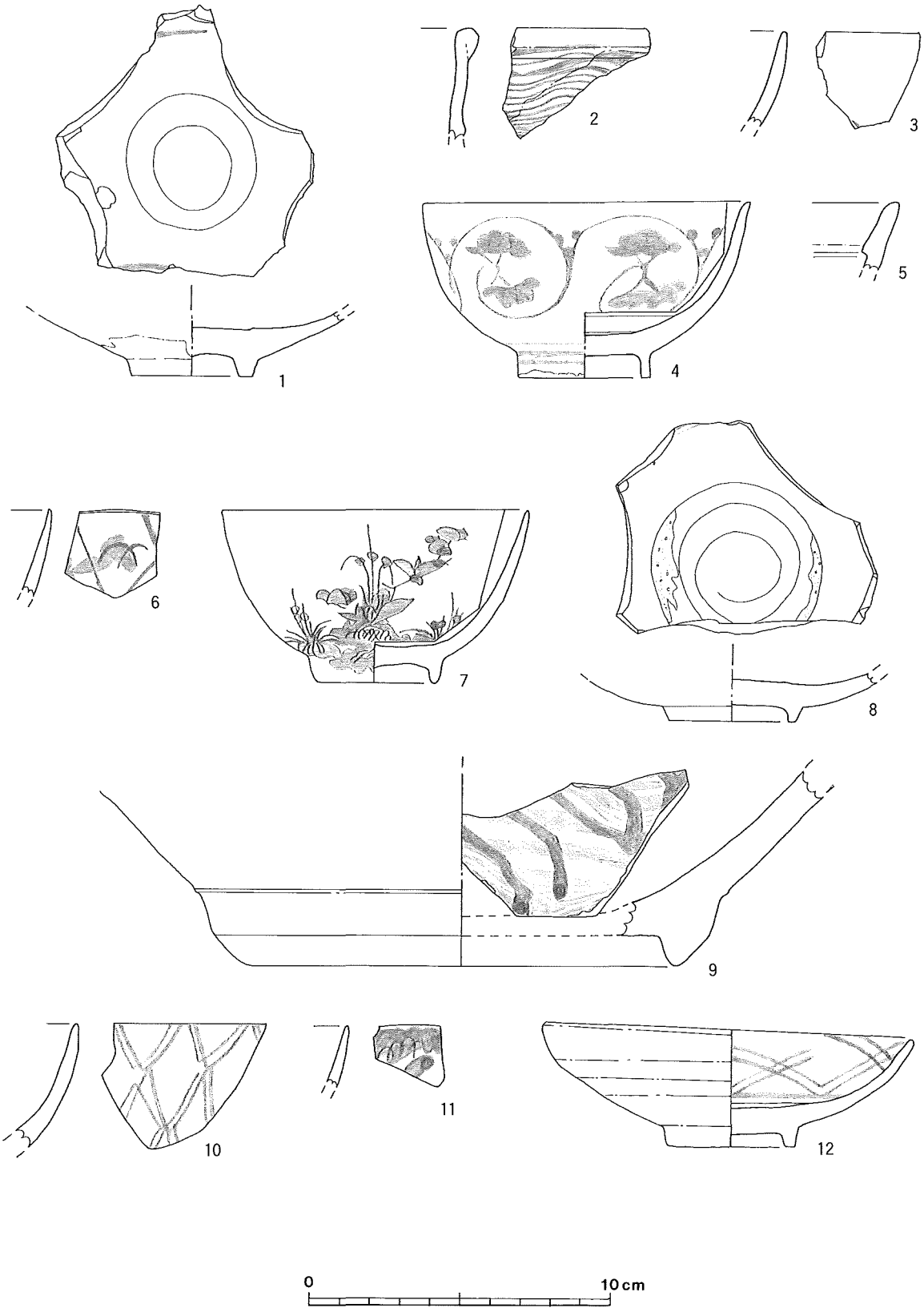
草花文を描く。胎土は灰白色で，厚手の作りである。

24から39は，重機で表土剥ぎをした際に出土した遺物である。Ⅱ層およびⅢ層中にあったものと思われるが，出土地点については不明である。特徴的なものを図化した。**24**は，染付碗である。底径4．0cmを測る。外面は，高台脇に２条の圏線が巡り，その上に草花文を描く。高台高は0.3cmと低い。胎土は若干灰色を帯びた白色で不純物は含まない。全面施釉後畳付部分の釉を剥ぎ取っているが，高台内中央と畳付に砂の付着が見られる。呉須の発色が大変良い。Ⅳ期の所産と考えられる。**25**は，染付碗である。復元底径4.2cmを測る。外面腰部に１条の圏線が巡り，その上に草花文を描く。高台には２条の圏線が巡る。高台内には１条の圏線が巡り，中央に崩れて文様化した銘款が描かれる。胎土は若干灰色を帯びた白色で，微細な黒色粒子を全体に含む。全面施釉後畳付部分の釉を剥ぎ取っているが，高台に砂の付着が僅かに見られる。見込には，焼成の際の降灰痕が著しく器面がひどく荒れている。Ⅳ期の所産と考えられる。**26**は，染付皿である。復元底径3.8cmを測る。外面腰部に１条の圏線が巡り，その上に草花文を描く。高台には２条の圏線が巡る。内面は，見込に２条の圏線が巡り，中央には手書きの五弁花が描かれる。体部にはリンボウが一周する。胎土は白色で，貫入のある透明釉が畳付を除き掛かる。呉須の発色は黒味が強く出ている。**27**は，表土剥ぎの際に出土した見込蛇ノ目釉剥ぎの染付中碗体部である。復元口径11.4cmを測る。腰の部分から直線的に口縁に至る。見込部分の厚さが残存部で1.0cmあり，全体的にぼってりとした感じを受ける。胎土は若干灰色がかった白色で，焼成も良好である。体部外面に文様が見られるが，一部分であるために全体については不明である。見込を蛇ノ目釉剥ぎをしていることからⅣ期の所産と考えられる。**28**は，染付碗である。復元底径4.2cmを測る。外面腰部に１条の圏線が巡り，その上に草花文を描く。高台には２条の圏線が巡る。高台内には１条の圏線が巡り，中央に崩れた「大明年製」と思われる銘款を記す。胎土は若干灰色を帯びた白色で，微細な黒色粒子をまばらに含む。全面施釉後畳付部分の釉を剥ぎ取っているが，高台に砂の付着が見られる。見込には降灰痕が大きく残る。Ⅳ期の所産と考えられる。**29**は，染付碗である。復元口径9.1cm．復元底径3.1cm．器高5.6cmを測る。外面は体部に草花文を施し，高台には２条の圏線が巡る。高台内には銘款が見られるが，残存部が僅かなために全体は明確でない。胎土は，白色で良く焼きしまっている。全面施釉後畳付の部分の釉を剥ぎ取っている。Ⅳ期の所産と考えられる。**30**は，染付碗である。外面は腰部に１条の圏線を，高台には２条の圏線が巡る。胎土は，灰白色で良く焼きしまっている。高台内にも施釉されていることから，全面施釉後畳付部分の釉を剥ぎ取ったものと思われる。焼成の際の降灰痕が著しい。Ⅳ期の所産と考えられる。**31**は，染付碗である。復元口径10.6cm．復元底径4.4cm．器高4.9cmを測る。外面腰部に１条の圏線が巡り，その上に梅樹文と思われる文様を描く。高台には２条の圏線が巡る。見込は，蛇ノ目釉剥ぎされ，畳付の釉も剥ぎ取られている。Ⅳ期の所産と考えられる。**32**は，染付小杯である。復元口径7.4cm．底径2.4cm．器高3.7cmを測る。外面体部に草花文を描く。胎土は若干灰色を帯びた白色で微細な黒色粒子をまばらに含む。全面施釉後畳付部分の釉を剥ぎ取っているが，畳付に砂の付着が僅かに見られる。Ⅳ期の所産と考えられる。**33**は，染付小杯である。復元口径7．8cm．復元底径3．2cm．器高4．3cmを測る。やや膨らみを持った腰部から直線的に立ち上がり，口縁部が外反する。外面に草花文と思われる文様が描かれる。胎土は灰色で微細な黒色粒子をまばらに含み，白濁した釉が畳付を除き全体に掛かる。畳付には砂が付着する。Ⅳ期の所産と考えられる。**34**は，Ｂ－４区土坑から出土した青磁火入である。復元底径8.3cm

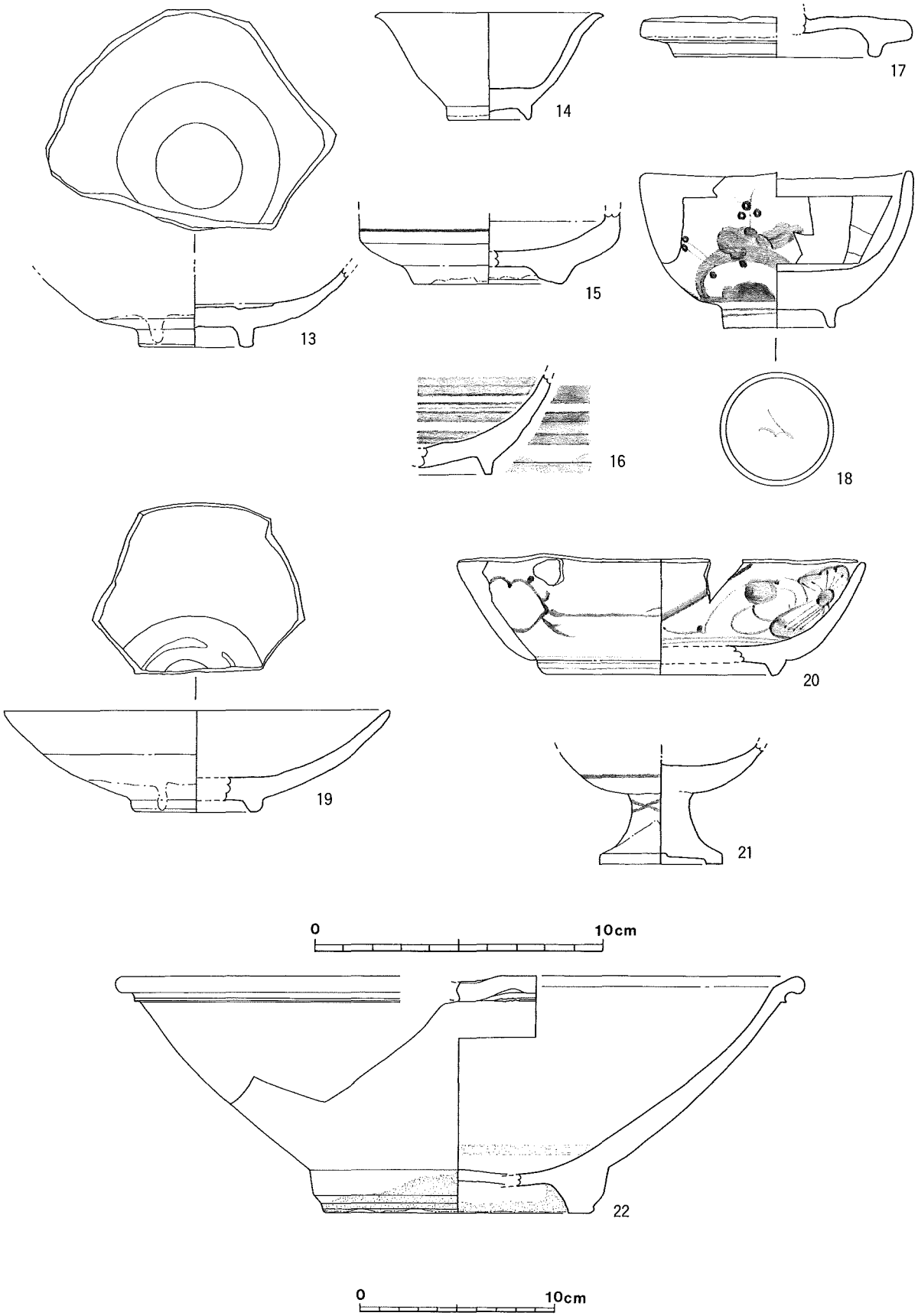
を測る。胎土は灰白色で，微細な黒色粒子を全体に含む。高台は，蛇ノ目凹形高台である。釉は薄い水色で，内面には釉は掛からない。**35**は，外面口縁部に手描きで菊花を描いた染付皿である。焼成では重ね焼きを行っており，その際に下の製品と融着し下の製品の口縁部が貼りついたままになっている。**36**は，染付皿である。復元口径13.4cm．復元底径8.3cm．器高3.8cmを測る。外面腰部に１条の圏線が巡り，その上に唐草文を描く。内面は見込に１条の圏線が巡りその上に草花文が，見込中央には五弁花が描かれる。高台内には一条の圏線が巡り中央には渦福と思われる銘款が施されている。胎土は，灰色が強いが良く焼きしまっている。全面施釉後畳付部分の釉を剥ぎ取っている。Ⅳ期の所産と考えられる。**37**は，Ｃ－２区ピット１から出土した染付瓶の胴部片である。外面に草花文を描いている。胎土は灰白色で器表の仕上がりも灰色が強く出ている。**38**は，陶器瓶である。復元底径6.6cmを測る。高台は，外面の削り出しは行わず内面の削りだけで作り出している。胎土は，赤褐色で緻密であるが焼成温度が低かったのであろう焼き締まってはいない。白濁した釉が畳付を除き外面に掛かる。内面は無釉である。**39**は，磁器製ハマである。断面逆台形を呈し，復元上面径4.8cm．復元底面径2.0cm．高さ1.2cmを測る。白色の緻密な胎で底面には切り離しの際の回転糸切り痕が残る。

【参考文献】

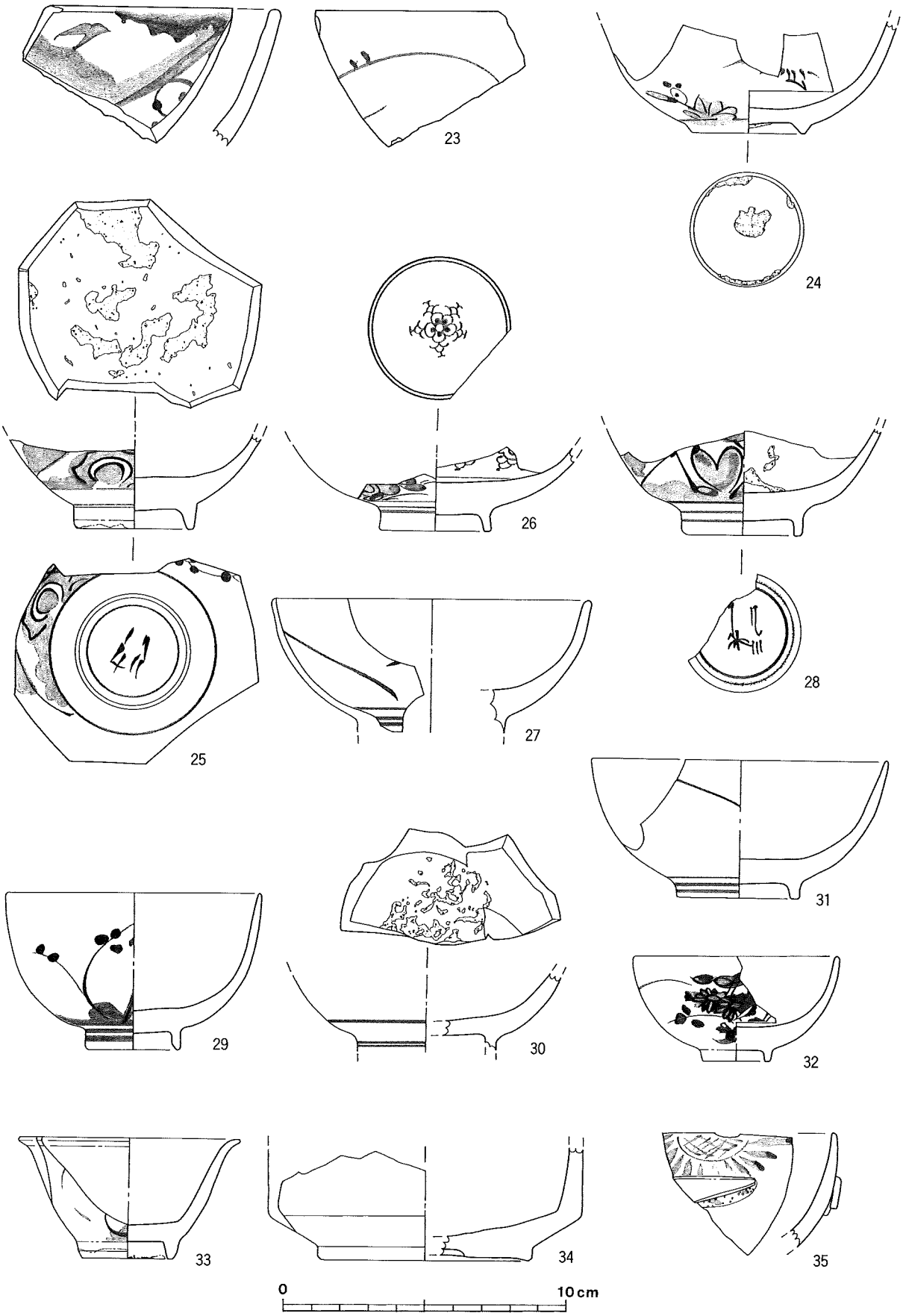
・九州近世陶磁学会編　2000年『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会



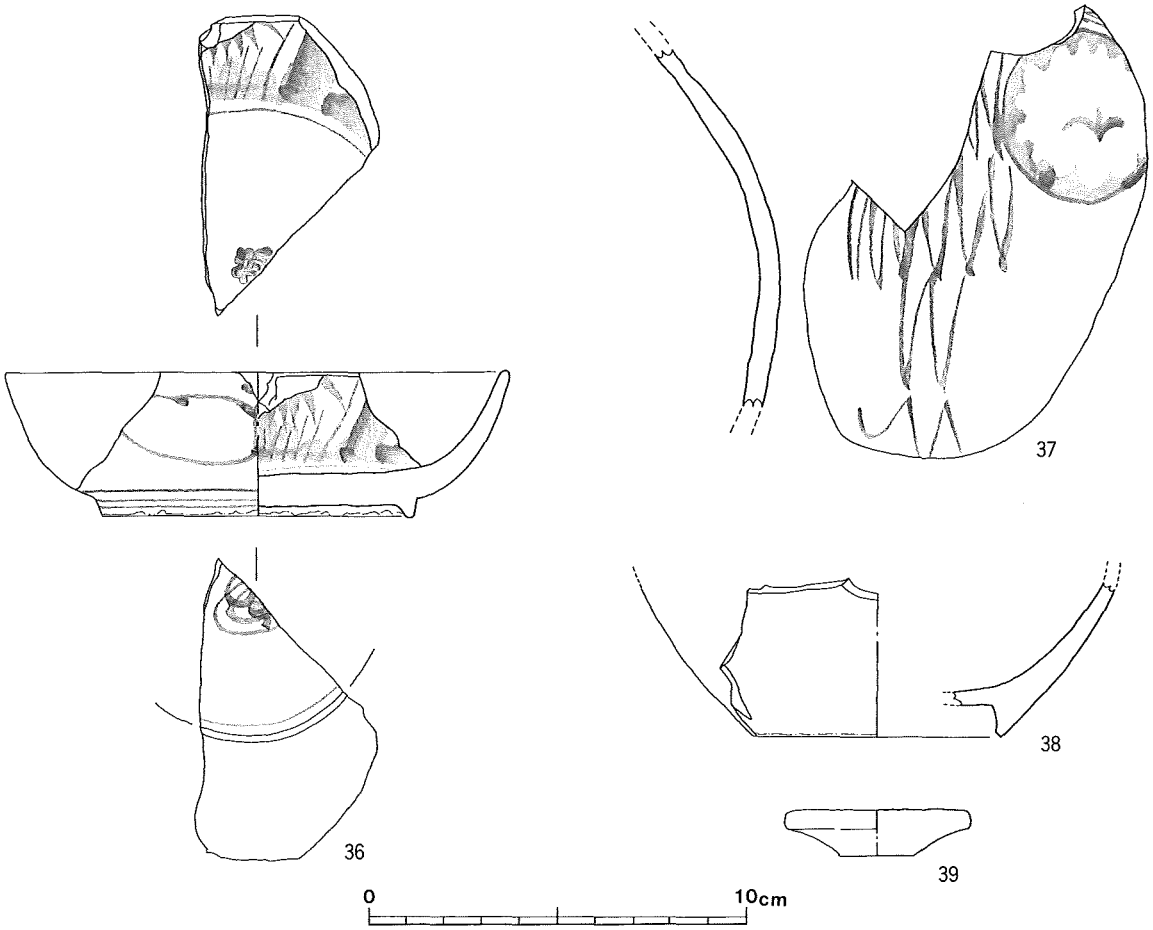
第29図　出土陶磁器①



第30図　出土陶磁器②



第31図　出土陶磁器③

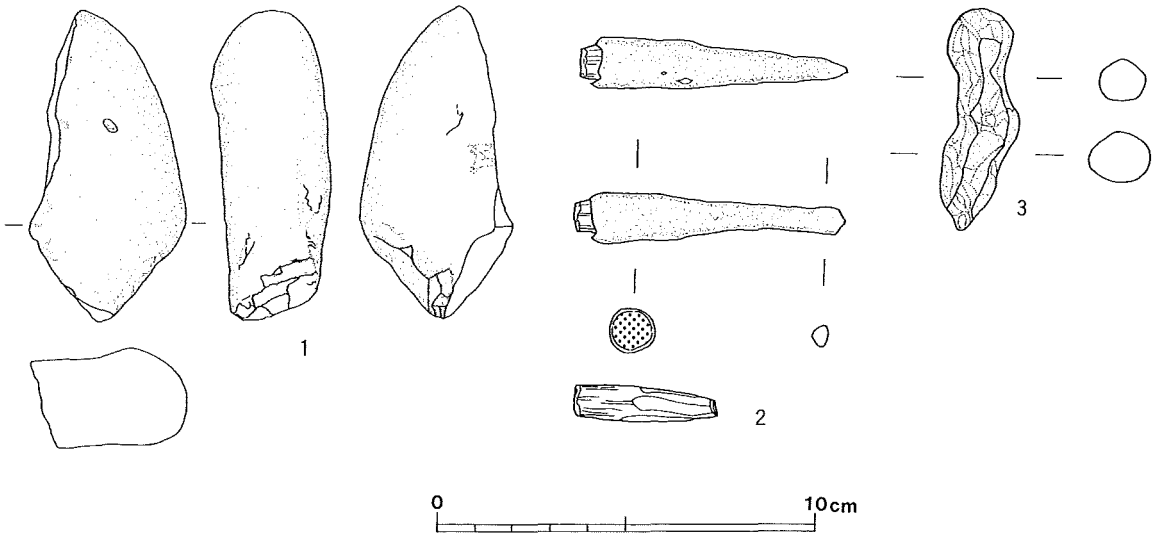


第32図　出土陶磁器④

②石・金属製品（第33図，図版56～58）

1は，石英製火打石である。長さ8.3cm．幅4.1cm．厚さ3.0cmを測る。欠損をした先端部と側面に敲打痕が残る。B－3区Ⅲ層出土。**2**は，不明青銅製品である。出土当初は，きせるの吸口と考えていたが，中に削り痕のある木片が挿入してあったことと口元部分が潰れていることから，吸口ではないと考える。口元部分は，開口していたものを潰したものか初めから開口していなかったものか，錆のために不明である。長さ7.0cm．径1.0cm，挿入されていた木片の長さ3.8cm．径0.9cmを測る。C－3区Ⅲ層出土。**3**は，鉄釘である。長さ5.8cm．厚さ1.6cmを測る。錆のために膨れているが，先端部分に方形の断面を確認することができる。C－6区ピット2内出土。

（川畑　敏則）



第33図　石・金属製品

5 まとめ

炉跡について

この炉跡の特徴的な点は，作り出された場所にある。つまり，①地形の落ち際を選んでいる。②遺物集中区のはずれにあるという点である。①については，当遺構が作り出されている場所が，舌状に延びた土石流の先端部にあたり，比高差が60cmの緩やかな傾斜地に当たる。平地ではなく足場の悪い傾斜地を選んだ理由として・暖を取るためではなかった。・熱効率が良かった。・作り出すことが容易であった等考える事ができるが，類例に乏しいため憶測の域を出ない。②については，遺物集中区がドットマップでも分かるように，B－3区．B－4区北側．A－4区に帯状につながっている（この遺物集中区も土石流土の端部ラインと一致する)。その集中区から外れるように作り出されていることである。

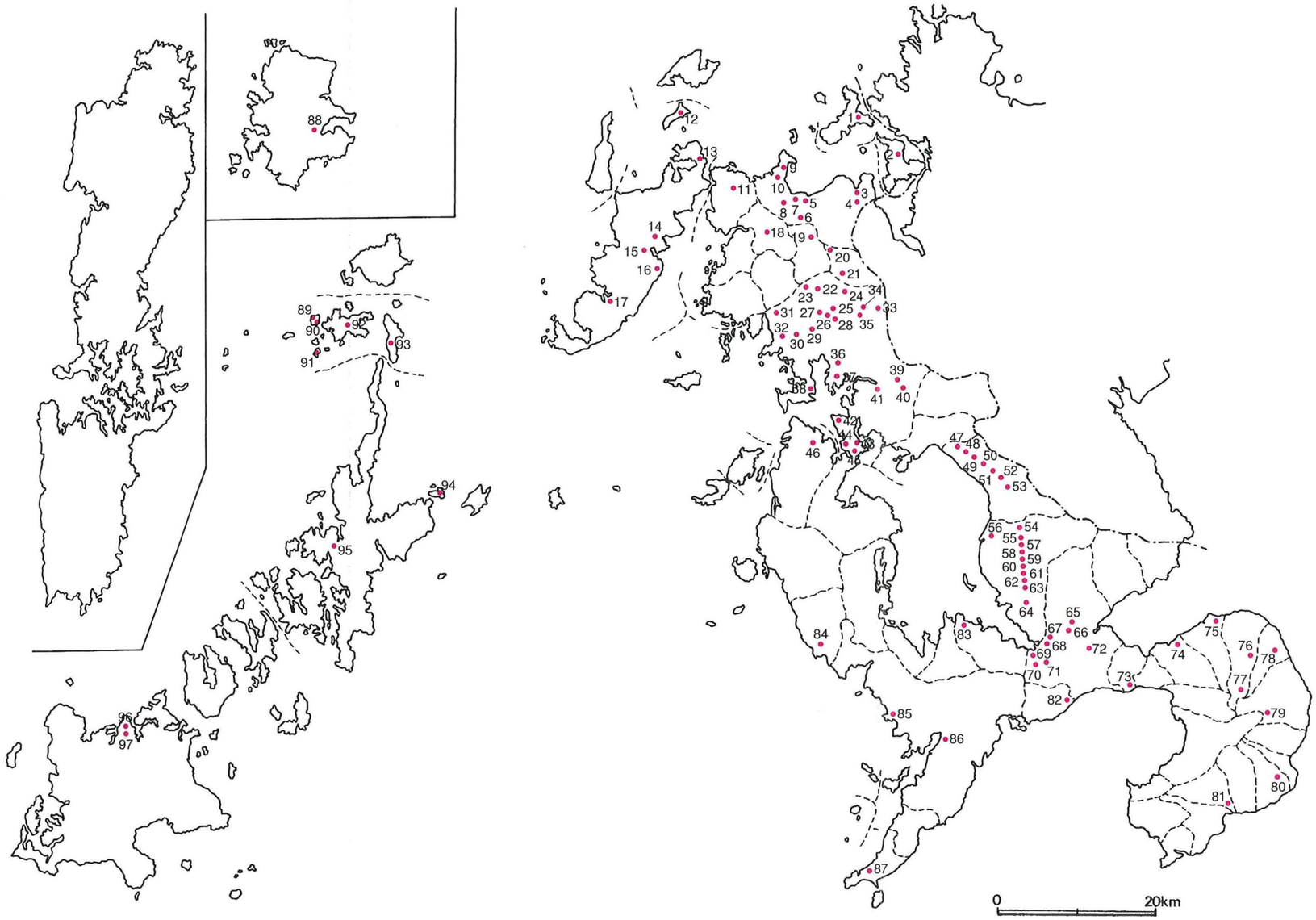
作られた時期は，出土した土器片や年代測定の結果から，縄文時代早期と考える。

近世遺構について

小野F遺跡からは，45基のピットが検出されたが，大きさから2グループに分けることが出来る。一つは径が1m前後の大きなピットであり，もう一つは径が50cm前後の小さなものである。大きな径のグループは，C－2区．C－3区．C－4区．C－6区で見られ，小さな径のグループはC－5区．C－6区で多く見られる。このことを踏まえ，建物の存在を考えながら遺構配置図を見てみると，C－6区に1棟．C－3・4区に1棟，いずれも東西方向に軸を持つ建物があった可能性が出てくる。出土した遺物の年代から考えると，この地に建っていたであろう建物は，18世紀代早くに建てられ，19世紀をまたずに利用されなくなったと考えられる。調査区内にある田の境にもなっている石垣の裏込めから近世陶磁器片が多く出てきたことや，表土下の田の床土の下から間層を挟まずに近世の包含層が検出されたことからも，C－3・4区では建物が廃棄されたあとに耕作地として利用されたと考えられる。C－6区については，前述したように検出したピットの立ち上がりが僅かであることから，建物廃棄の後に再び削平が行われたものと考えられる。

局部磨製石鏃について

本遺跡は，縄文時代の包含層は残っているものの，製品の出土が極端に少なかった。しかし，そんな中でも局部磨製石鏃のしめる割合が大きいことは本遺跡の特徴であると言える。西北九州における局部磨製石族の研究は，佐世保市岩下洞穴で多量に出土したのをきっかけに下川達彌氏が1972年に出した論考を基にしている（下川1972)。下川氏の論考から30年が経ち，出土遺跡数も大幅に増加した。下川氏以降の局部磨製石鏃に関する論考は，渡邊康行氏（1997渡邊）や高原愛氏（2001高原）が出している。高原氏は，県内から出土した局部磨製石鏃の一覧と分布地図を合わせて発表しているが，高原氏が発表をしてから4年が経過しているので，新たに分布地図を作成した（第34図)。



No.	遺跡名	地名	No.	遺跡名	地名
1	長畑遺跡	鷹島町	51	野中遺跡	東彼杵町
2	平野遺跡	福島町	52	大久保遺跡	東彼杵町
3	今福遺跡	松浦市	53	里郷遺跡	東彼杵町
4	中ノ瀬遺跡	松浦市	54	東光寺遺跡	大村市
5	宮の下り遺跡	松浦市	55	野田の久保遺跡	大村市
6	明賀谷遺跡	松浦市	56	黒丸遺跡	大村市
7	老楷田遺跡	松浦市	57	野田古墳	大村市
8	寺ノ尾Ｃ遺跡	松浦市	58	野田Ｂ遺跡	大村市
9	下田遺跡	松浦市	59	葛城遺跡	大村市
10	田口遺跡	松浦市	60	坂口館遺跡	大村市
11	里田原遺跡	田平町	61	嶽ノ下Ａ遺跡	大村市
12	中山遺跡	平戸市	62	鬼石Ａ遺跡	大村市
13	中の原遺跡	平戸市	63	上水計遺跡	大村市
14	神ノ池遺跡	平戸市	64	下稲川内遺跡	大村市
15	馬込遺跡	平戸市	65	下峰原遺跡	大村市
16	坊主畑第３遺跡	平戸市	66	下峰原高場遺跡	大村市
17	津吉遺跡	平戸市	67	雀の倉遺跡	諫早市
18	広久保遺跡	江迎町	68	牛込Ａ．Ｂ遺跡	諫早市
19	福井洞穴	吉井町	69	鷹野遺跡	諫早市
20	岩谷口遺跡	世知原町	70	平遺跡	諫早市
21	板山遺跡	世知原町	71	西輪久道遺跡	諫早市
22	菰田洞穴	佐世保市	72	平山遺跡	諫早市
23	牟田張遺跡	佐世保市	73	西ノ角遺跡	森山町
24	杉ノ尾遺跡	佐世保市	74	弘法原遺跡	吾妻町
25	岩下洞穴	佐世保市	75	京ノ坪遺跡	瑞穂町
26	新田溜池遺跡	佐世保市	76	魚洗川Ｂ遺跡	国見町
27	福田池遺跡	佐世保市	77	百花台遺跡	国見町
28	泉福寺洞穴	佐世保市	78	一野遺跡	有明町
29	原分遺跡	佐世保市	79	肥賀太郎遺跡	島原市
30	中通洞穴	佐世保市	80	下木場遺跡	有家町
31	四反田遺跡	佐世保市	81	今福遺跡	北有馬町
32	母ヶ浦遺跡	佐世保市	82	築崎遺跡	飯盛町
33	郷美谷遺跡	佐世保市	83	伊木力遺跡	多良見町
34	牟田堤遺跡	佐世保市	84	出津遺跡	外海町
35	西方ノ池遺跡	佐世保市	85	柿泊遺跡	長崎市
36	天神洞穴	佐世保市	86	磨屋町遺跡	長崎市
37	天神遺跡	佐世保市	87	脇岬遺跡	野母崎町
38	庵ノ浦遺跡	佐世保市	88	原の辻遺跡	壱岐市
39	観音寺遺跡	佐世保市	89	オオサコ遺跡	小値賀町
40	円常寺遺跡	佐世保市	90	目崎遺跡	小値賀町
41	上原遺跡	佐世保市	91	水畑遺跡	小値賀町
42	虚空蔵遺跡	佐世保市	92	笛吹遺跡	小値賀町
43	高畑遺跡	佐世保市	93	野首遺跡	小値賀町
44	針尾人崎遺跡	佐世保市	94	頭ヶ島白浜遺跡	新上五島町
45	古里遺跡	佐世保市	95	小浦遺跡	新上五島町
46	ケイマンゴー遺跡	西海町	96	寄神貝塚周辺遺跡	五島市
47	松山Ａ遺跡	東彼杵町	97	茶園遺跡	五島市
48	外園遺跡	東彼杵町			
49	宮田Ａ遺跡	東彼杵町			
50	小園遺跡	東彼杵町			

＊26．新田溜池遺跡と38．庵ノ浦遺跡は長崎県遺跡地図には記載なし。

第34図　長崎県内局部磨製石鏃出土遺跡分布図

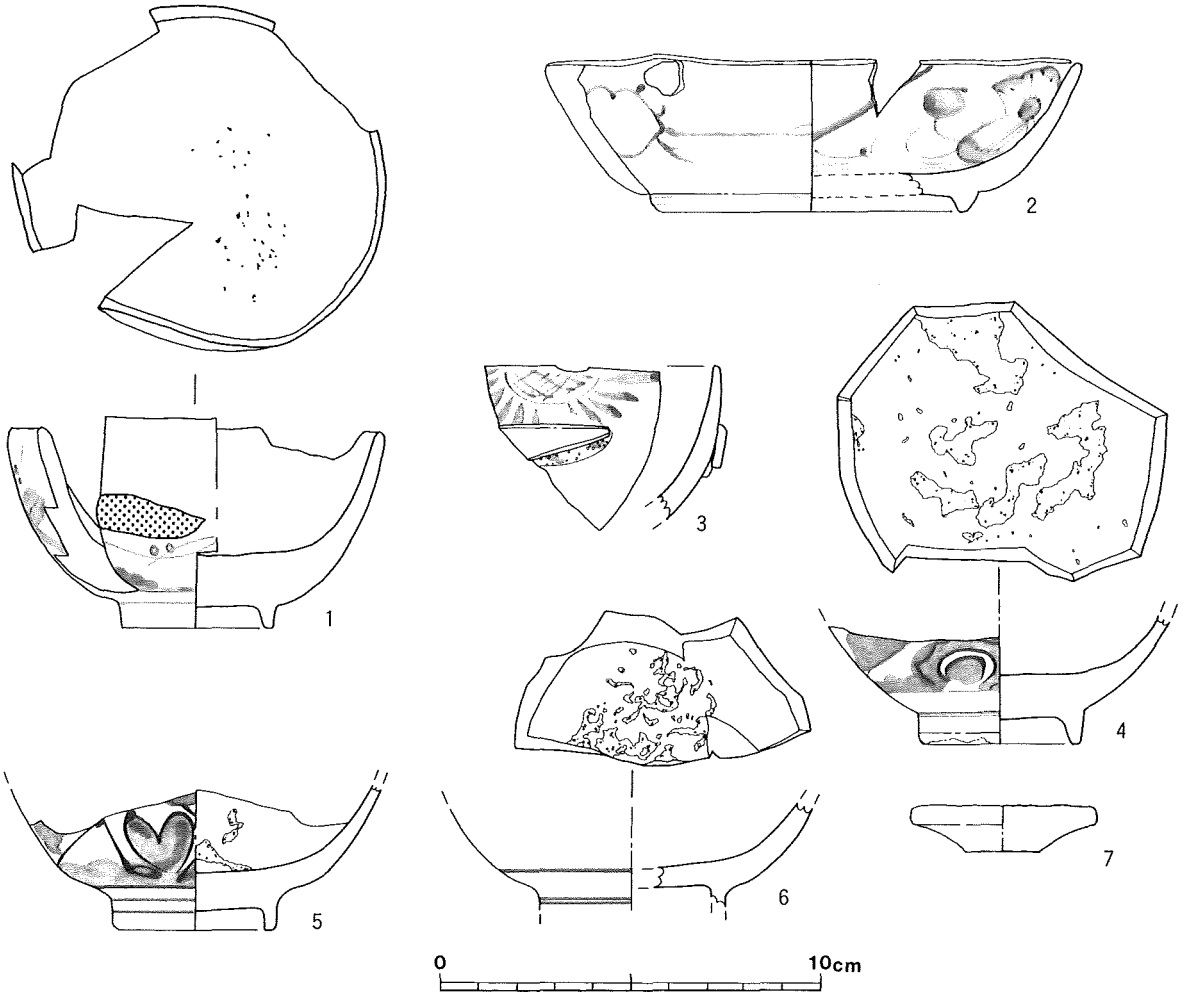
【参考文献】

・麻生優編　1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会
・下川達彌　1972「局部磨製石鏃について」『長崎県立美術博物館研究紀要』第１号　長崎県立美術博物館
・福田一志編　1980『ケイマンゴー遺跡』長崎県文化財調査報告書第52集　長崎県教育委員会
・横山巳貴子編　1981『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第56集　長崎県教育委員会
・田川　肇編　1982『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第56集　長崎県教育委員会
・副島和明編　1982『針尾人崎遺跡』長崎県文化財調査報告書第60集　長崎県教育委員会
・田川肇編　1983『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第64集　長崎県教育委員会
・副島和明・片山巳貴子編　1983『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第65集　長崎県教育委員会
・齋藤基生「石鏃について」　2002『泉福寺洞穴研究編』泉福寺洞穴研究編刊行会
・安楽　勉・中田敦之編　1985『楼楷田遺跡』長崎県文化財調査報告書第76集　長崎県教育委員会
・草野誠司編　1985『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅴ』長崎県文化財調査報告書第72集　長崎県教育委員会
・副島和明・伴耕一朗編　1985『諫早中核造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第74集　長崎県教育委員会
・草野誠司編　1986『上原遺跡』長崎県文化財調査報告書第81集　長崎県教育委員会
・副島和明・伴耕一朗編　1986『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第85集　長崎県教育委員会
・萩原博文編　1986『津吉遺跡群発掘調査報告書』平戸市の文化財22　平戸市教育委員会
・副島和明編　1989『魚洗川Ｂ遺跡』長崎県文化財調査報告書第95集　長崎県教育委員会
・高野晋司編　1989『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ』長崎県文化財調査報告書第93集　長崎県教育委員会
・小野ゆかりほか編　1990『寄神貝塚周辺遺跡』岐宿町文化財調査報告書第２集　長崎県教育委員会
・同志社大学考古学研究室編　1990『伊木力遺跡長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査－』多良見町文化財調査報告書第７集　多良見町教育委員会
・中田敦之編　1990『寺ノ尾Ｃ遺跡』松浦市文化財調査報告書第７集　松浦市教育委員会
・宮崎貴夫・伴耕一朗編　1990『長崎県埋蔵文化財調査集報ＸⅢ』長崎県文化財調査報告書第97集　長崎県教育委員会
・藤田和裕編　1990『築崎遺跡』飯森町文化財調査報告書第１集　飯森町教育委員会
・町田利幸編　1990『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅶ』長崎県文化財調査報告書第98集　長崎県教育委員会
・副島和明編　1991『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ』長崎県文化財調査報告書第99集　長崎県教育委員会
・萩原博文編　1993『馬込遺跡の発掘Ⅱ』平戸市の文化財36　平戸市教育委員会
・萩原博文編　1994『中の原遺跡Ⅱ』平戸市の文化財37　平戸市教育委員会
・久村貞男編　1994『四反田遺跡発掘調査報告書』佐世保市教育委員会
・町田利幸編　1994『京ノ坪遺跡』瑞穂町文化財調査報告書第２集　瑞穂町教育委員会
・塚原博　1996「目崎遺跡」『原始・古代の長崎県　資料編』長崎県教育委員会
・古門雅高編　1996『頭ヶ島白浜遺跡』有川町文化財調査報告書第１集　有川町教育委員会
・塚原博　1997『笛吹遺跡』小値賀町文化財調査報告書第12集　小値賀町教育委員会
・古門雅高・渡邊康行編　1997『広平遺跡』長崎県文化財調査報告書第137集　長崎県教育委員会
・中田敦之編　1998『市内遺跡確認調査(2)』松浦市文化財調査報告書第13集　松浦市教育委員会
・秀島貞康編　1998『下峰原遺跡』諫早市埋蔵文化財調査協議会
・古門雅高・渡邊康行　1998『広久保遺跡』江迎町文化財調査報告書第１集　江迎町教育委員会
・高原愛編　2001『平野遺跡』長崎県文化財調査報告書第160集　長崎県教育委員会
・川道寛編　1998『茶園遺跡』岐宿町文化財調査報告書第３集　岐宿町教育委員会
・川内野篤編　2003『菰田洞穴発掘調査報告書』佐世保市教育委員会
・宮下雅史編　1997『柿泊遺跡』長崎市教育委員会
・高原愛「諫早市牛込Ａ・Ｂ遺跡出土の局部磨製石鏃と土器」　2001『西海考古第４号』西海考古同人会
・中田敦之編　1989『宮ノ下り遺跡』松浦市文化財調査報告書第５集　松浦市教育委員会

・伴耕一朗編　1985『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第２集　田平町教育委員会
・中田敦之編　1998『松浦・今福遺跡－国営農地再編整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』松浦市文化財調査報告書第14集　松浦市教育委員会
・高野晋司編　1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集　長崎県教育委員会
・中田敦之編　1987『下田遺跡』松浦市文化財調査報告書第３集　松浦市教育委員会
・萩原博文・加藤有重編　1993『坊主畑第３遺跡の発掘』平戸市の文化財35　平戸市教育委員会
・古代学協会編　1976『長崎県北松浦郡世知原町岩谷口遺跡群の発掘調査』世知原町教育委員会
・麻生優ほか編　1993『佐世保市相浦川流域遺跡分布調査報告書』佐世保市教育委員会
・塚原博編　1994『県営畑総事業に伴う確認調査概報・Ⅱ』小値賀町文化財調査報告書第10集　小値賀町教育委員会
・宮崎貴夫編　1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集　長崎県教育委員会
・古門雅高編　2004『下木場遺跡』長崎県文化財調査報告書第179集　長崎県教育委員会
・平野敏和編　1982『出津遺跡』外海町文化財調査報告書第１集　外海町教育委員会
・塚原博編　2003『野首遺跡－野崎多目的ダム建設に伴う発掘調査－』小値賀町文化財調査報告書第17集　小値賀町教育委員会
・松藤和人編　1994『百花台東遺跡』同志社大学文学部文化学科調査報告　同志社大学文学部文化学科
・安楽勉編　2001『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集　長崎県教育委員会
・本田秀樹編　2001「一野遺跡」『県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅳ』長崎県文化財調査報告書第159集　長崎県教育委員会

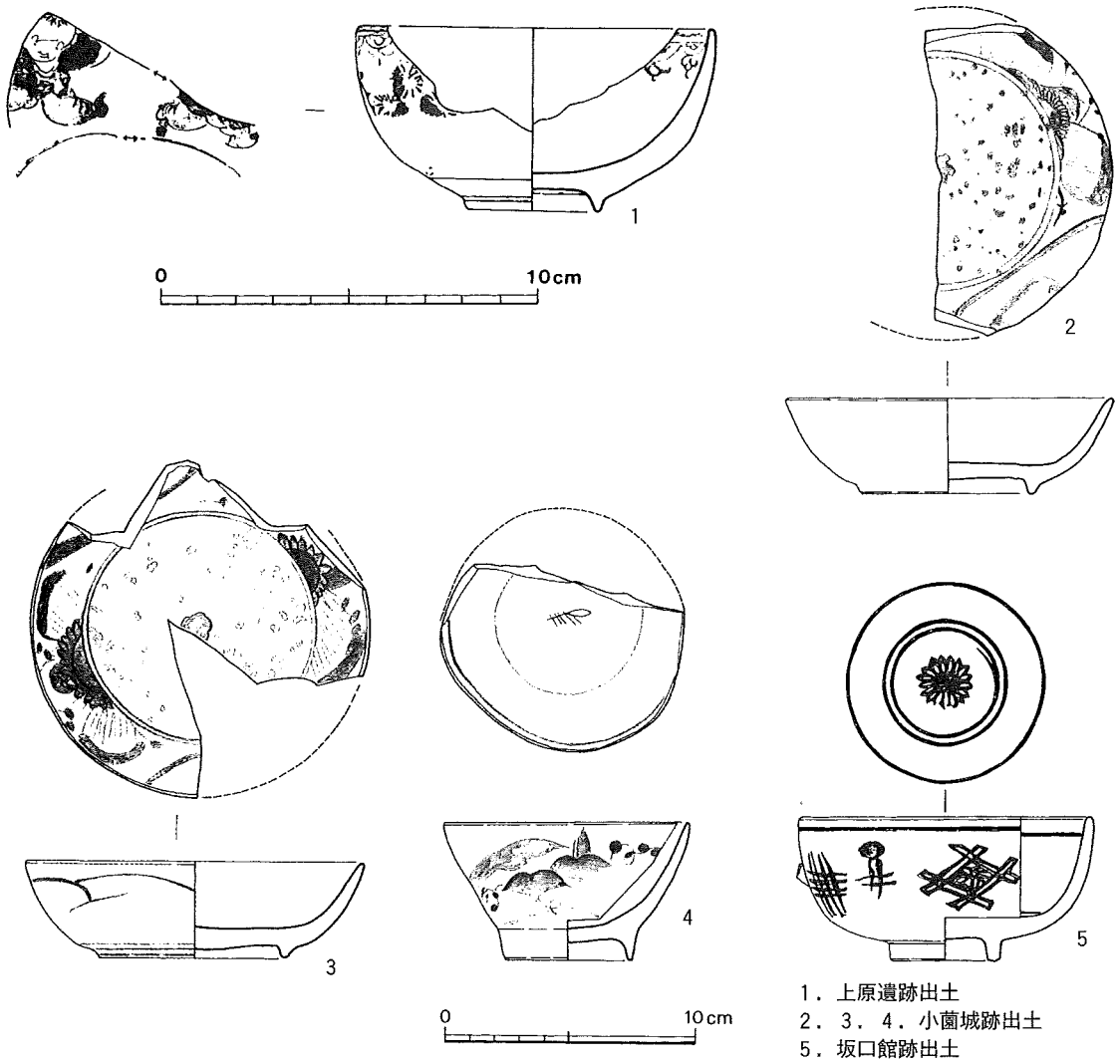
融着．変形等が見られる近世の磁器について（第35図．第36図，図版59～61）

融着．変形．著しい降灰等が見られる磁器について紹介したい〔( )内Noは出土陶磁器図で記したNoである〕。1⑱は，D－5区陶磁器溜めから出土した染付碗である。1cmの径の違いが見られ，いびつに歪んでいる。さらに体外面には，融着した他製品をはがし取った痕（網目部分）が残り，見込には，焼成の際にできた降灰痕が残っており，まるで物原から持ってきた感じである。この他にも他製品との融着は，2⑳染付皿．3㉟染付皿に見られる。著しい降灰痕は，4㉕染付碗．5㉘染付碗．6㉚染付碗に見られる。これらの，上物ではない製品が本遺跡から出土した理由として，佐々市瀬や三川内等の窯場が近くにあったことがまず挙げられよう。小野F遺跡から多く出土した磁器製品が属するⅣ期は，同じ平戸藩内で三川内地区．佐々市瀬窯．松浦皿山の3箇所で磁器が焼かれていた。各窯場では，出来上がった製品を流通させる際に，今日でも行われているように製品のランク付けが行われたであろう。実際，平戸藩御用窯総合調査報告書によると，「製品は，上物．ツラモノ．ツラシタ．ガサ（最下級品でザツモンとも呼び早岐茶市用）の順で呼ばれていた」とあり（長崎2002），出来上がりにより4つの等級に分けて出荷していたことが分かる。それぞれがどの程度の出来上がりを指すものか，報告書にはそこまで掲載されておらず，筆者も実見をしていないので明確なことは言えないが，1のように積み重ねも出来ないほどいびつに歪んだ物が，流通の経路に乗るのかどうか疑問



第35図　融着・変形・降灰が見られる磁器

である。7㊴磁器製ハマの出土と合わせて考えると，窯場との直接的な取引の可能性も考えなければならない。これまで，生産地以外で変形．融着．降灰痕がある近世磁器を報告した遺跡として，佐世保市上原遺跡（草野1986）．東彼杵町小薗城跡（町田1991）．大村市坂口館跡（宮崎1991）が挙げられる（第36図）。上原遺跡では，口縁部内外にリンボウが，体部外面に唐子が描かれた小碗の見込部分の降灰について報告がされている(1)。小薗城跡からは，見込に砂の付着とされているが降灰痕とおもわれる染付皿（２．３）と，形が歪んだ広東碗(4)が報告されている。坂口館跡からは，他製品との融着痕が残る染付碗が報告されている(5)。今後，消費地からの融着．変形等が認められる陶磁器資料が増えることで，窯場を身近に控えた地域における，近世陶磁器の消費のあり方が解明できるものと思



第36図　融着・変形・降灰が見られる磁器（参考資料）

われる。資料の増加を期待したい。　（川畑　敏則）

（「局部磨製石鏃出土遺跡分布図」及び「出土地名一覧」作成は織田健吾による）

【引用・参考文献】

・草野誠司編　1986『上原遺跡』長崎県文化財調査報告書81集　長崎県教育委員会
・倉田芳郎編　1982『長崎・松浦皿山窯址』松浦市教育委員会
・下川達彌　1972「局部磨製石鏃について」『長崎県立美術博物館研究紀要』1　長崎県立美術博物館
・高原　愛　2001「諫早市牛込A・B遺跡群の局部磨製石鏃と土器」『西海考古』4　西海考古同人会
・長崎　薫　2002「第7章　三川内山の習俗」『平戸藩御用窯総合調査報告書』佐世保史談会
・町田利幸編　1991「小薗城跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ』長崎県文化財調査報告書99集　長崎県教育委員会
・宮崎貴夫編　1991「坂口館跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ』長崎県文化財調査報告書99集　長崎県教育委員会
・宮下雅史　2002「近世窯業遺跡」『佐世保市史』通史編上巻　佐世保市
・古門雅高・渡邊康行編　1997「広平遺跡」長崎県文化財調査報告書137集

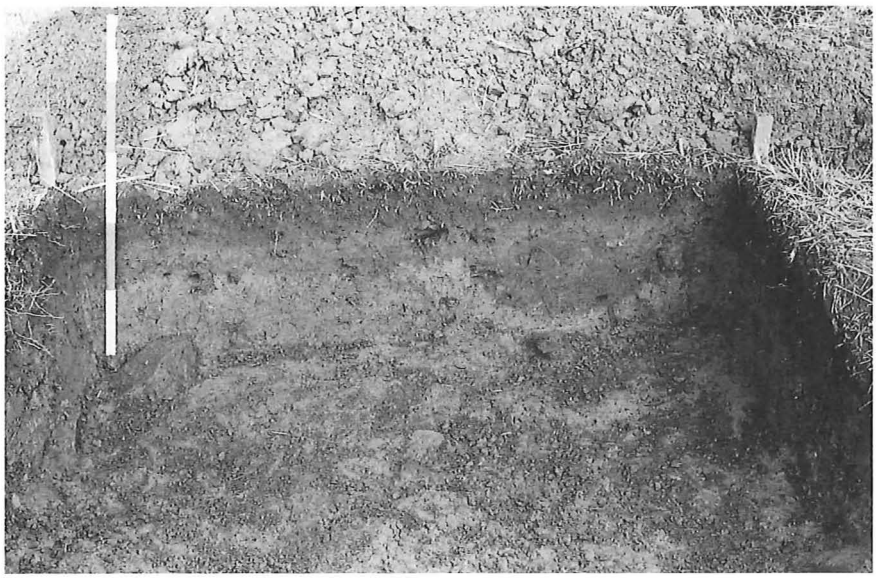
遺跡遠景（東から）

遺跡近景（西から）

図版１　遺跡遠景・近景

T.P. 5　北壁

T.P.10　北壁



T.P.16　北壁

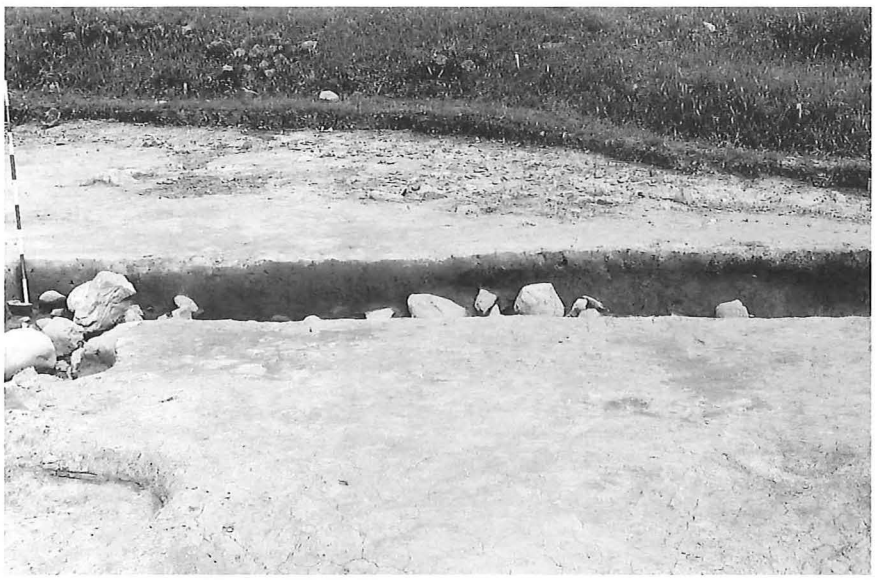
図版 2　範囲確認調査①

T.P.12　北壁

T.P.12　東壁

調査風景

図版 3　範囲確認調査②

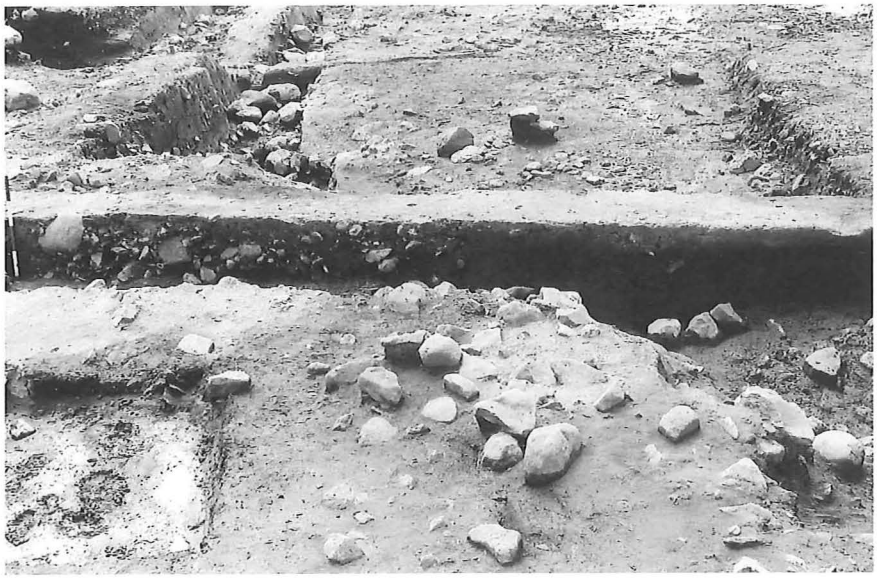


C－6区　東壁

D－6区　東壁

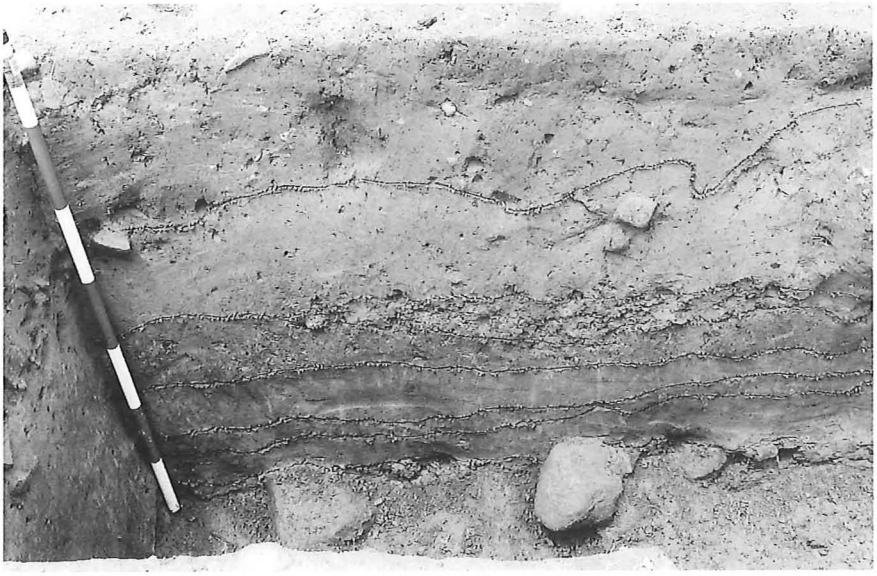
A－4区　西壁

図版4　土層の状況①



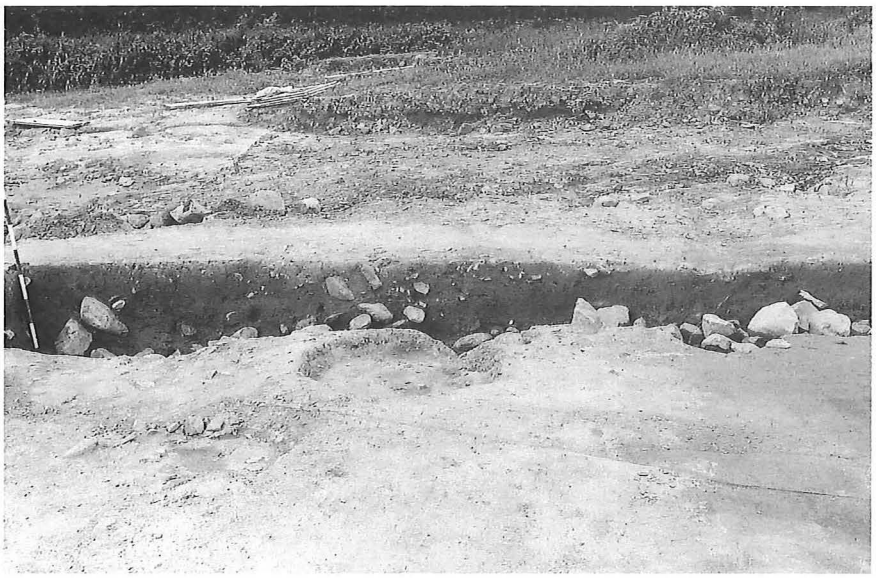
B－4区　西壁

C－4区　西壁



C－4区　西壁（拡大）

図版5　土層の状況②



C－6区　北壁

C－5区　北壁

C－5区　北壁（拡大）

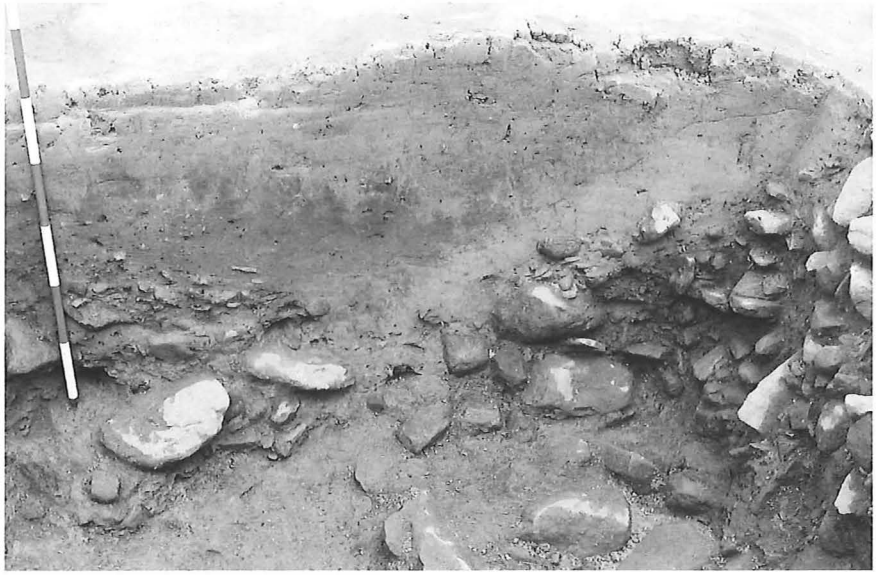
図版6　土層の状況③

C－4区　北壁

B－3区　T.P.12　南壁

B－3区　T.P.12　東壁

図版7　土層の状況④



B－3区　T.P.12　北壁

B－3区　T.P.12　西壁

B－1区　南壁

図版8　土層の状況⑤

C－5・6区ベルト内
土坑（南東から）

C－5・6区ベルト内
土坑（南東から）

C－5・6区ベルト内
土坑（南西から）

図版 9　検出遺構①

C－3区　炉跡
（西から）

C－3区　炉跡
（東から）

C－2区　ピット1（右）
ピット2（左）
（南から）

図版10　検出遺構②

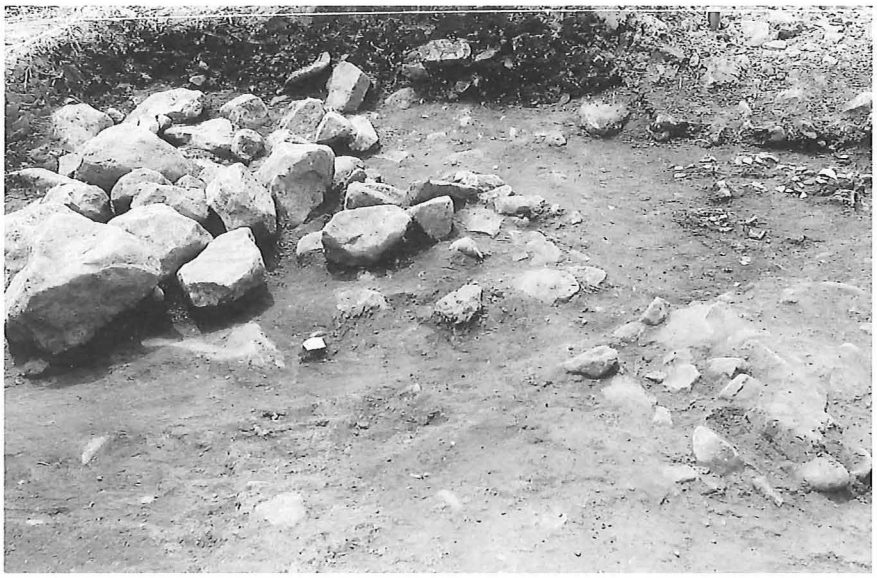
C－3区　ピット2
（西から）

C－3区　ピット3
（西から）

C－3区　ピット7
（西から）

図版11　検出遺構③

C－3・4区　ピット群
（北から）



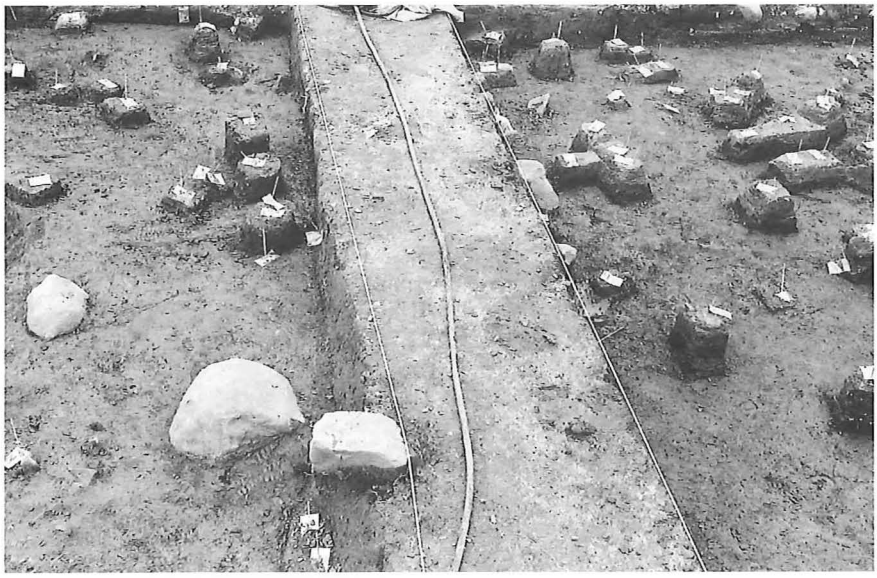
D－5区　石溜めと
陶磁器溜め（右）
（東から）

D－5区　陶磁器溜め
（拡大）
（東から）

図版12　検出遺構④

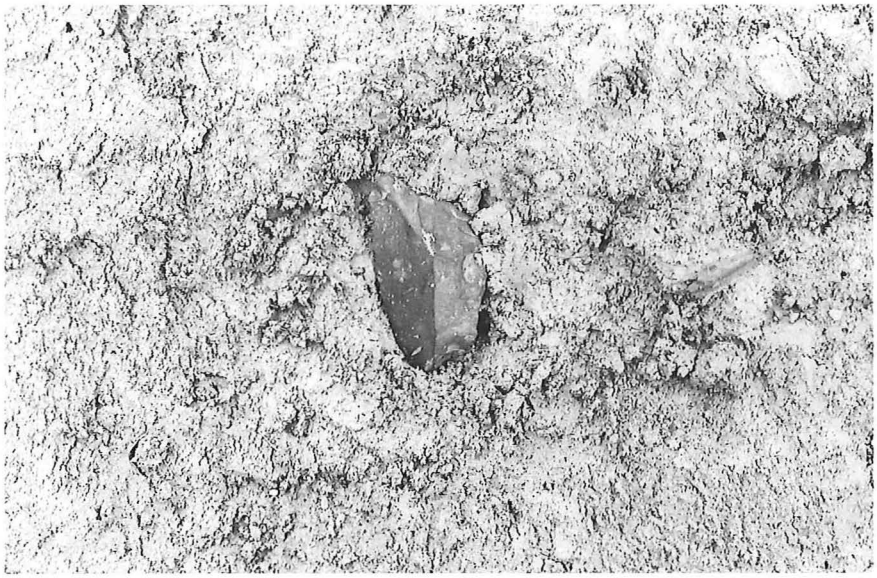
C－4区　土坑1
（西から）

B－3区　Ⅳa層からの
遺物出土状況



A－4区，B－4区
Ⅳa層からの遺物出土状況

図版13　検出遺構⑤．遺物出土状況①



図版14　遺物出土状況②

図版15　遺物出土状況③．調査風景①

空撮

図版16　調査風景②

トンネル工事が始まる
小野地区

図版17　調査風景③．周りの状況

1表

1裏

2表

2裏

3表

3裏

4表

4裏

図版18　試掘時出土土器

5表

5裏

7表

7裏

9表

9裏

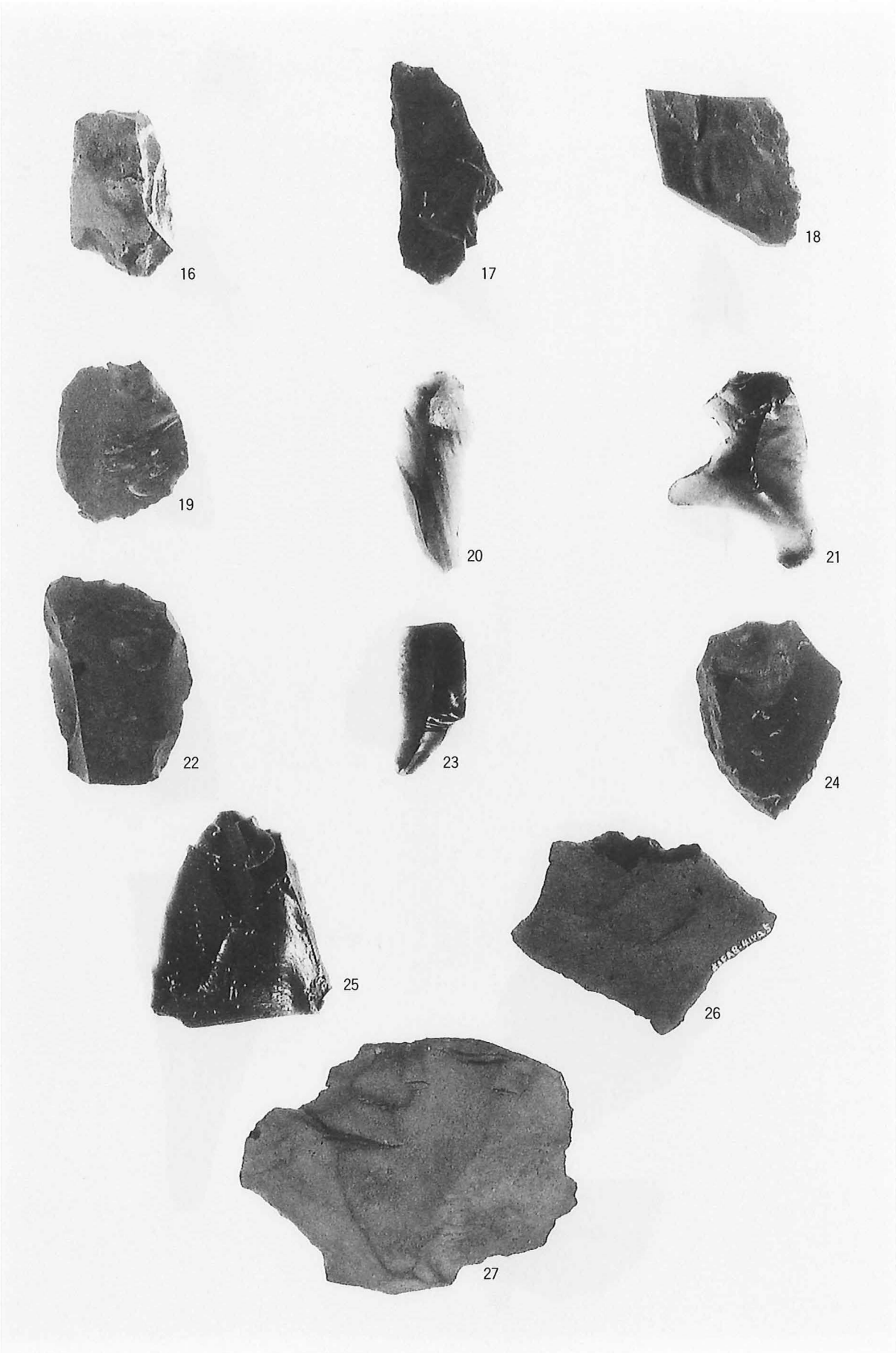
6表

8表

図版19　出土土器

図版20　出土石器①（表）

図版21　出土石器①（裏）



図版22　出土石器②（表）

16

17

18

19

20

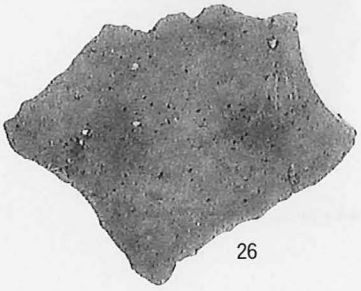
21

22

23

24

25


26

27

図版23　出土石器②（裏）

28

29

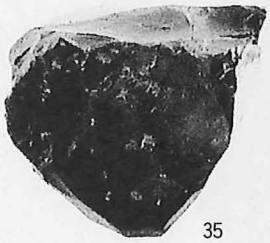
30

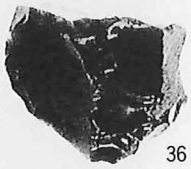
31

32

33

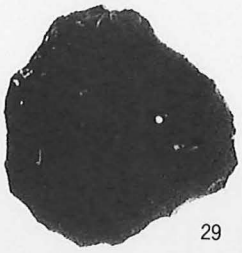
34


35


36

図版24　出土石器③（表）

28


29

30

31

32

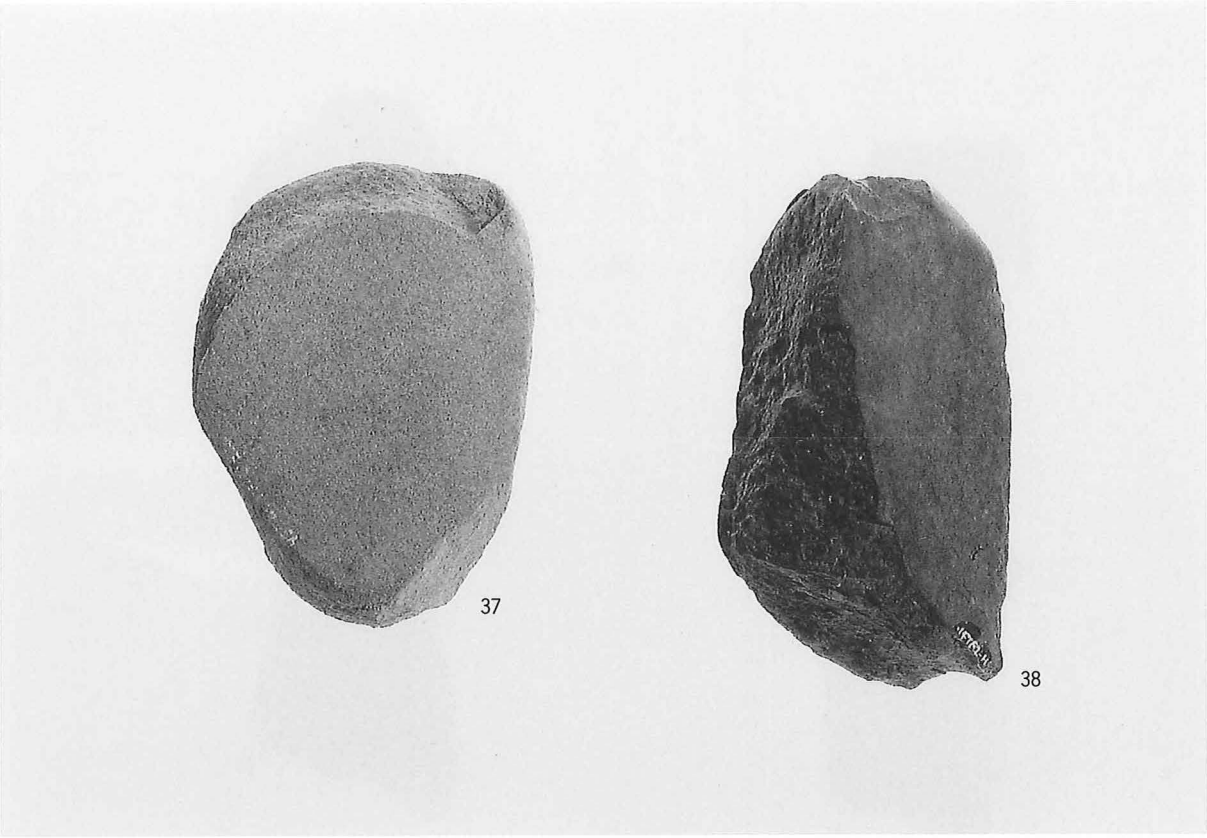
33

34

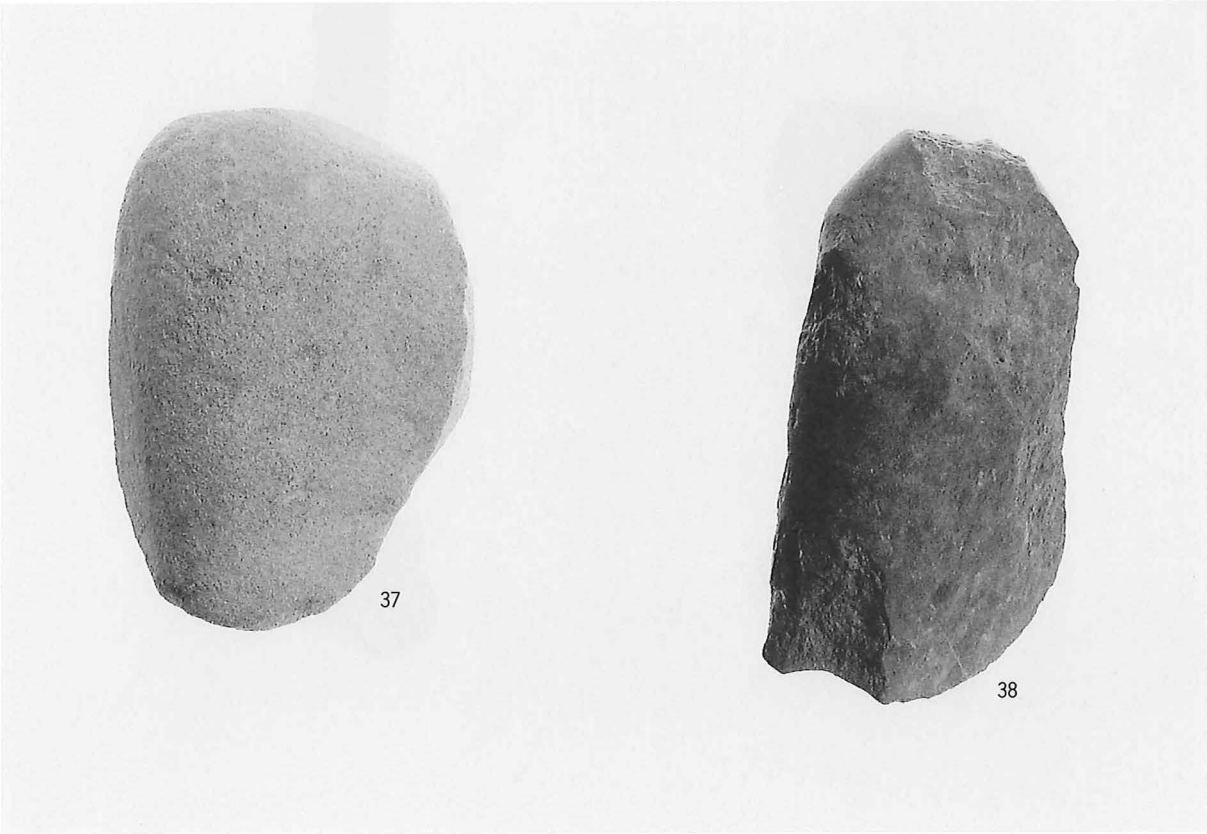
35

36

図版25　出土石器③（裏）

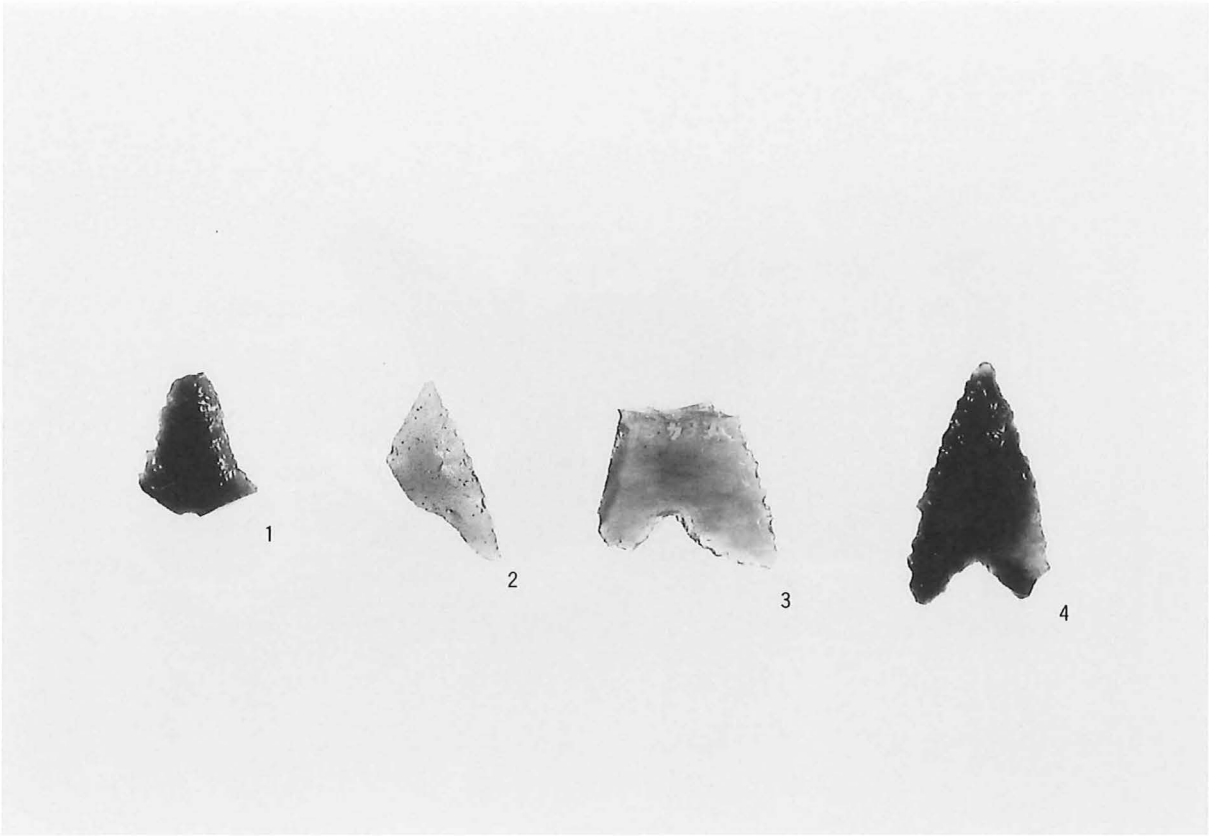


表

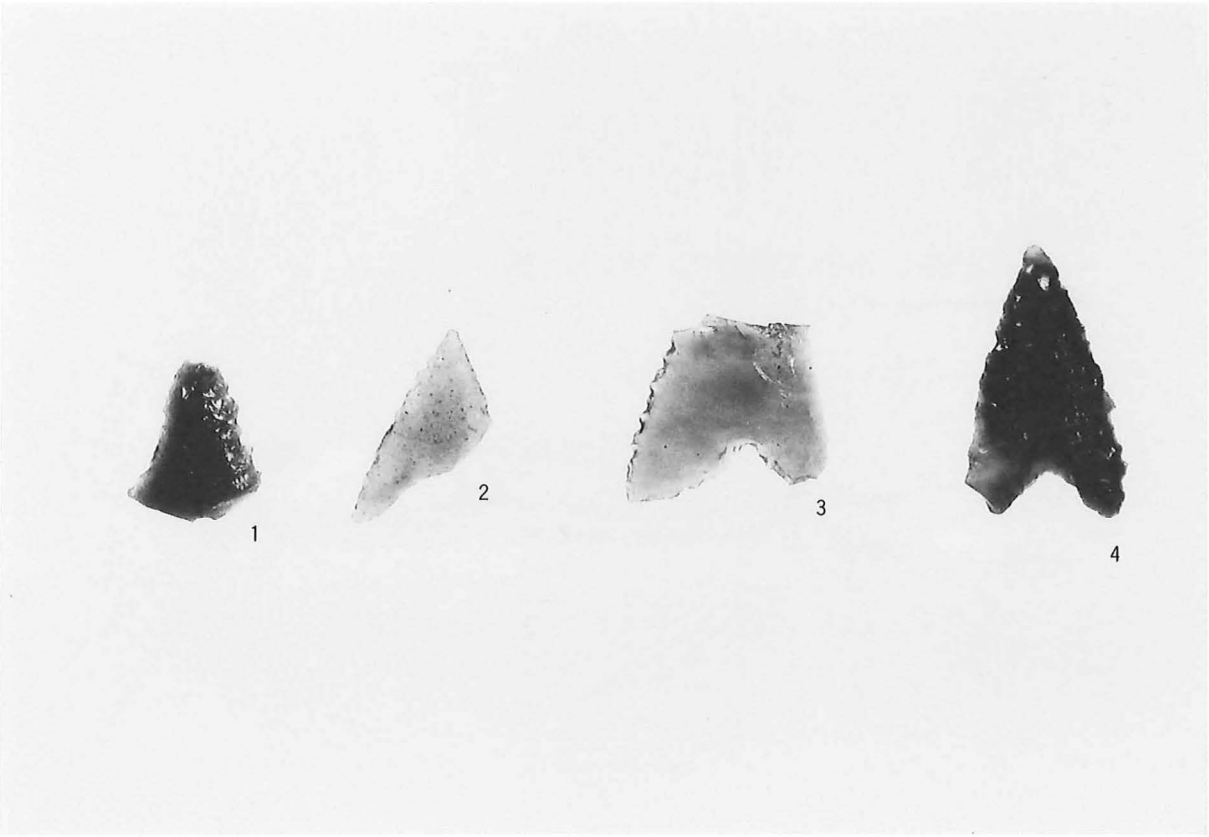


裏

図版26　出土石器④

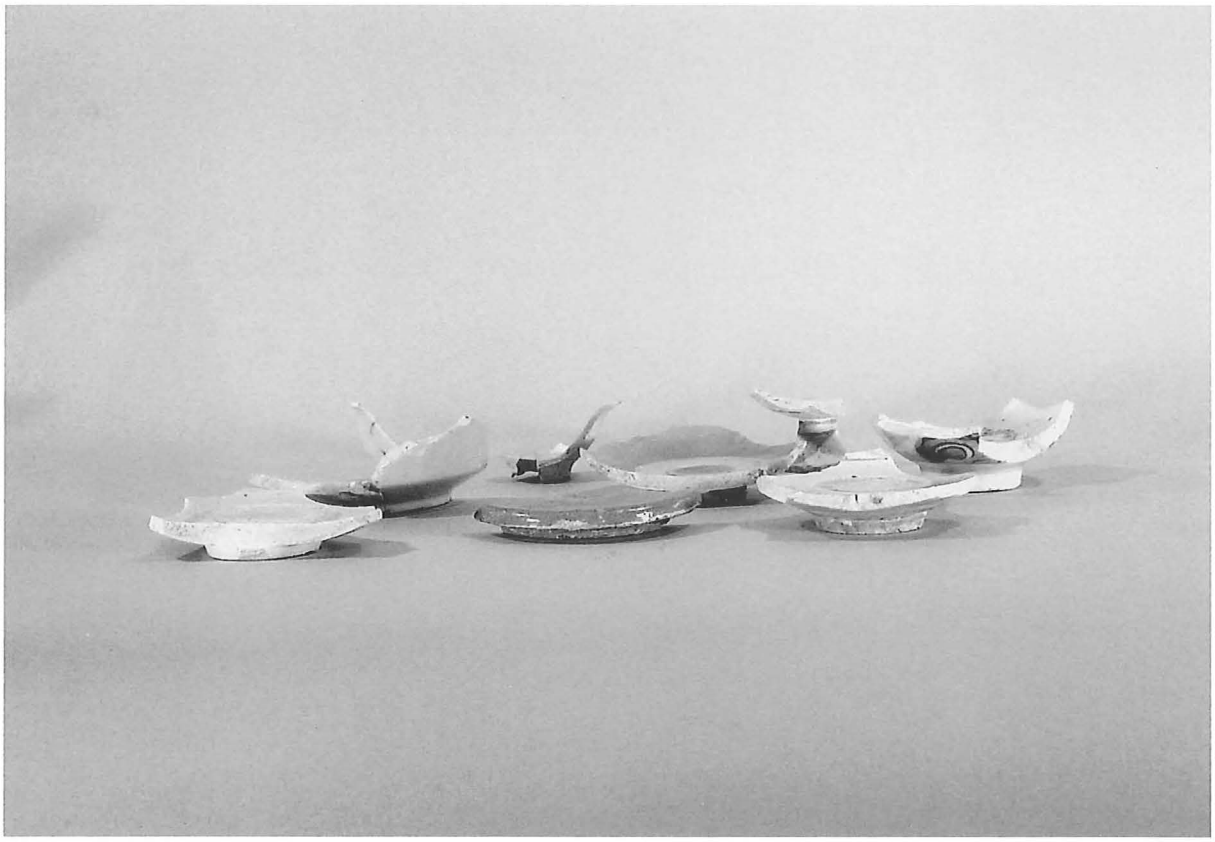


表

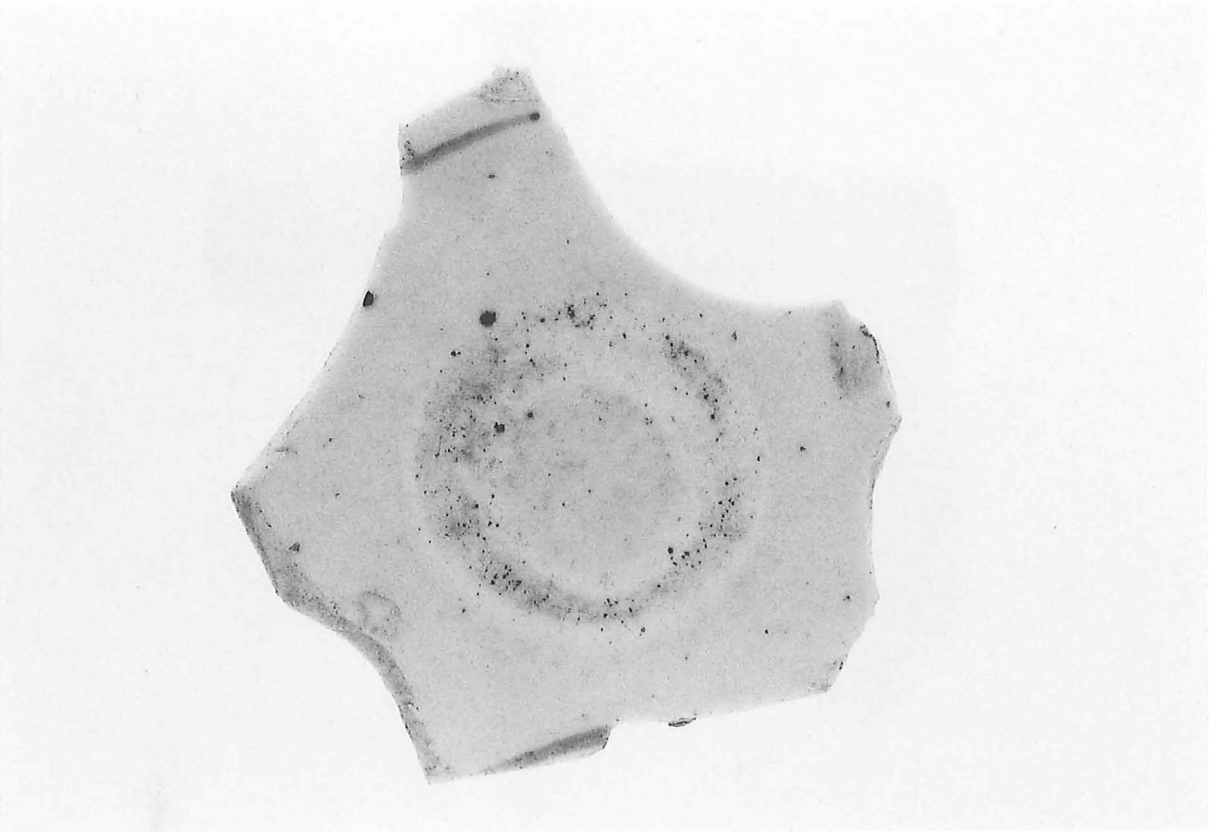


裏

図版27　局部磨製石鏃



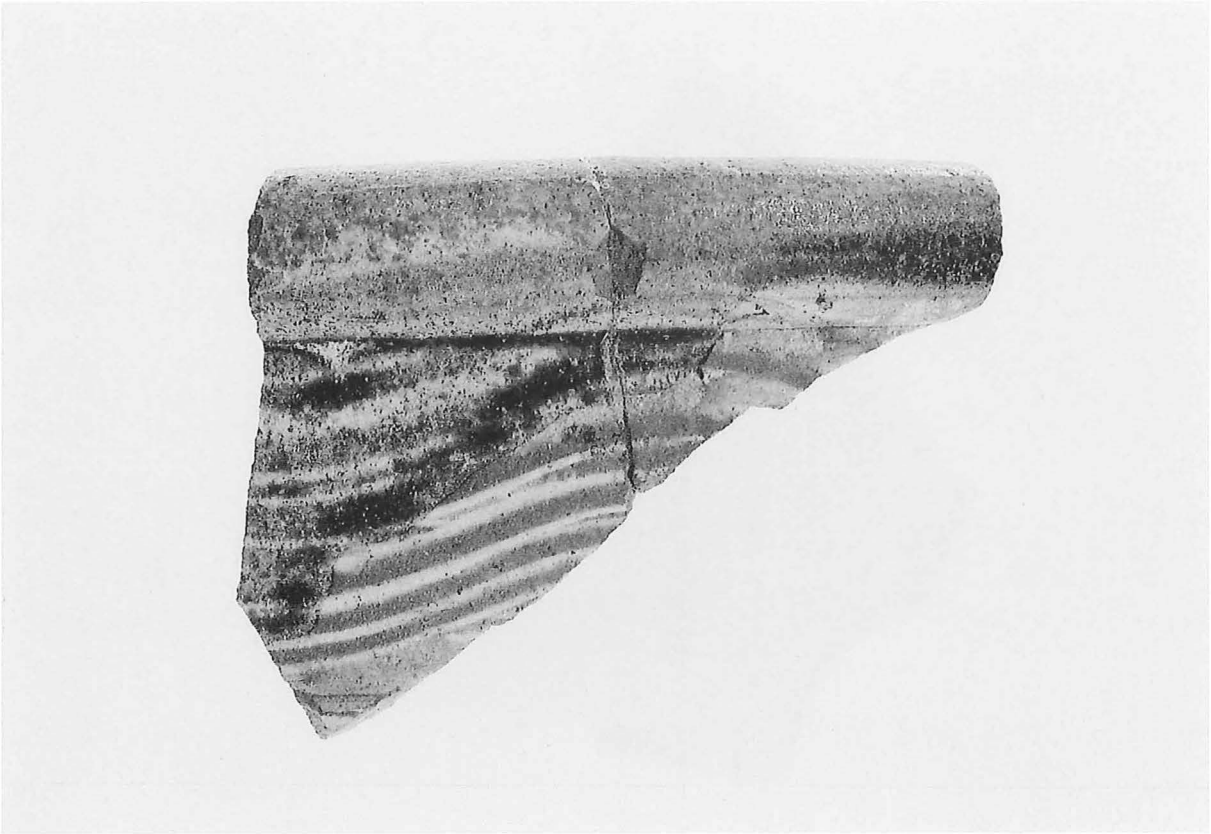
図版28　出土した陶磁器



1－1

1－2

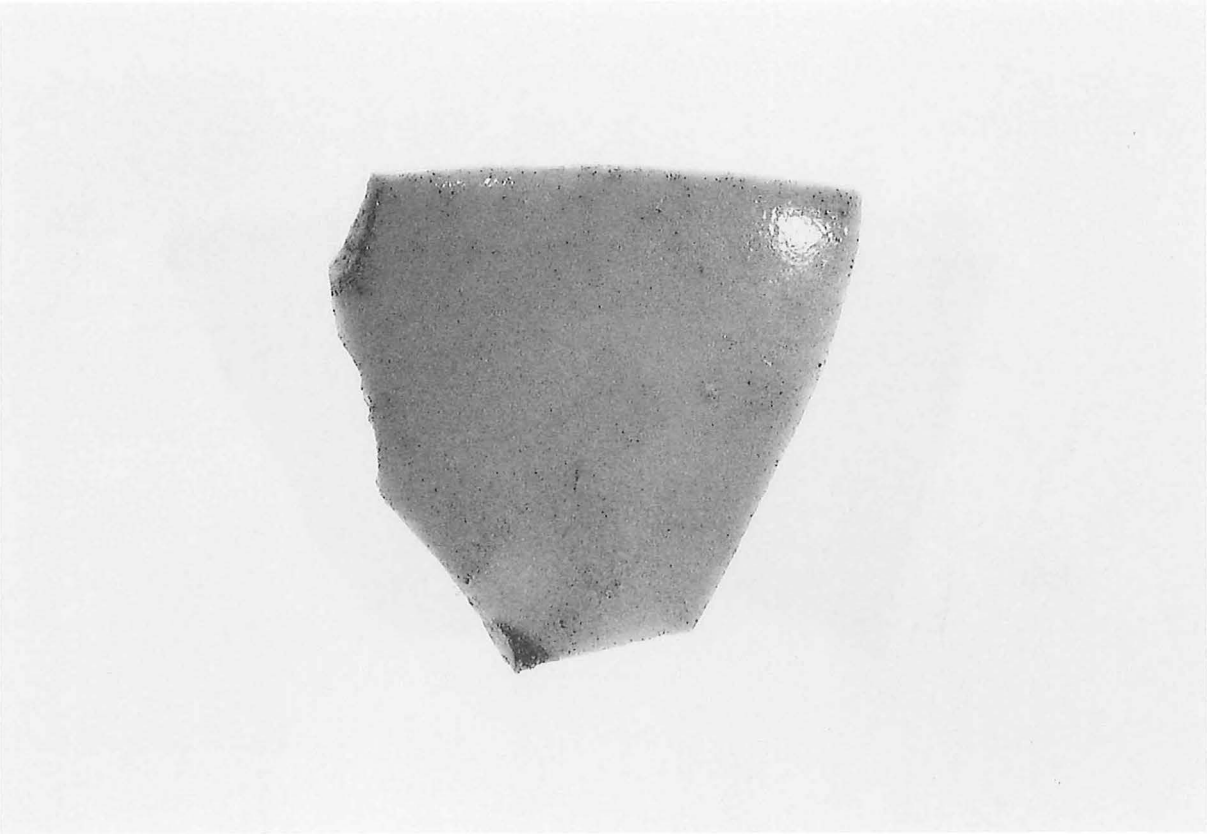
図版29　出土陶磁器①



2－1

2－2

図版30　出土陶磁器②



3

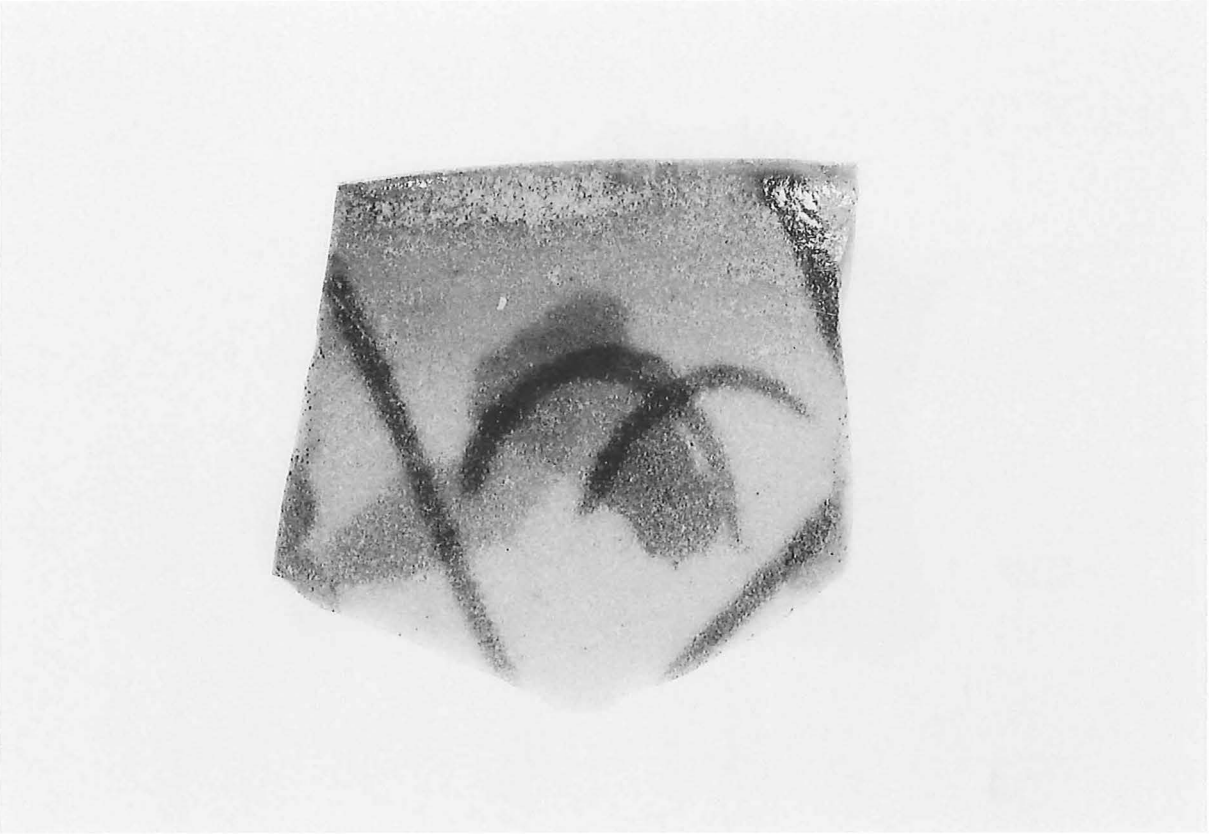
4

図版31　出土陶磁器③

5－1

5－2

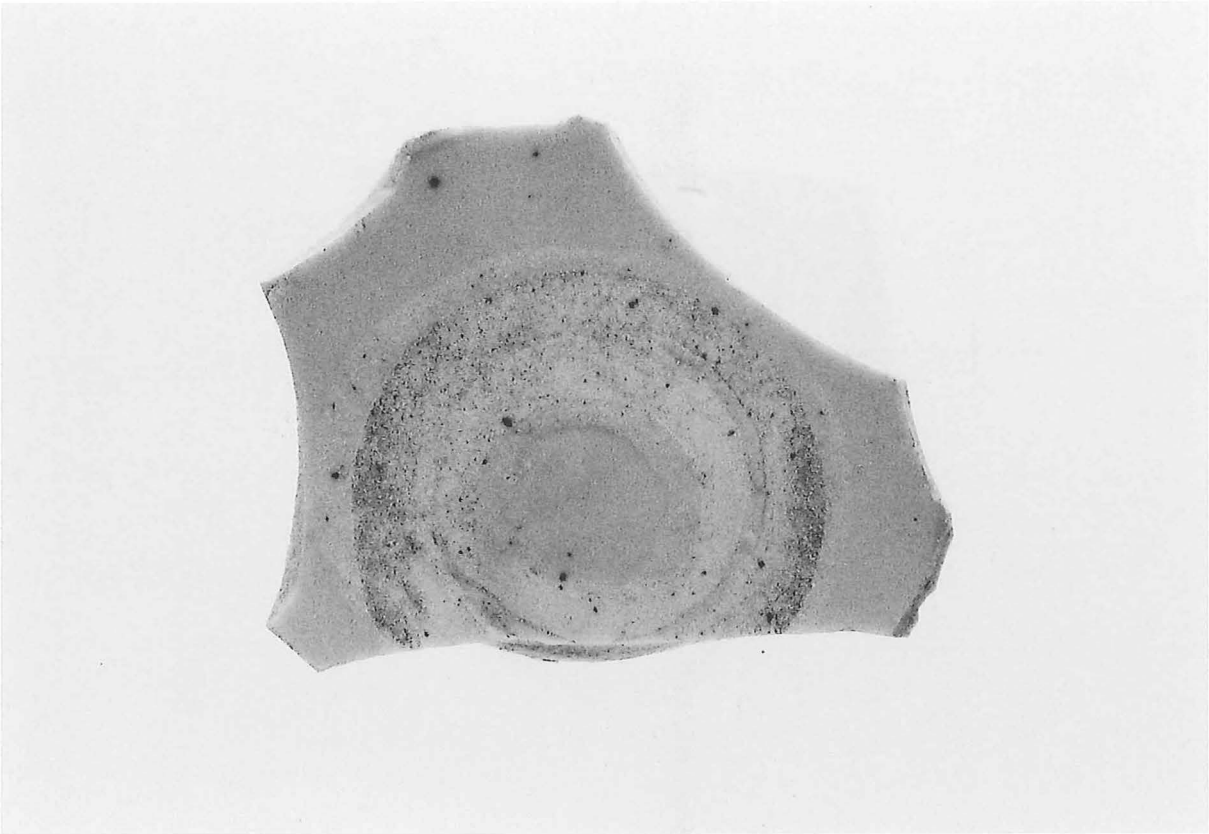
図版32　出土陶磁器④



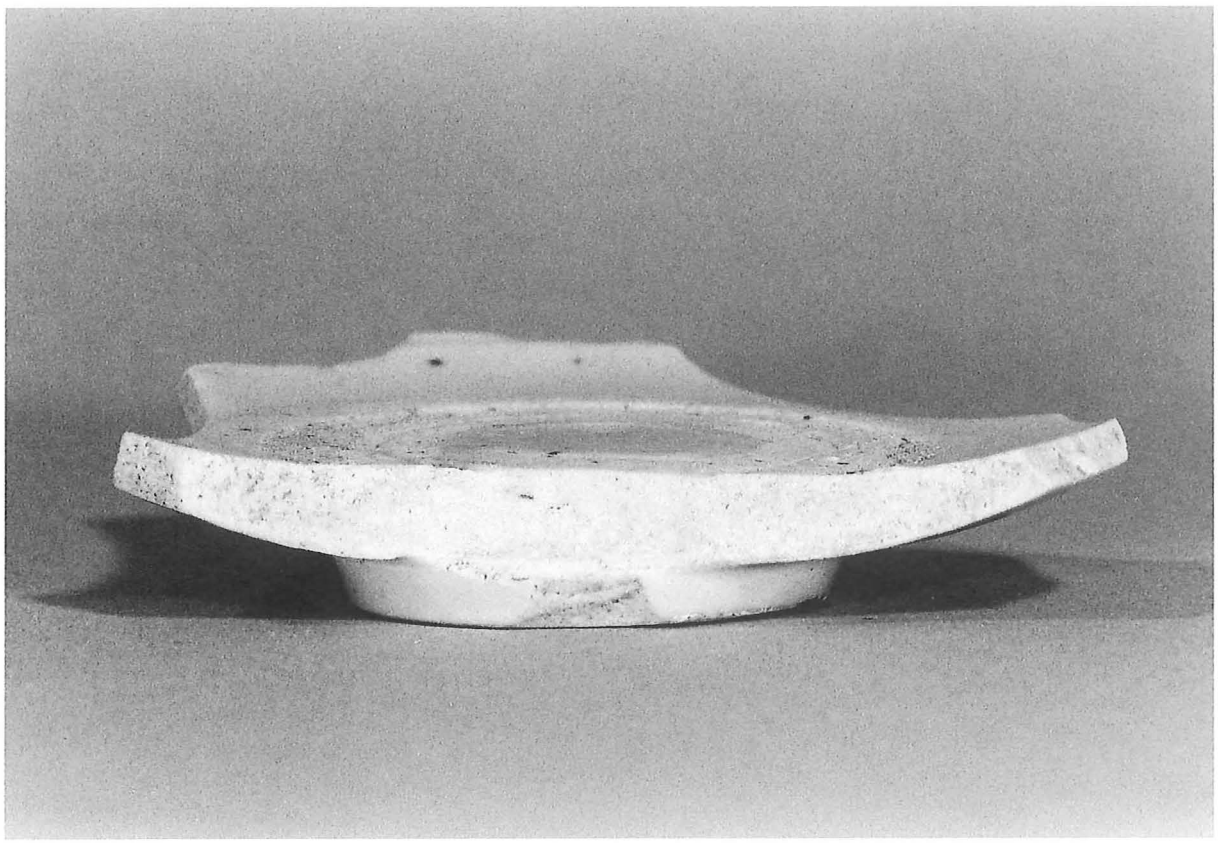
6

7

図版33　出土陶磁器⑤

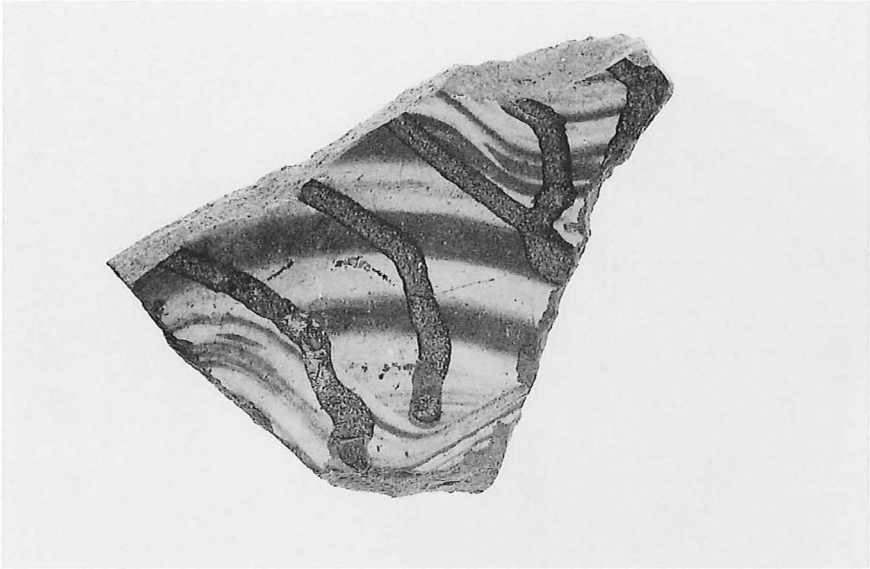


8－1

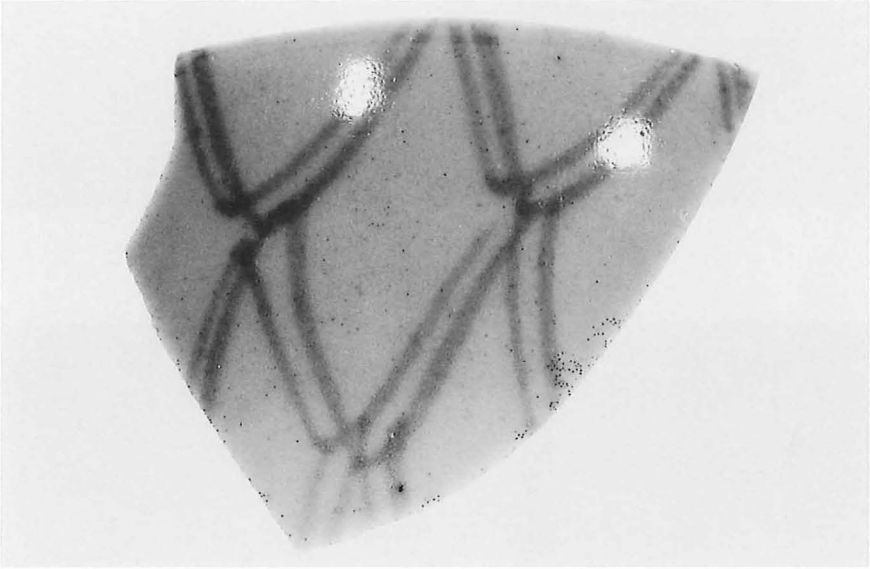


8－2

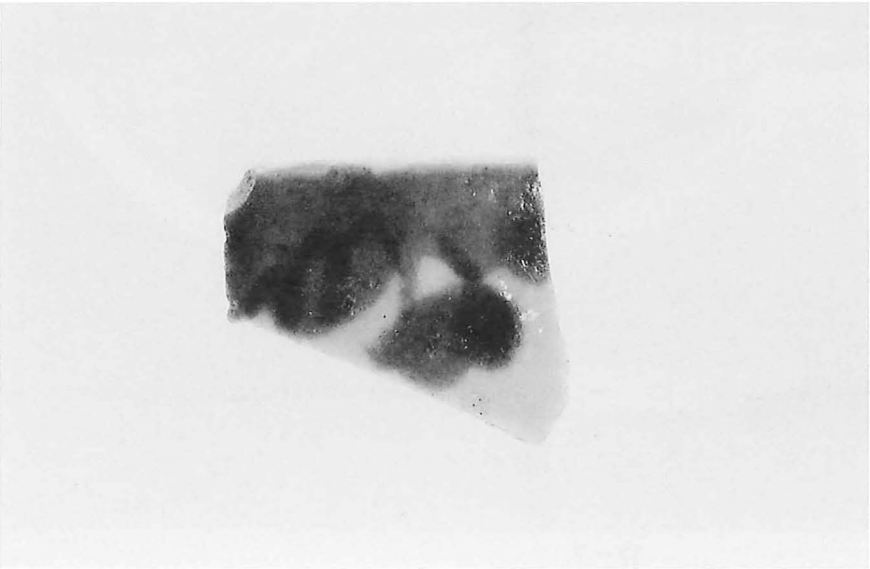
図版34　出土陶磁器⑥



9

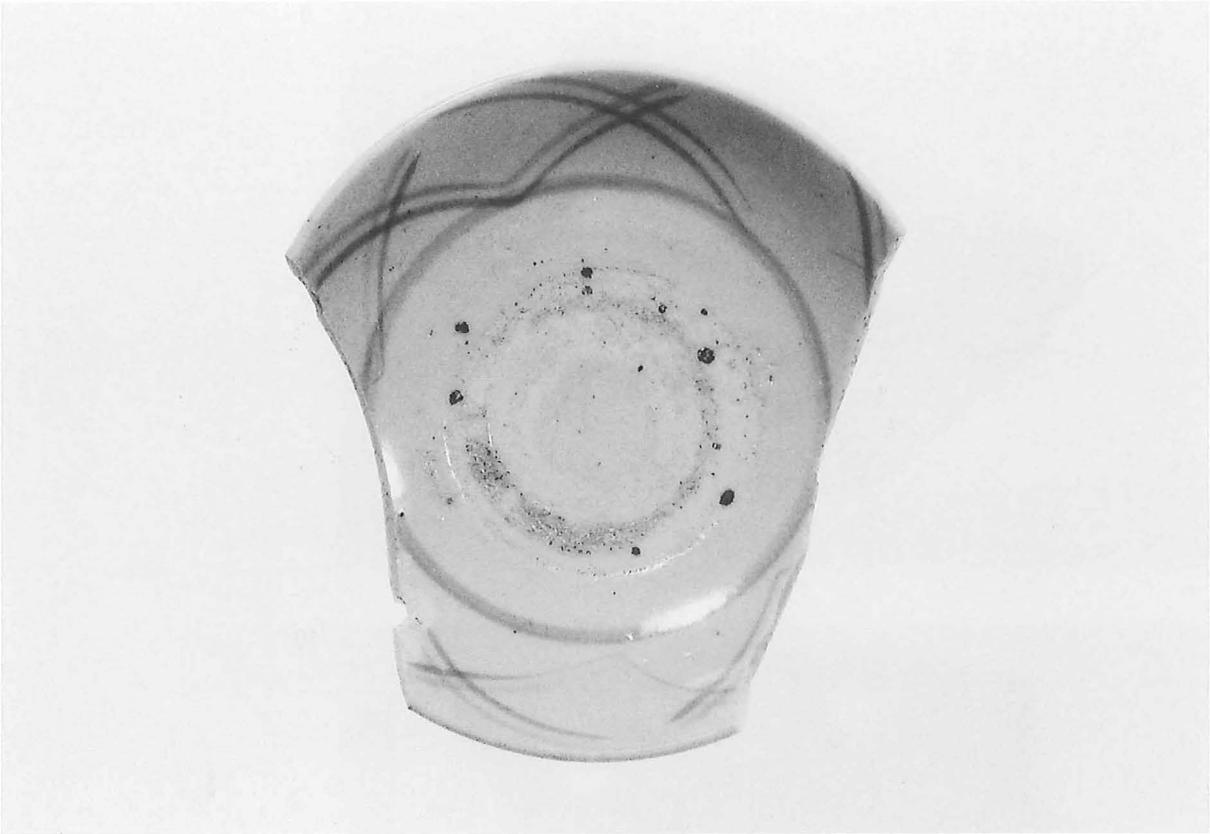


10



11

図版35　出土陶磁器⑦

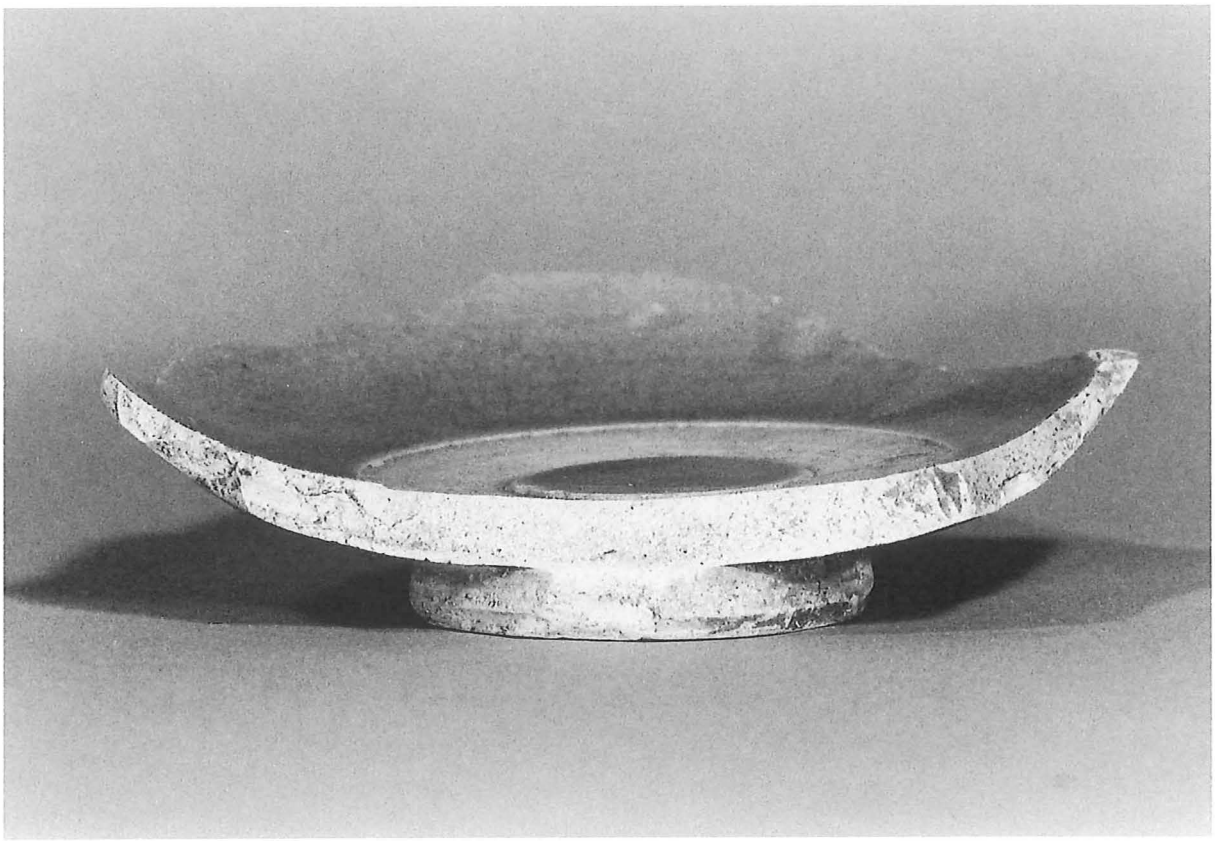


12－1

12－2

図版36　出土陶磁器⑧

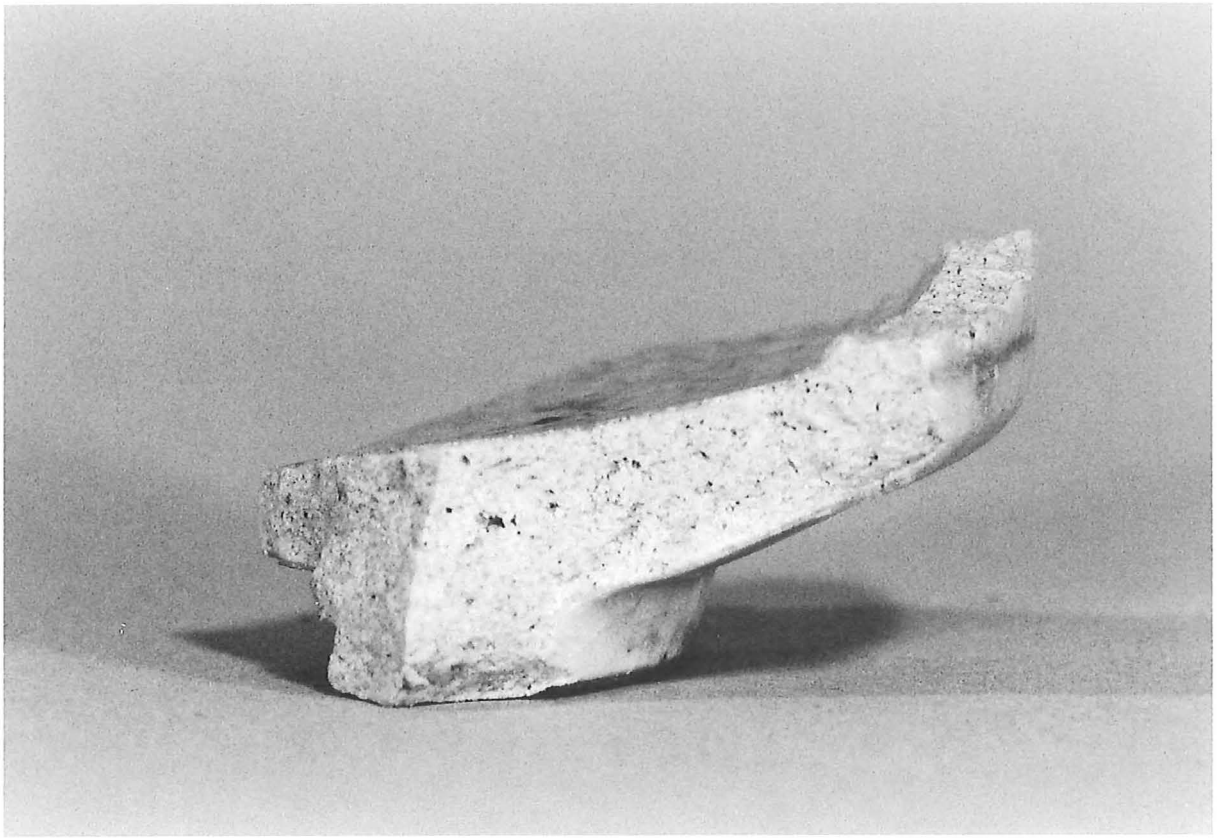
13－1



13－2

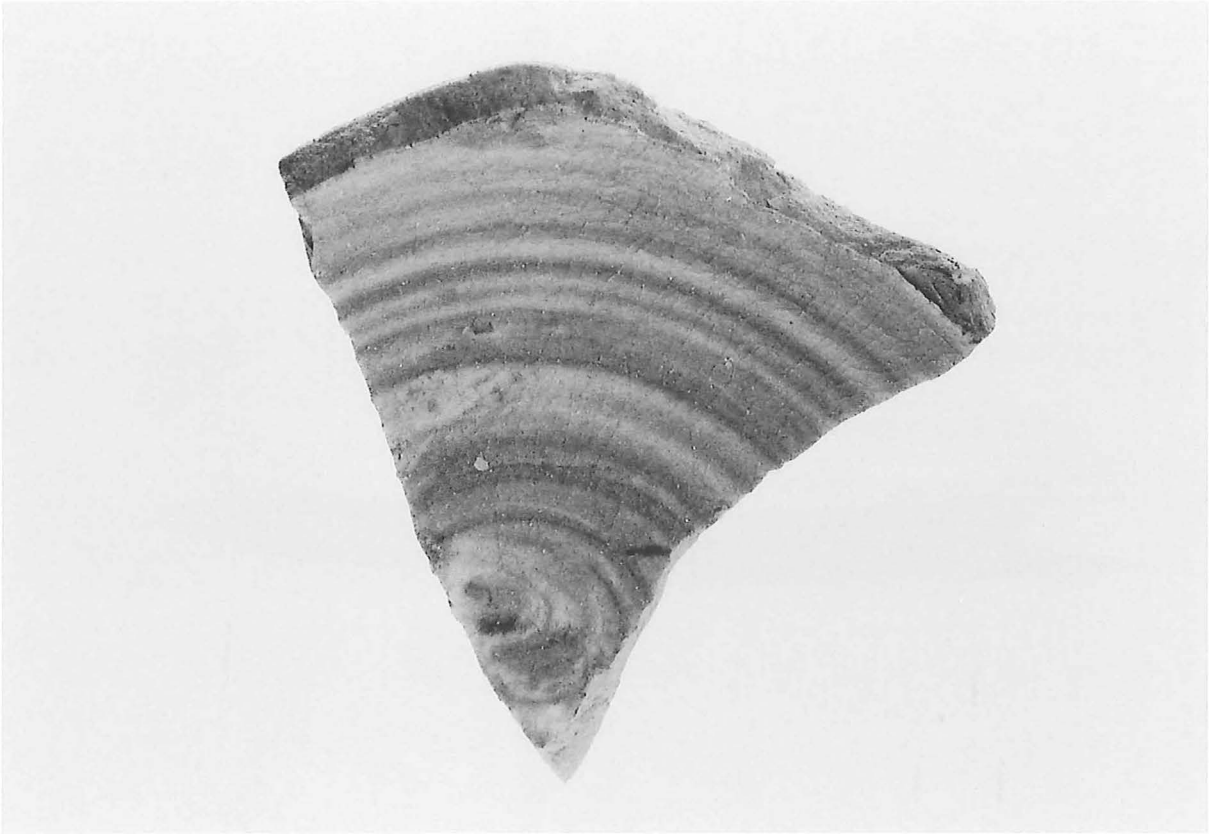
図版37　出土陶磁器⑨

14

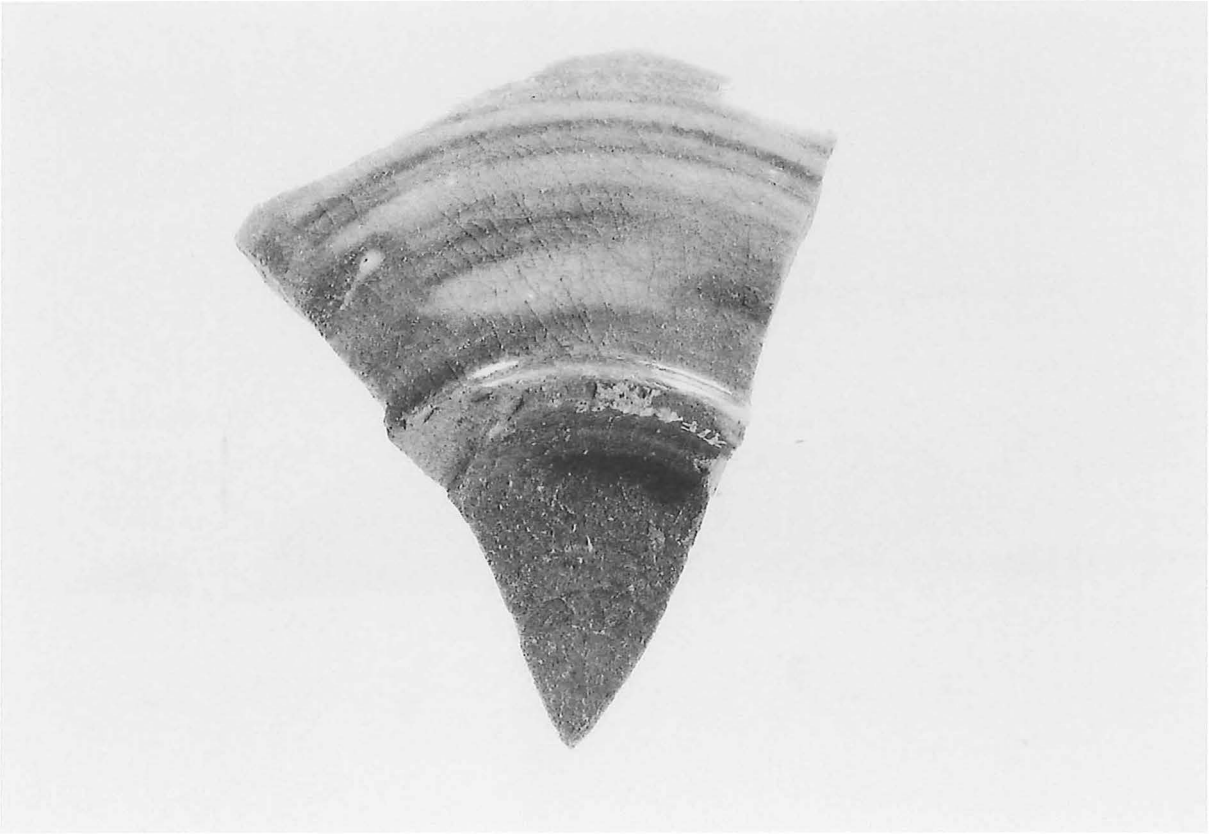


15

図版38　出土陶磁器⑩



16－1



16－2

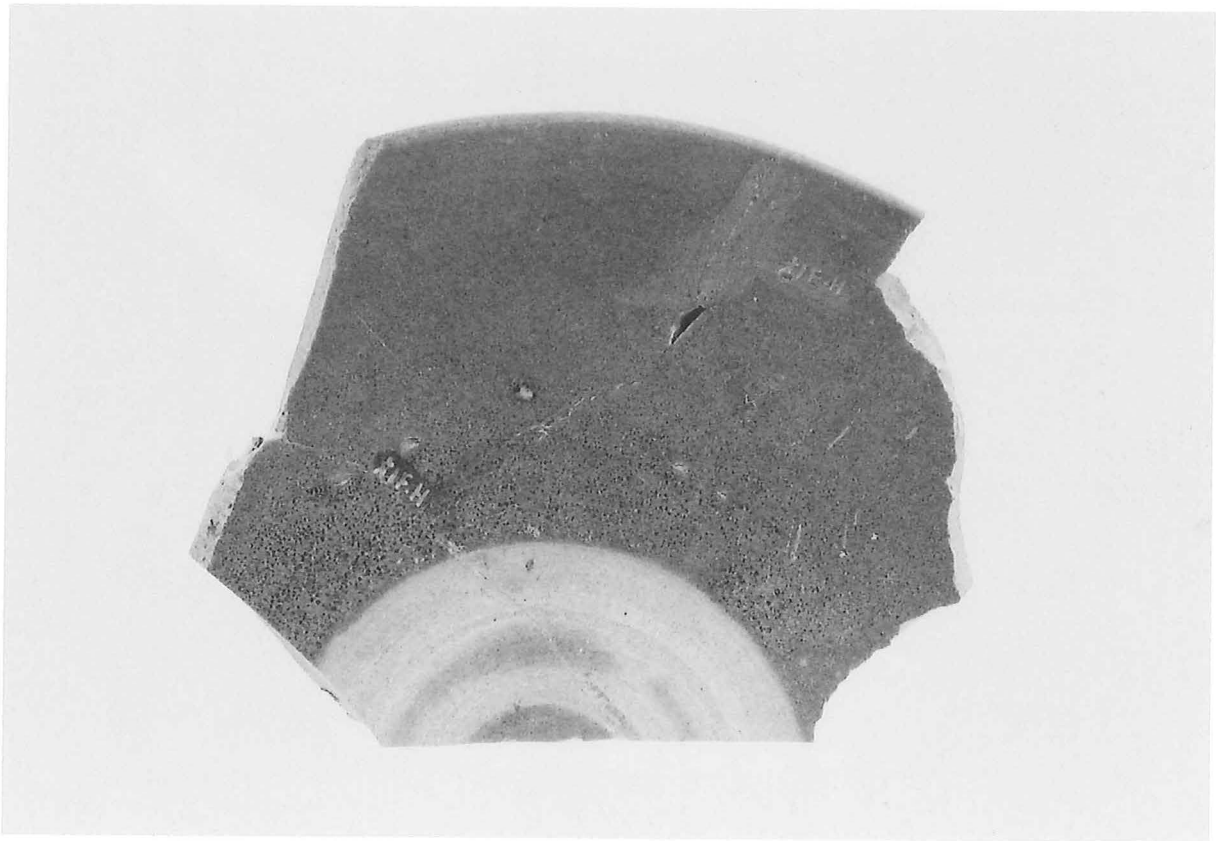
図版39　出土陶磁器⑪

17－1

17－2

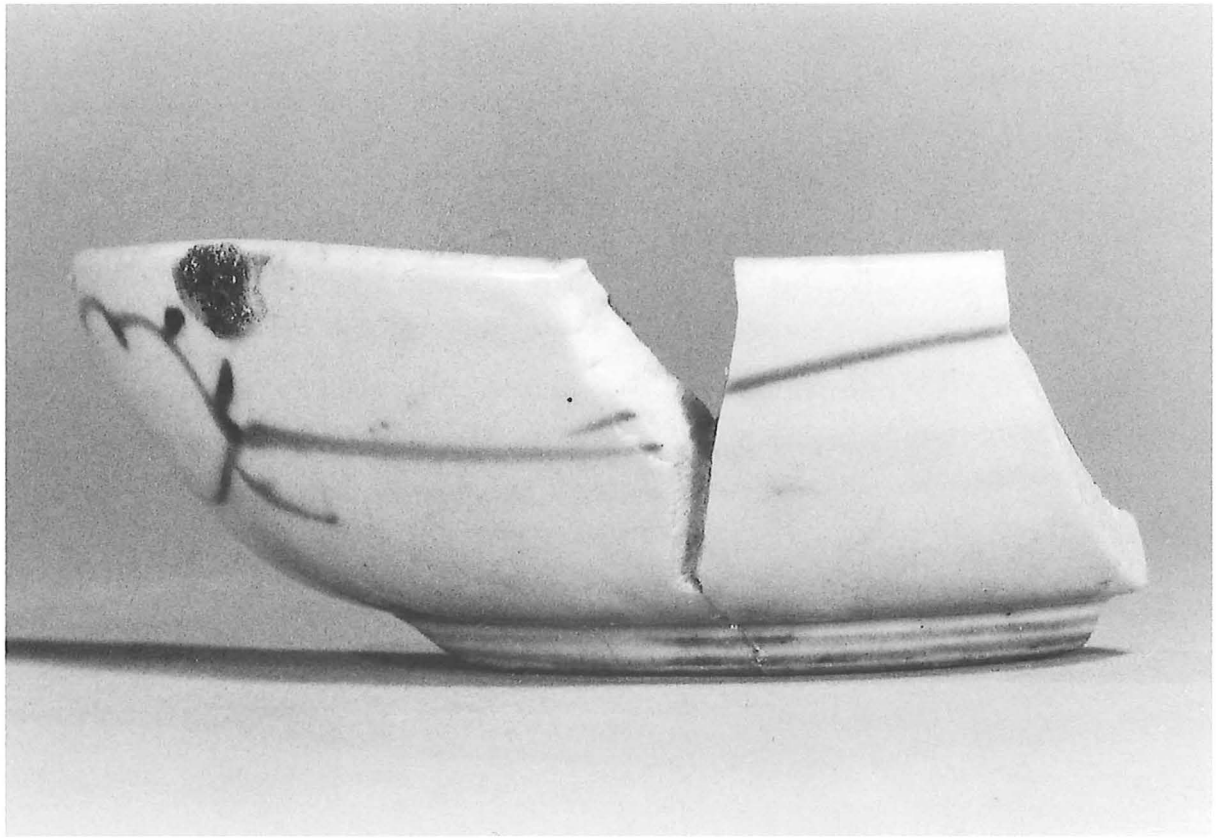
図版40　出土陶磁器⑫

18



19

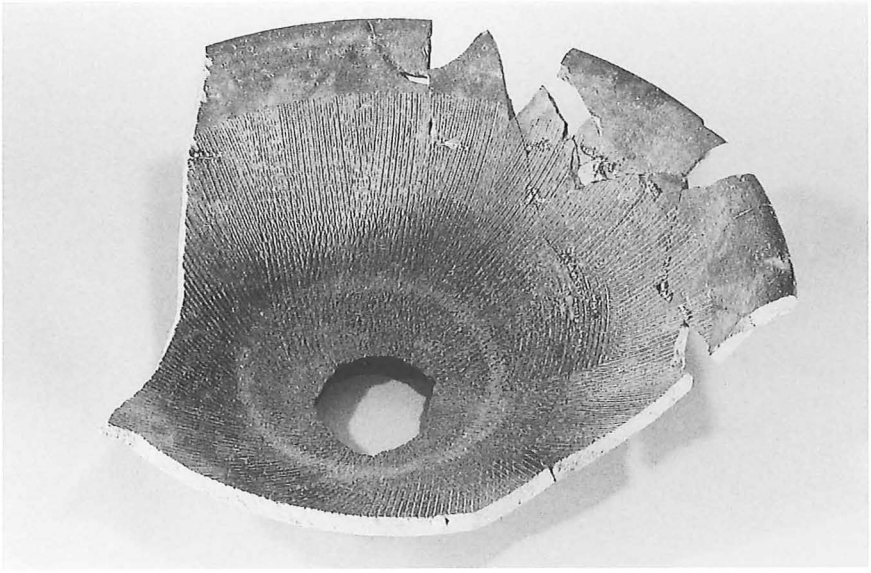
図版41　出土陶磁器⑬



20

21

図版42　出土陶磁器⑭

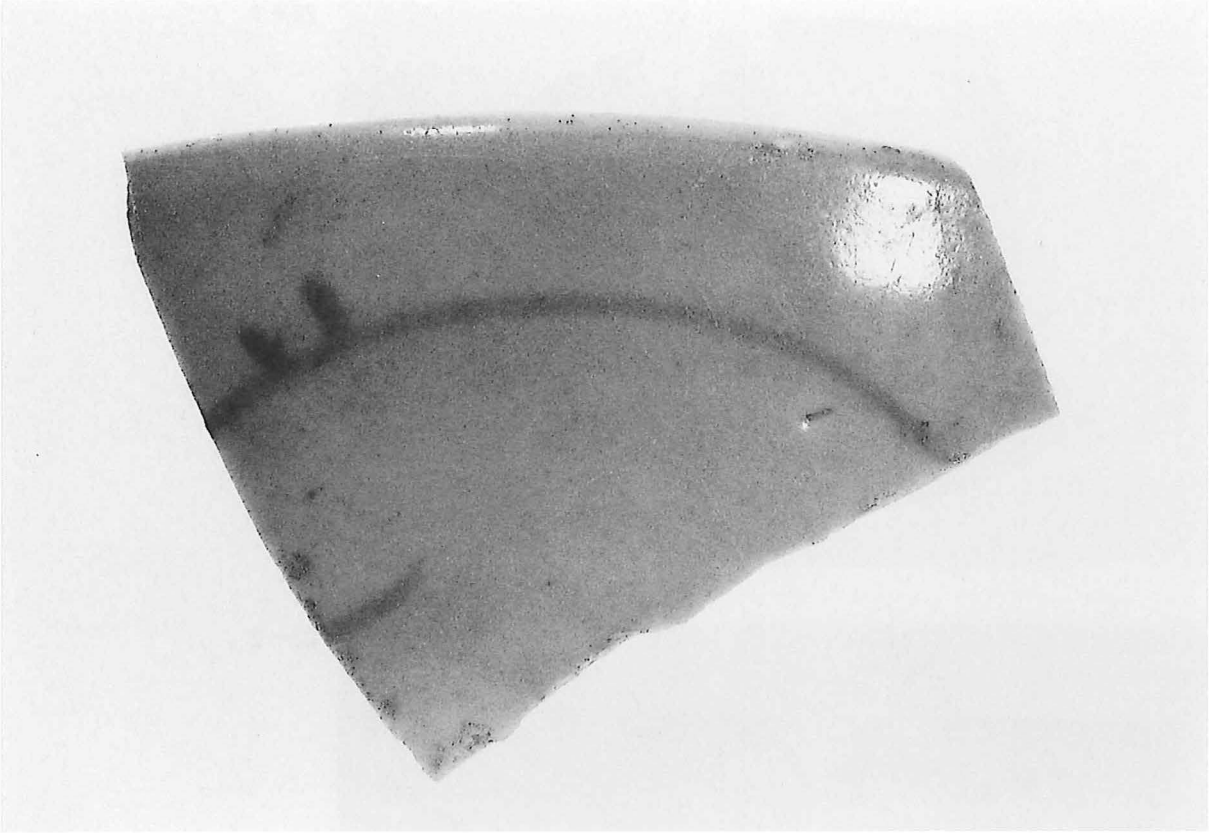


22－1

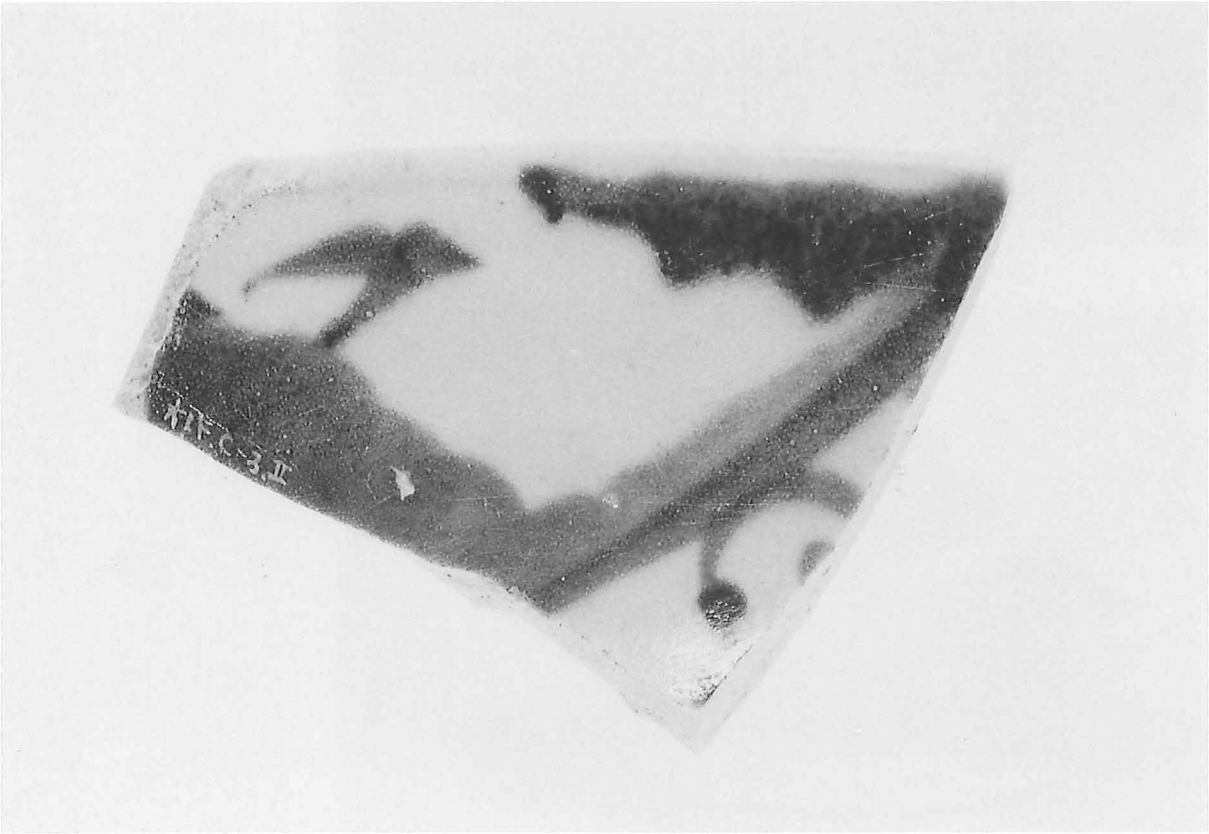
22－2

22－3

図版43　出土陶磁器⑮



23－1



23－2

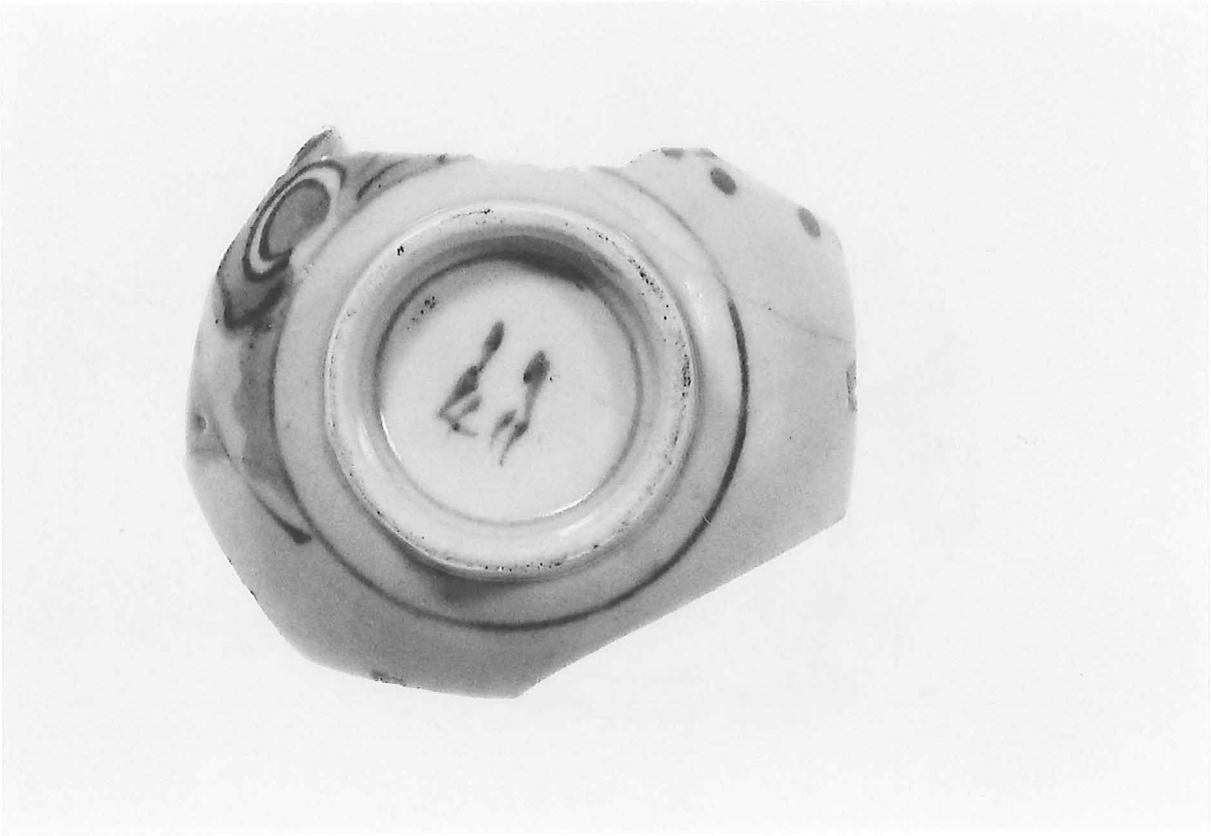
図版44　出土陶磁器⑯

24－1

24－2

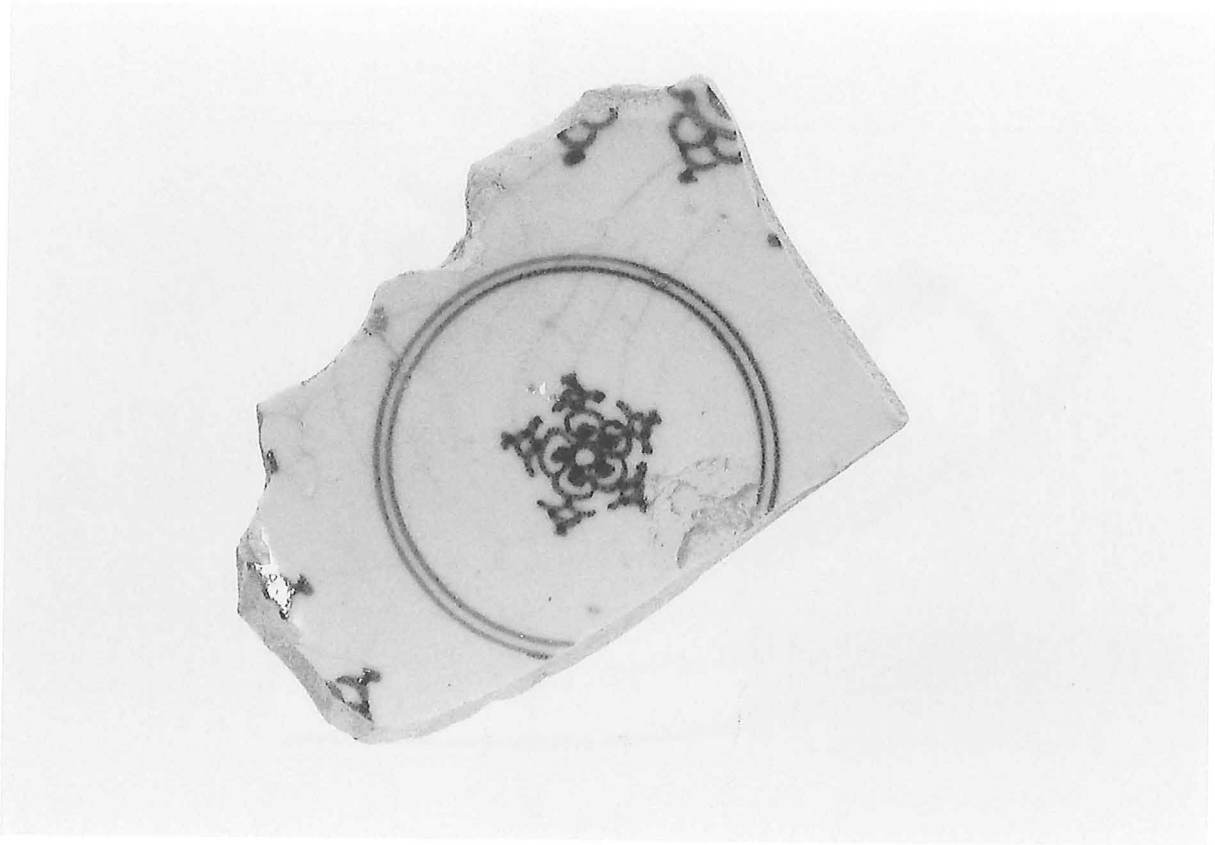
図版45　出土陶磁器⑰

25－1

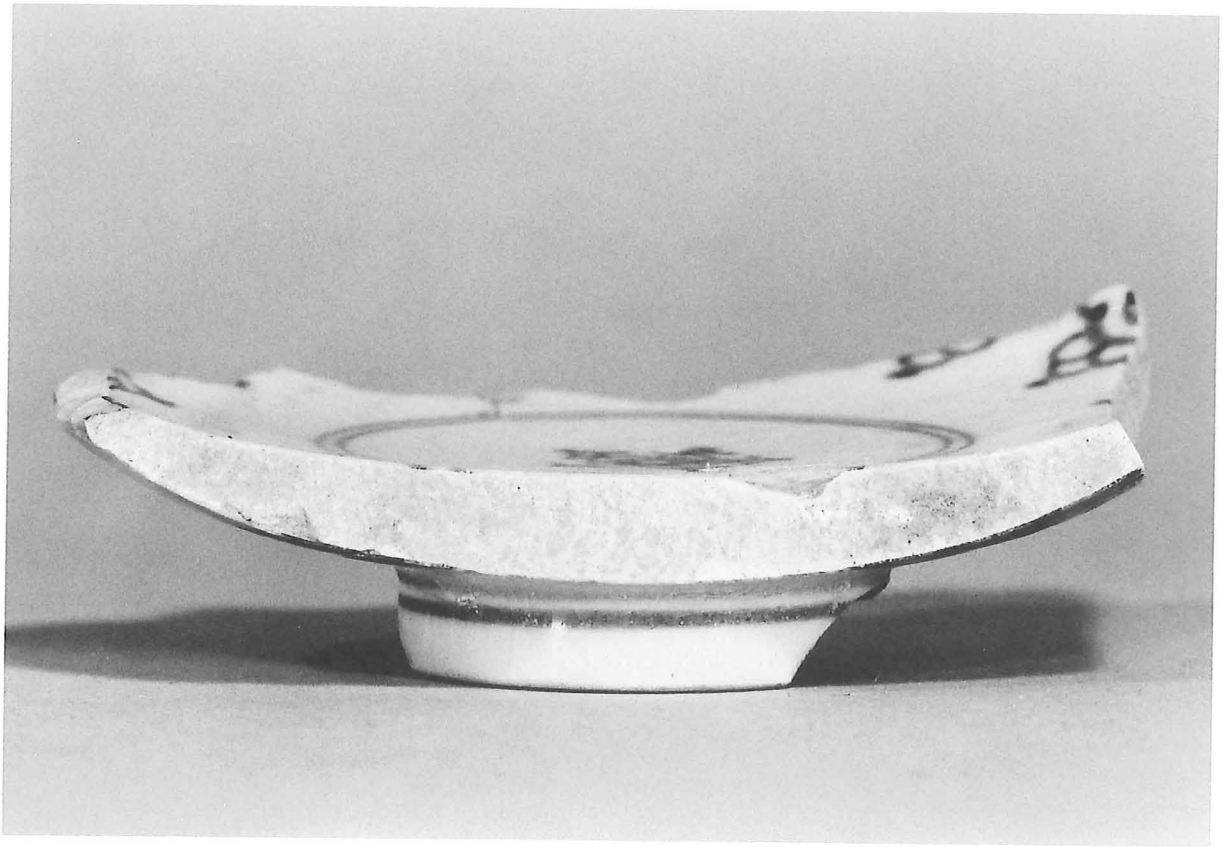


25－2

図版46　出土陶磁器⑱



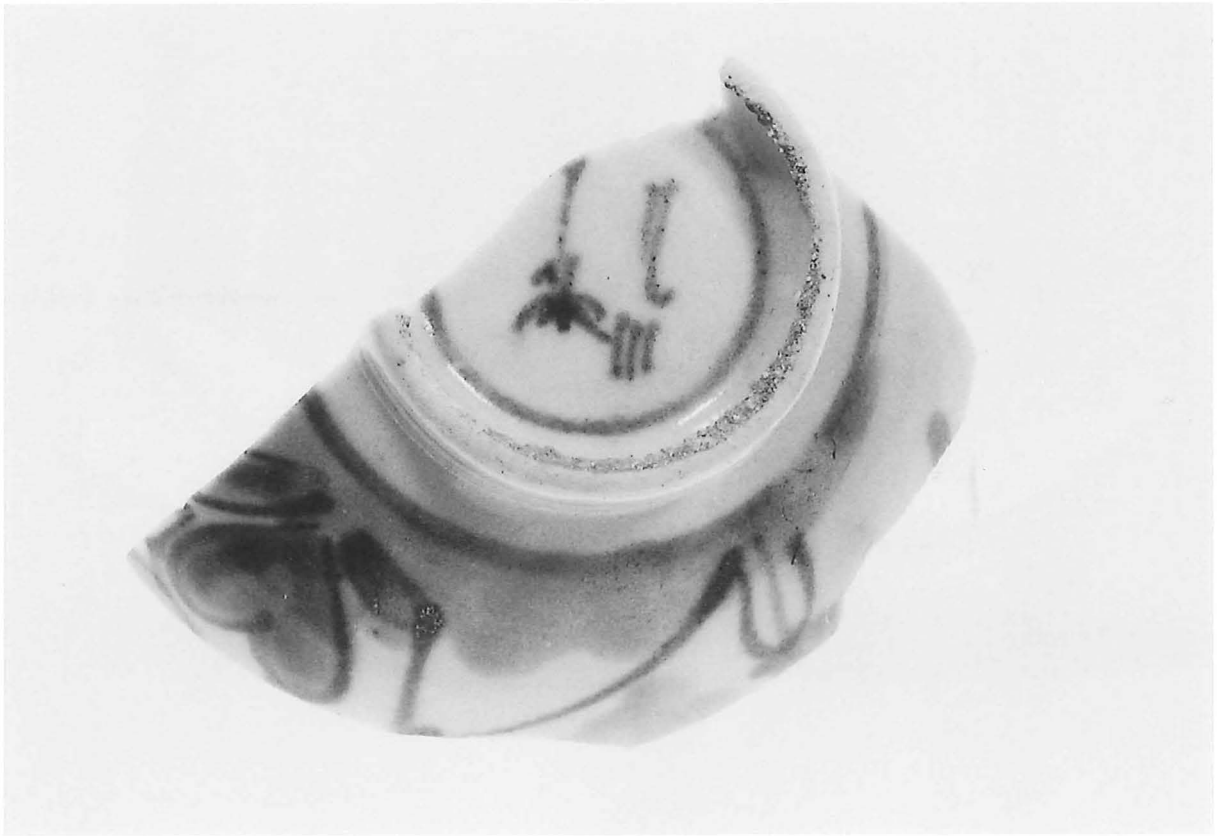
26－1



26－2

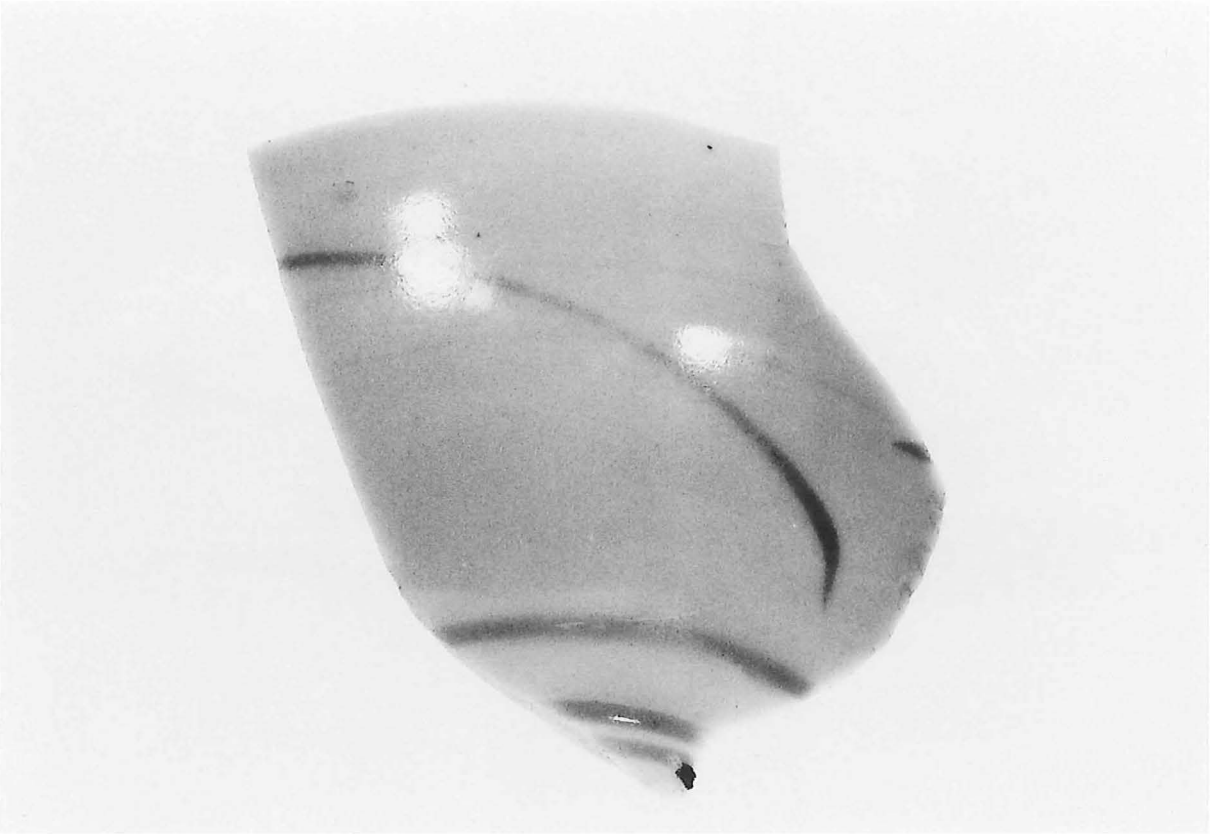
図版47　出土陶磁器⑲

28－1



28－2

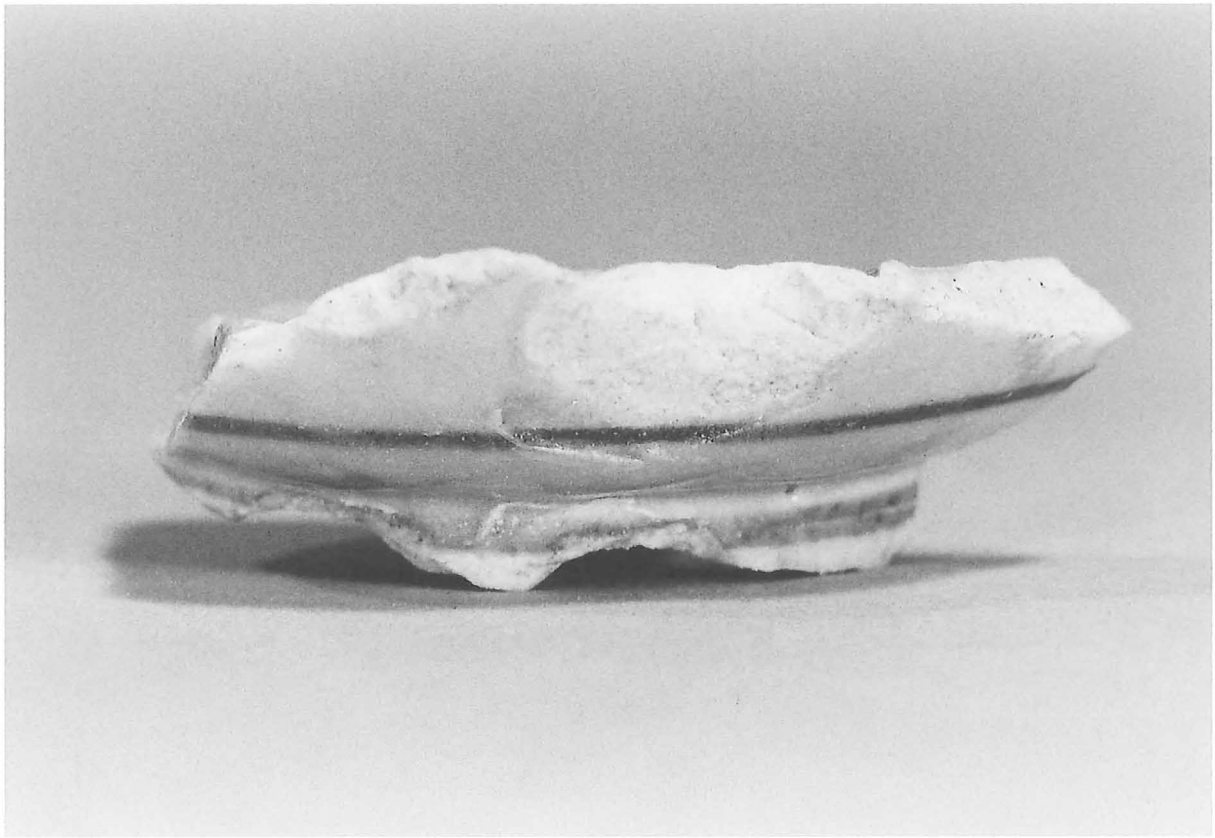
図版48　出土陶磁器⑳



27

29

図版49　出土陶磁器㉑

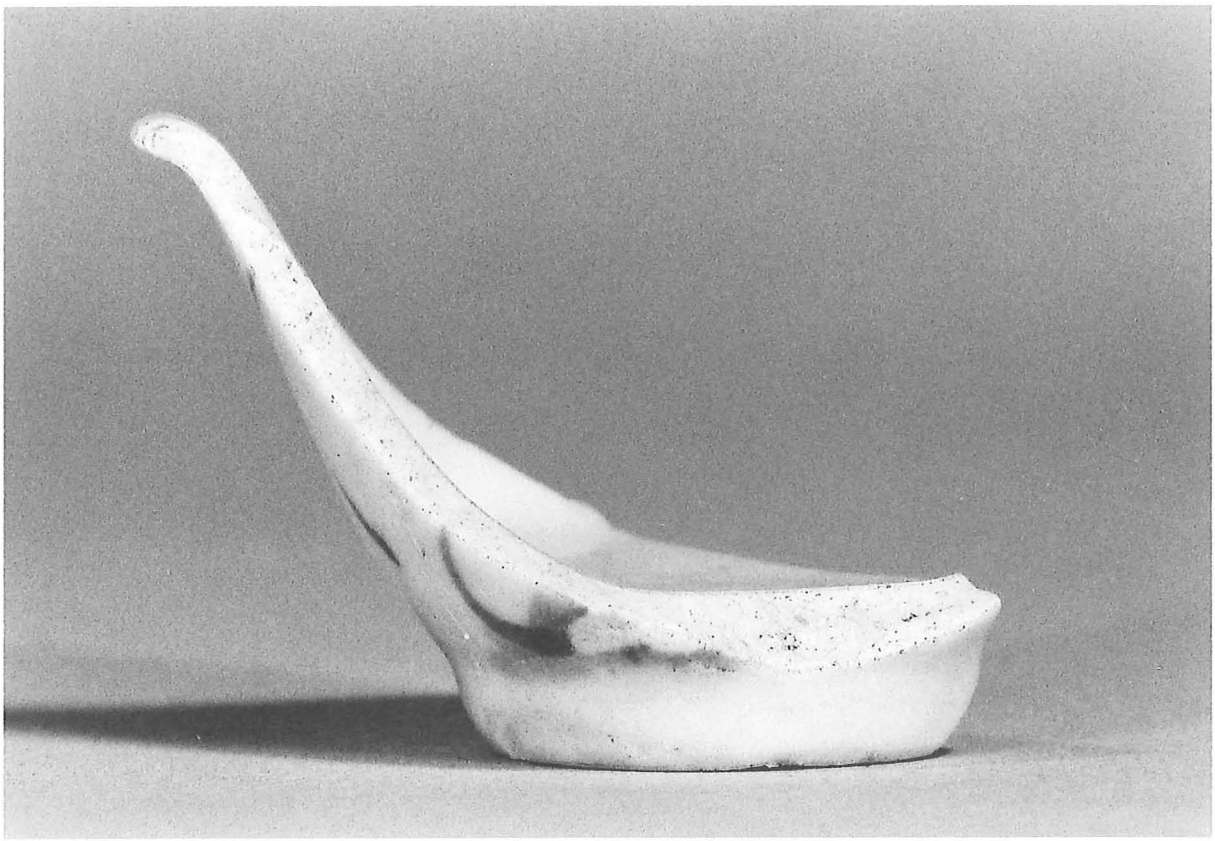


30

31

図版50　出土陶磁器㉒

32



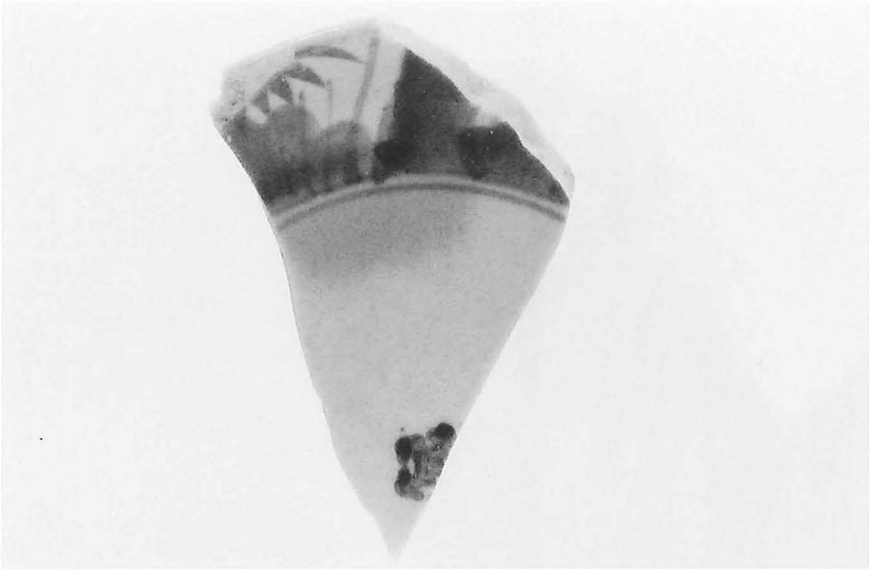
33

図版51　出土陶磁器㉓

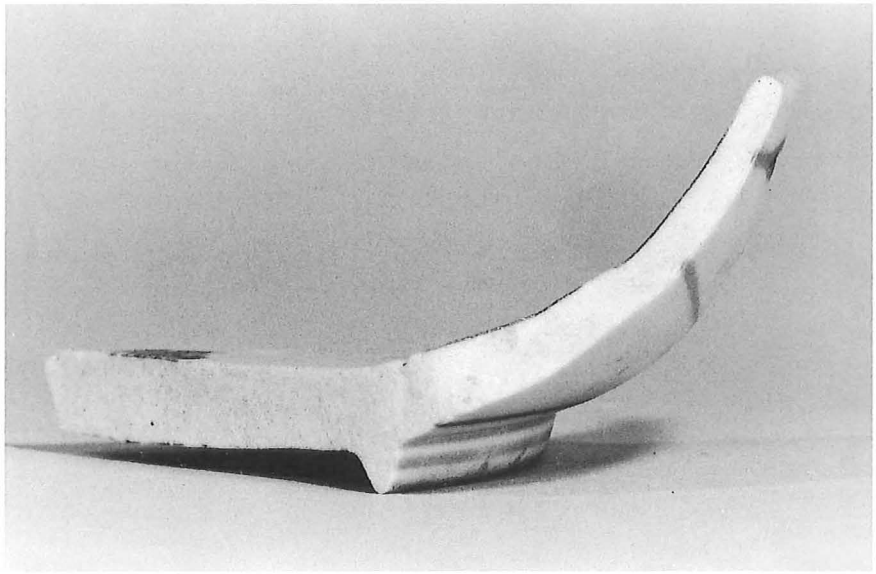
34

35

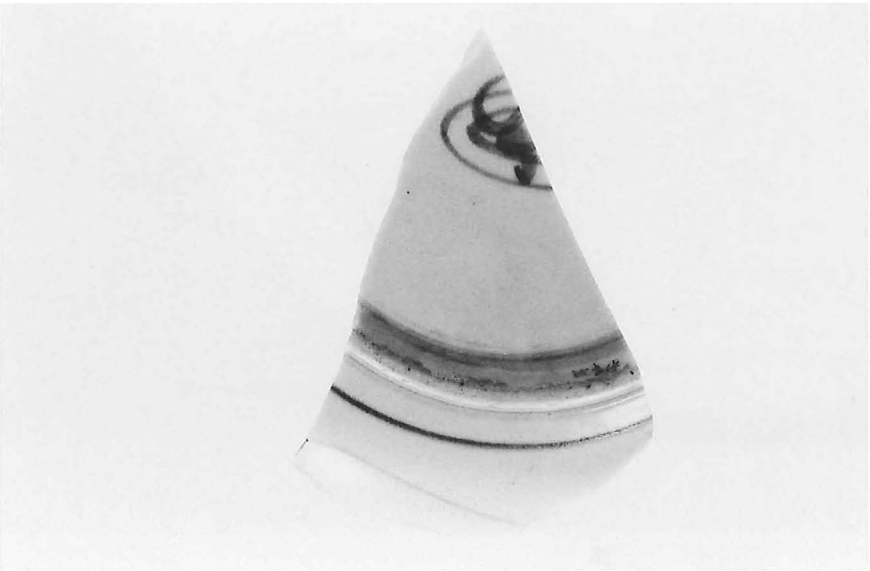
図版52　出土陶磁器㉔



36－1



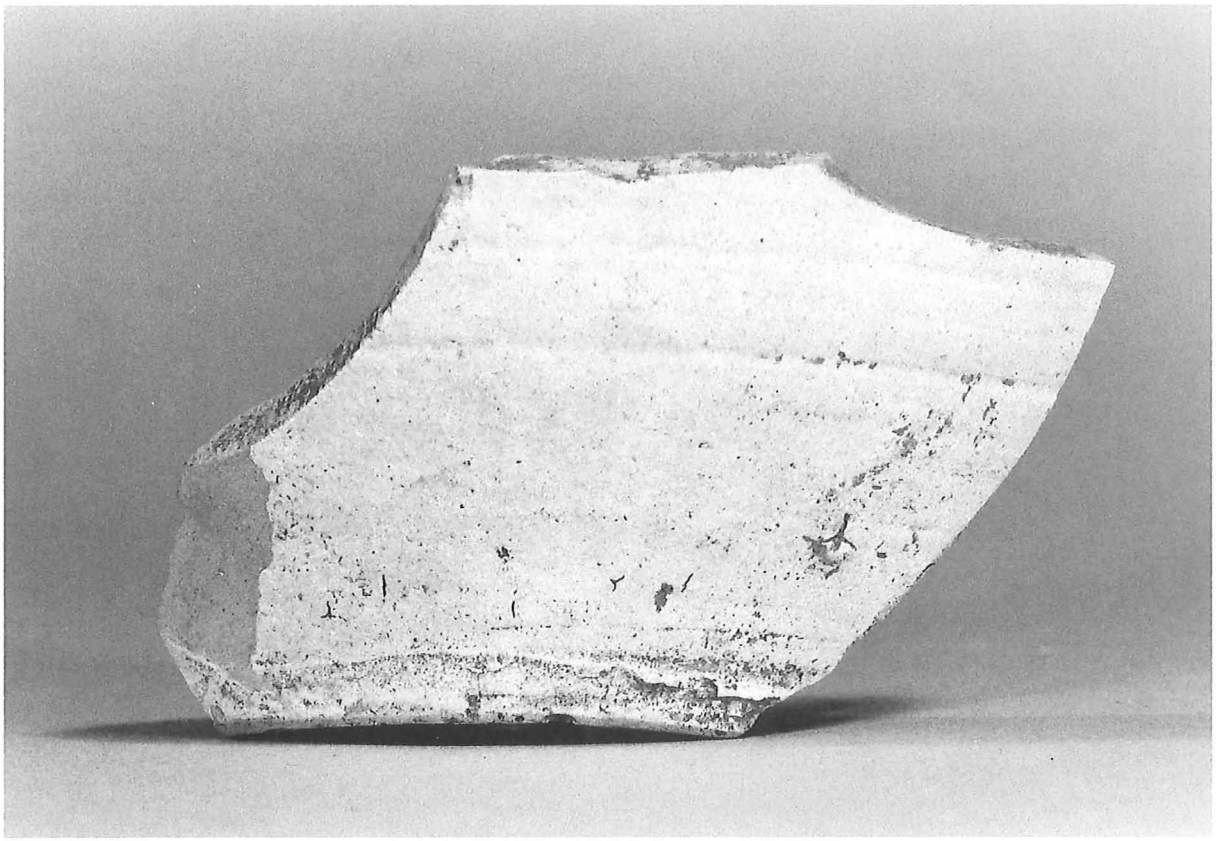
36－2



36－3

図版53　出土陶磁器㉕

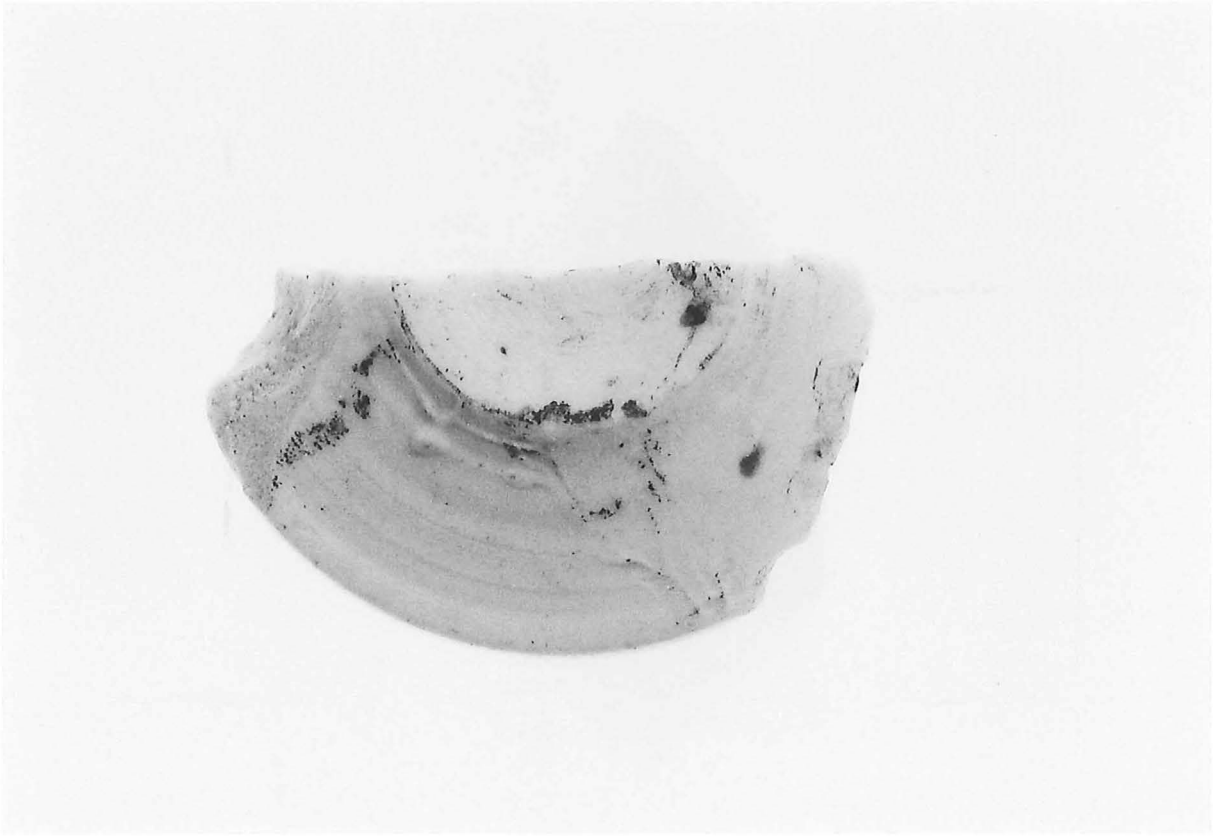
37



38

図版54　出土陶磁器㉖

39－1



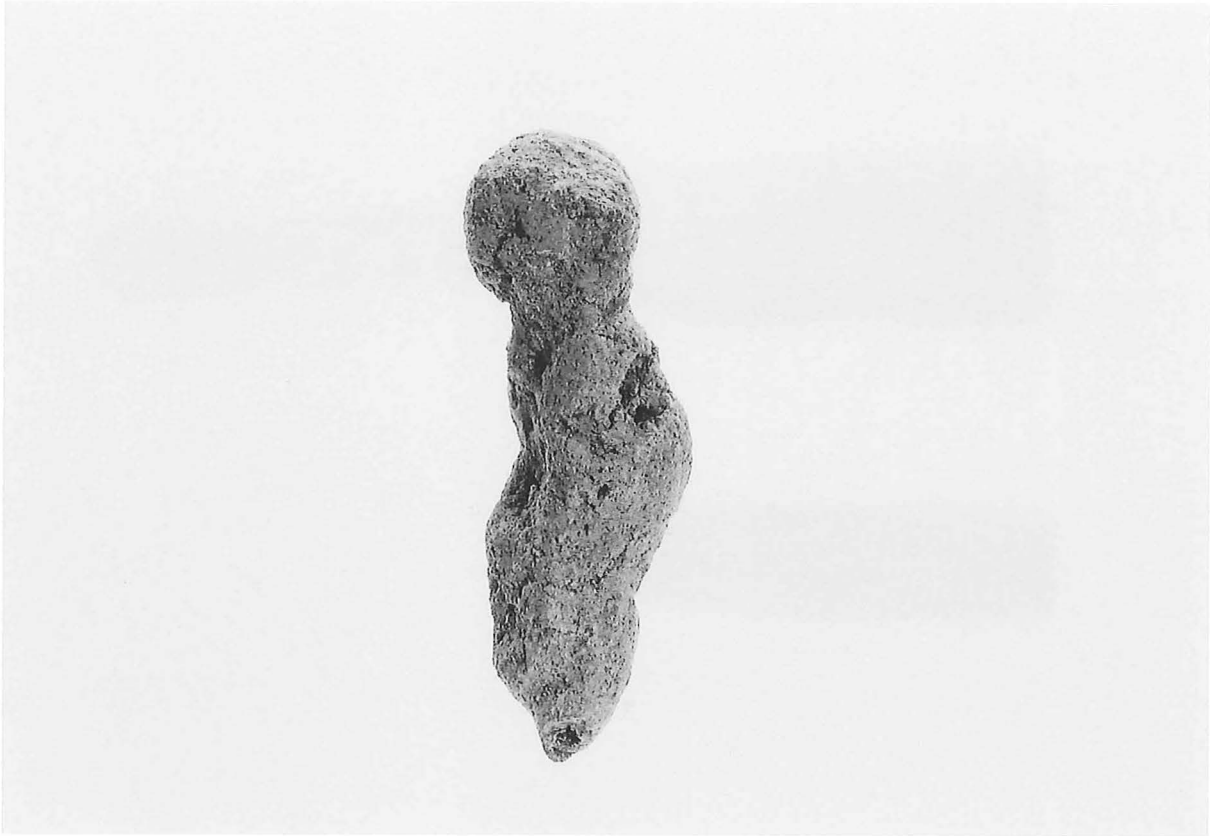
39－2

図版55　出土陶磁器㉗

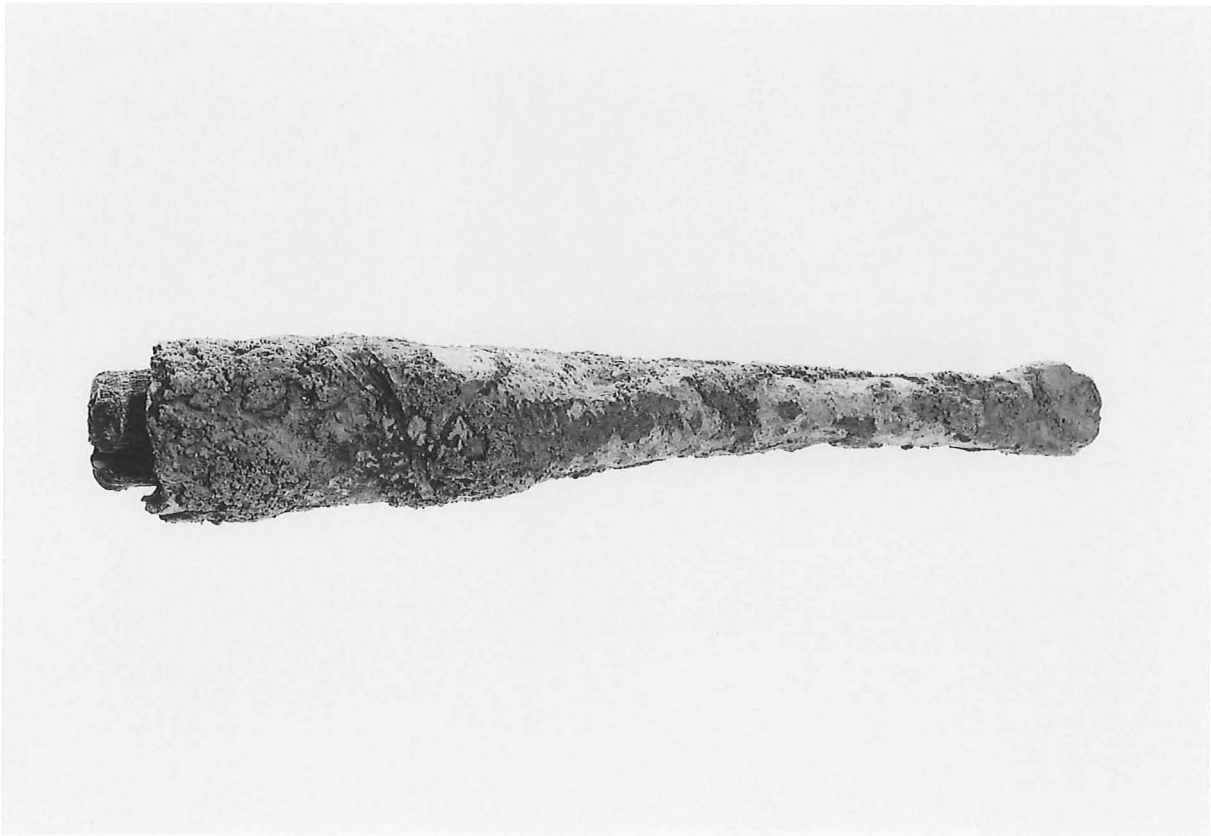
1－1

1－2

図版56　出土石・金属製品①

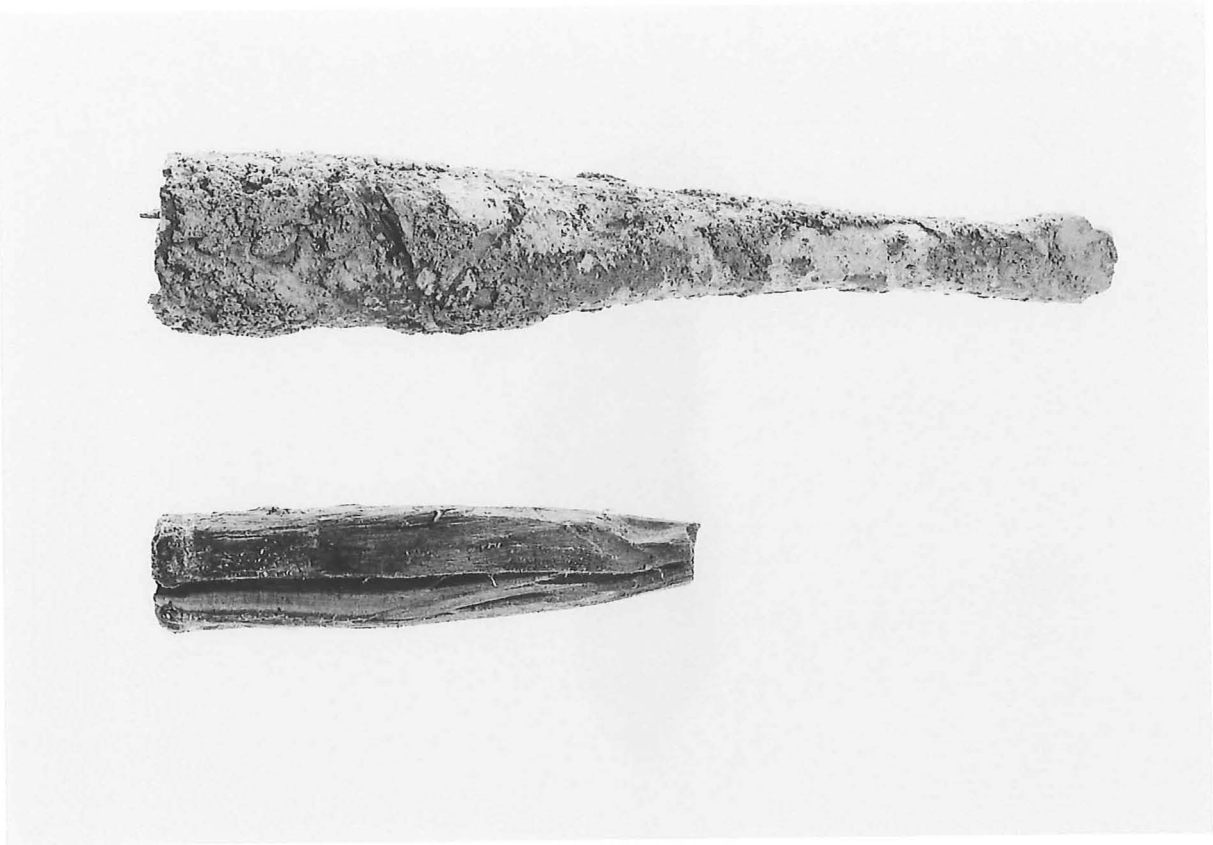


3



2－1

図版57　出土石・金属製品②



2－2

2－3

図版58　出土石・金属製品③

融着，変形している染付碗　1－1

融着，変形している染付碗　1－2

図版59　融着・変形等が見られる近世の磁器①

融着している染付皿

融着している染付皿片

図版60　融着・変形等が見られる近世の磁器②

内面に降灰が著しい磁器碗

内面に降灰が著しい磁器碗外面

図版61　融着・変形等が見られる近世の磁器③

炉跡検出状況（西から）

調査が終わった遺跡（東から）

図版62　炉跡と調査が終わった遺跡

Ⅲ　附　　編

長崎県、小野F遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．小野F遺跡における放射性炭素年代測定

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	B－3区，Ⅳa層中	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS

※AMS は加速器質量分析法：Accelerator Mass Spectrometry

2．測定結果

試料名	^{14}C年代 (年 BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年 BP)	暦年代（西暦）	測定No. (Beta-)
No.1	9350±50	−25.5	9340±50	交点：cal BC 8600 1σ：cal BC 8630～8545 2σ：cal BC 8730～8460	180897

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から，単純に現在（1950年 AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は，国際的慣例により Libby の5,568年を用いた。

2）δ^{13}C（デルタ）測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には，年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値，およびサンゴの U-Th 年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年 BP までの換算が可能となっている。ただし，10,000年 BP 以前のデータはまだ不完全であり，今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは，補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（シグマ）（68%確率）と2σ（95%確率）は，補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。

したがって，複数の交点が表記される場合や，複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

３．所見

Ⅳａ層中の炭化物について，加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った結果，9340±50年BP（１σの暦年代でBC 8630～8545年）の年代値が得られた。

文献

・Stuiver, M. , et. al., (1998), INTCAL 98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.
・中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p. 1-36.

Ⅱ．小野Ｆ遺跡における植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また，イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

２．試料

分析試料は，Ｂ－２区およびＢ－３区から採取された計８点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１ｇに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は，400倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}ｇ）をかけて，単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03），ヨシ属（ヨシ）は6.31，ススキ属（ススキ）は1.24，クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75，ミヤコザサ節は0.30である。

４．分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，キビ族型，ヨシ属，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族Ａ（チガヤ属など），ウシク

サ族B（大型），Cタイプ

〔イネ科－タケ亜科〕

クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など），ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節），未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），アワブキ科，その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1）B－3区（図1）

Ⅳc層（試料5）からⅢ層（試料0）までの層準について分析を行った。その結果，Ⅳc層（試料5）では，ミヤコザサ節型が比較的多く検出され，ヨシ属，ウシクサ族Aなども検出された。Ⅳb層（試料4）からⅣa層（試料3）にかけては，クマザサ属型が出現しており，ミヤコザサ節型は減少している。Ⅳa層の上層（試料2）では，イネ，キビ族型，および樹木のブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），アワブキ科などが出現している。イネの密度は1,400個／gと比較的低い値であり，稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個／gを下回っている。また，樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから，少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。Ⅲ層（試料0）では，ブナ科（シイ属）やマンサク科（イスノキ属）などの樹木が増加しており，クマザサ属型やミヤコザサ節型は見られなくなっている。

2）B－2区（図2）

Ⅳc層（試料2）では，ヨシ属，ウシクサ族A，ミヤコザサ節型，ブナ科（シイ属），マンサク科（イスノキ属）などが検出されたが，いずれも少量である。Ⅳb層（試料1）では，ウシクサ族Bやクマザサ属型が出現している。

5．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

Ⅳc層の堆積当時は，クマザサ属（おもにミヤコザサ節）などのササ類やウシクサ族などが生育するイネ科植生であったと考えられ，ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また，遺跡周辺には部分的にシイ属やイスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

縄文時代早期遺物包含層のⅣb層およびⅣa層でも，おおむね同様のイネ科植生であったと考えられるが，この時期には何らかの原因で照葉樹林は見られなくなったと推定される。

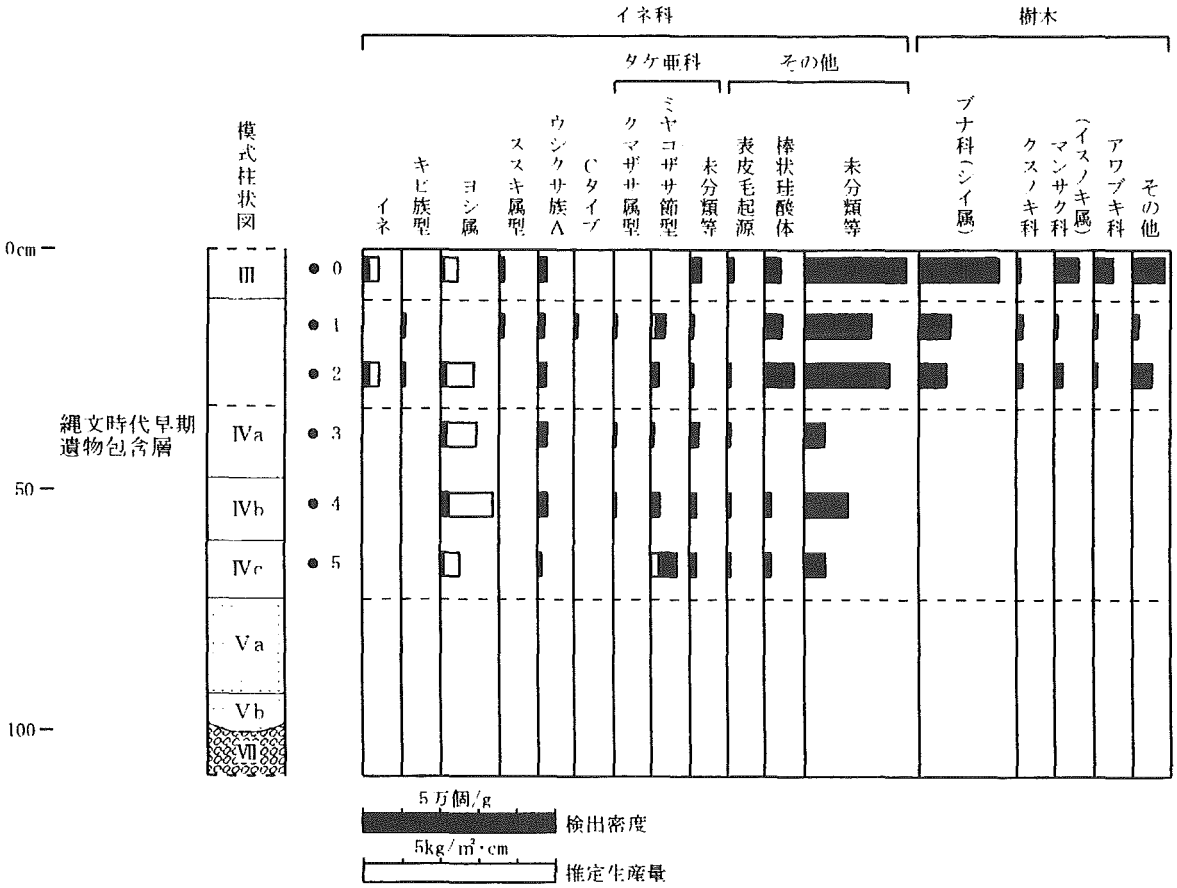
Ⅳa層の上層の堆積当時は，ススキ属やチガヤ属，キビ族，クマザサ属（おもにミヤコザサ節）などが生育するイネ科植生であったと考えられ，ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また，部分的に稲作が行われていた可能性が考えられるが，イネの密度が低いことから，上層から後代のものが混入した可能性も考えられる。当時の遺跡周辺には，シイ属，クスノキ科，イスノキ属，アワブキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

Ⅲ層の堆積当時は，調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられ，クマザサ属などのササ類はあまり見られなくなったと推定される。また，遺跡周辺ではシイ属やイスノキ属などの照葉樹林が拡大したと考えられる。

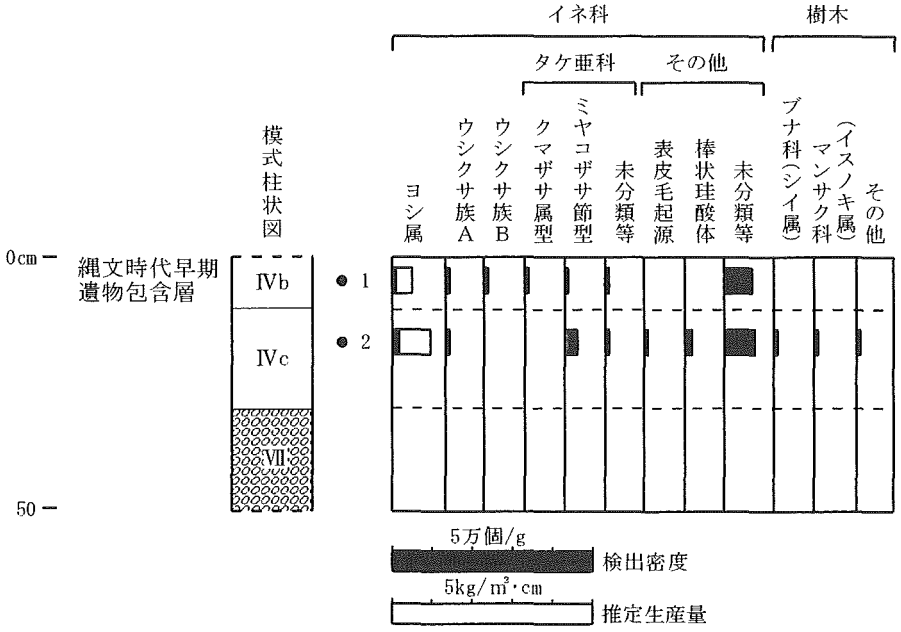
分類群	学名	地点・試料	B－3区						B－2区	
			0	1	2	3	4	5	1	2
イネ科	Gramineae（Grasses）									
イネ	*Oryza sativa*（domestic rice）		13		14					
キビ族型	Paniceae type			7	7					
ヨシ属	*Phragmites*		7		14	15	22	8	8	15
ススキ属型	*Miscanthus* type		7	7						
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		20	14	20	22	22	8	8	7
ウシクサ族B	Andropogoneae B type								8	
Cタイプ	C type			7						
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)									
クマザサ属型	*Sasa* sect. Sasa etc.			7		7	7		8	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi			36	20	7	22	68	8	30
未分類等	Others		27	7	7	22	15	15	8	7
その他のイネ科	Others									
表皮毛起源	Husk hair origin		13		7	7	7	8		7
棒状珪酸体	Rod-shaped		40	43	75		15	15		15
未分類等	Others		263	172	219	52	112	53	68	75
樹木起源	Arboreal									
ブナ科（シイ属）	*Castanopsis*		202	79	68					7
クスノキ科	Lauraceae		7	14	14					
マンサク科（イスノキ属）	*Distylium*		61	7	20					7
アワブキ科	Sabiaceae		47	7	7					
その他	Others		81	14	48					7
植物珪酸体総数	Total		788	424	540	135	224	173	113	180
おもな分類群の推定生産量（単位：kg／m²・cm）										
イネ	*Oryza sativa*（domestic rice）		0.40		0.40					
ヨシ属	*Phragmites*		0.42		0.86	0.94	1.42	0.47	0.47	0.95
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.08	0.09						
クマザサ属型	*Sasa* sect. Sasa etc.			0.05		0.06	0.06		0.06	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi			0.11	0.06	0.02	0.07	0.20	0.02	0.09
タケ亜科の比率（%）										
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*									
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*									
クマザサ属型	*Sasa*（except *Miyakozasa*）			33		71	45		71	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*			67	100	29	55	100	29	100

表6　長崎県，小野F遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

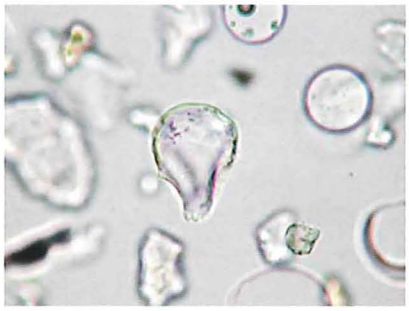


第37図　長崎県．小野Ｆ遺跡Ｂ－３区における植物珪酸体分析結果



第38図　長崎県．小野Ｆ遺跡Ｂ－２区における植物珪酸体分析結果

イネ
B－3区　2



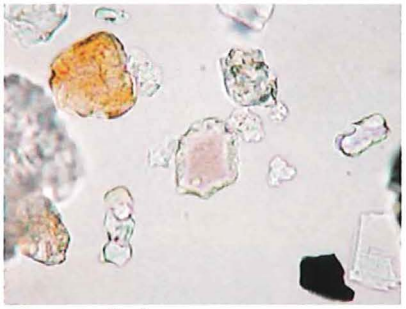
イネ
B－3区　2

キビ族型
B－3区　1

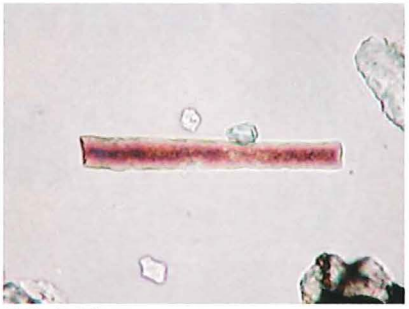
ヨシ属
B－3区　4

ウシクサ族A
B－3区　4

クマザサ属型
B－3区　4



ミヤコザサ節型
B－3区　4



棒状珪酸体
B－3区　5

ブナ科（シイ属）
B－3区　0

ブナ科（シイ属）
B－3区　0

クスノキ科
B－3区　1

アワブキ科
B－3区　0

写真21　植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真　―――― 50μm

文献

・杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)，p.109-123.

・杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

・藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

・藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

Ⅲ．小野Ｆ遺跡における花粉分析

１．はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

試料は，Ｂ－３区から採取された試料２と試料５の計２点である。これらは，植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

３．方法

花粉粒の分離抽出は，中村（1973）の方法をもとに，以下の手順で行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎

２）水洗処理の後，0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

４）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す

５）再び氷酢酸を加えて水洗処理

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

４．結果

⑴　分類群

出現した分類群は，草本花粉１，シダ植物胞子２，形態の計３である。分析結果を表１に示に示し，主要な分類群は写真に示した。以下に出現した分類群を記す。

〔草本花粉〕

イネ科

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

⑵花粉群集の特徴

Ⅳａ層の上層（試料２）では，草本花粉のイネ科，シダ植物胞子の単条溝胞子，三条溝胞子が検出されたが，いずれも微量である。Ⅳｃ層（試料５）では，花粉が検出されなかった。

5．花粉分析から推定される植生と環境

B－3区のⅣa層の上層およびⅣc層では，花粉がほとんど検出されないことから，植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては，乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

・中村　純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
・金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
・島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.
・中村　純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

分類群		B－3区	
学名	和名	2	5
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科	2	
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	1	
Trilate type spore	三条溝胞子	2	
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	2	0
Total pollen	花粉総数	2	0
Unknown pollen	未同定花粉	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	3	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(－)	(－)
	明らかな消化残渣	(－)	(－)

表7　小野F遺跡における花粉分析結果

報告書抄録

ふりがな	いっぱんこくどう497ごう　さざさせぼどうろ　まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	一般国道497号佐々佐世保道路埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	小野F遺跡
巻次	I
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第186集
編著者名	副島和明・川畑敏則・織田健吾・下山正一
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－8570　長崎県長崎市江戸町２番13号　TEL095－824－1111
発行年月	西暦2005年３月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
小野F遺跡（おのいせき）	佐世保市小野町（させぼしおのちょう）	42202	61－118	33°11′13″	129°41′17″	20040512～20040712	700	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小野F遺跡	遺物包含地	・縄文 ・近世	・縄文時代早期の炉跡．土坑 ・近世の土坑．柱穴	・局部磨製石鏃 ・近世の陶磁器	・縄文時代早期の炉跡を検出 ・融着．変形等が見られる近世の磁器碗．皿が出土

長崎県文化財調査報告書　第186集

一般国道497号佐々佐世保道路建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　I

小野F遺跡

平成17年（2005）3月発行

発行者　長崎県教育委員会
〒850-8570　長崎市江戸町2番13号
☎095－824－1111

印刷所　株式会社　昭和堂
長崎県諫早市長野町1007-2
☎0957－22－6000